
刹滄(殺戮)学園

薫琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刹涿（殺戮）学園

【Nコード】

N0961I

【作者名】

薫琉

【あらすじ】

さつりくがくえん

刹涿学園—全国においてトップクラスに君臨する高等学校。表面上は素晴らしい肩書きを持つこの高校。だが裏では殺戮生徒養成学園だった！？とりあえず僕はこの流れにまかせることにした。

感想・評価してくれると嬉しいです！誤字・脱字、口調の間違いがあれば遠慮なく言ってください！

プロローグ

どんなに泣いたって戻ってくるはずがない。

どんなに叫んだって帰ってくるはずがない。

だけど僕らは彼を慕っていて

この闇の世界でたった一つの”希望”だった。

彼がこの闇から救い出してくれると信じていた。

だけど彼は朱く黒く僕らが好む色へと姿を包んでいった。

結局、彼だけはこの世界から抜け出せていたのかもしれない。

その結果は誰もが嫌う最終手段だったけど。

『先輩……貴方だけ、この学園から逃れられたんですね。』

彼の白い頬がもっと白くなって端正な顔立ちは眠っているようにしか見えない。

それが彼の――先輩の最後だった。

プロローグ（後書き）

続きます。

第1章 前編 入学式には遅れずに

刹達学園さつりくがくえん―全国においてトップクラスに君臨する高等学校。それ故に倍率が高く10人に1人が受かるかどうかの確率。クラスは30人編成の3クラス。学年ごとに1名、生徒管理生が存在する。全生徒寮生活が虐げられ、広い敷地を守る絶壁なるレンガの壁。生徒達は長期休暇以外、外出することは許されない。

「ついに入学式か。ここまでくるのに色々あったな……。」

高校登校初日。僕は寮の門から改めて校内を見回した。

月のような銀髪はワックスを少し使いたたせ、紫色の瞳は大人と子供っぽさを併せ持つ。細身の体つきながら身長は165センチ。顔は良い方だと自覚するこの僕にとってこの入学式はとても楽しみにしていたのだ。

はあ……と、広い敷地に僕は淡い溜め息をつく。桜小道が印象的で植木や噴水など自然が多く眺めは最高。さすが名門高校。広い敷地には学校、校庭、プール、寮、売店。全て完備されている。まるで学生だけの国だっ！

「雅也まひや〜！」

愉快そうな声に僕はとっさに振り向く。同じ真新しい制服―灰色のブレザーに灰色のズボンに身を包む男子1名。瀬羽せは海斗かいと。この僕と同じ高校1年。茶髪の髪は地毛。身長は悔しいことに僕より少し高い。いつか身長を抜かして見下すことが僕の夢だったりする。…我ながら小さい夢だ。

僕は安易な考えを巡らすのをやめ海斗へと視線を向ければ海斗は不

服そうに眉をよせ口をとがらせた。

「先に行くって酷いな。せっかく同じ寮室になれたんだから一緒に行こうよ。」

ああ、こいつは俺が先に行ったことに怒ってるのか？ だけど僕にだってちゃんと理由がある。

「だって海斗、準備するの遅い。待ってらんないんだよ。」

「ひでー！ それでも待つのが友達だろ？」

「そこに友達に合わせて早めに寝て早く起きようとしないのかよ。」

心当たりがあるのか僕の視線から海斗は目をそらした。

わかりやすい奴め……。僕は追い打ちをかけようとにやけた。

「どうゆうことかな？ 海斗君。」

「……今日から、新学期！ もう楽しみでさ！ こうやって雅也と同じ高校行けてすげーうれしい！」

僕の先制攻撃をものともせず海斗は心底嬉しそうに笑った。それはもう憎たらしいぐらいの笑顔で……わざとか？ わざとなのか！？ しかし悔しいことにこいつは素でこういうことをする俗に言う天然だと言うことを思い出し僕も心底、憎たらしいぐらいの笑顔を作った。

「僕は、海斗が受かるとは思ってなかったからすげー以外。」

「なっなんか雅也がそんなに笑ってるのと怖いんだけど！？」

「何？ 聞こえないなあ。」

「やめてっ雅也！ 怖いからマジでその笑顔やめて！」

「失礼なやつだ。親友の笑顔が怖いだなんて。」

「分かったからやめてください！」

そこまで…拒絶するなよ……。

海斗の頬をゆがませる本気の拒絶に僕は少し傷ついたが、さとられないように笑顔を崩した。

「うん！雅也は無表情が似合ってる！」

「それを僕は喜ぶべきなのか？」

「褒めてんだから喜んでくれよー！」

「はいはい。それにしても海斗がこの高校に受かるとはね……。バカだと思ってたのに。」

「バカじゃないから受かったんだろ？そこら辺運がいいんだな！俺！それに……。」

僕の悪態にも海斗はなんともないように笑っている。時々伝わらない時があるんだよなあ。それに運がいい……ってそんなもんなのか。いちおうここは倍率高い名門高校のはず。

そう思いつつ真新しい携帯を取り出す。寮に入る前に親に買って貰った念願の物は使い易い。後、10分で学校に着く計算できたが案外余裕そうだな。

僕は海斗の言葉を促すように顔をのぞき込んだ。

「それに何だよ？」

「このゲームマニアの俺からしてみればこの学園の女子の制服はすごく可愛いんだ！一度パソコンで見た瞬間俺は心奪われた。あの制服を生で……生で見るためにこの囲われた学園に来たのも当然なんだよ。分かるか！！雅也！」

「……………」

そうだった。こいつは痛いところでマニアックな人間なんだ。たった一つの目的のためならば手段を選ばない。現実を無視したやつだ

ったんだ。海斗は輝かしい眼で期待しているのか、嬉しそうだ。親友という名のかりそめの関係を持っていなかったら避けたい人間？1になりうるこいつと俺は親友のままで良いのだろうか。僕は避けたい心をよそにこれ以上、暴走しないことを祈りながら冷たい目を向ける。

「そういうこと女子の目の前で言わないよう注意しろよ。」

「分かってるって！あゝ、赤のチェック柄のミニスカにブレザー！なんて可愛いんだ！セーラーじゃないのが惜しいけどこの俺にとつてそんなの関係ない！学年毎に色が違うのが溝だ。なぜ1年は赤なんだ。ここは水色だろう。まあいいさっ！待ってくれ女子制服！」

「……………黙って学校生活送ろうな。」

「んっどういうこと？」

「分からないならいいさ。」

僕は僕なりに楽しい学園生活を送ろう。けっして海斗に邪魔されない日々を。

その言葉に海斗は空を仰いで背伸びした。

「同じ寮室で同じクラス。いやゝ運が良すぎて笑いたくなるな。」

「ああ。失笑だろ？僕もそう思ってた所だ。」

「そうそう…………腐れ縁はもうこりごりっ…………てなっ！雅也、違うだろゝ。笑顔だよ！笑顔。」

「そうなの？最近海斗の意味を理解するのに時間がかかるんだよなあ。きつと老化のせいだね。」

「ちよっそんなこと言って何だよ！」

「…………海斗は僕が言いたいこと何かと伝わってるだろ？」

「そりゃダテに親友やってないからね。」

「じゃあ大丈夫だ。これからよろしく頼むよ。」

「自己完結しすぎ…………まっいつものことだね！雅也！」

僕より早歩きし目の前の視界を陣取る海斗は笑顔を僕に向ける。

「楽しい学校生活になるといいな！」

「そうだな。」

強風が吹き荒れる。それと同時に桜が舞う。

本当に楽しい学校生活になるといい。

第1章 後編 入学式は嵐と化す

学校について早々、軽く同じクラスの顔ぶれを確認するまもなく入学式があるからと体育館に向かって今に至る。

海斗とは同じクラスだが、名字順の出席番号のため結構遠くなってしまったが。

『生徒会長挨拶 悠夜会長ゆうやお願いします。』

体育館にアナウンスの音が響く。入学式で生徒会長が挨拶するか。

生徒会長らしき人物が舞台へと上がろうとした瞬間……体育館は嵐と化した。実際に荒らしが入ったとかそんなノリじゃない。それ以上のノリだ！

「「「キャー！！悠夜会長！！」」」

女子達の悲鳴というより歓喜の声は、まるでコンサート会場だ。

当の本人、悠夜会長はいかにも優秀そうな顔立ちであり、端正で整っている。金髪に切れ目な蒼い瞳。180センチはありそうな長身は身のこなしがゆるやかで、気品あふれる雰囲気。

僕にそっちの気はないが女子だったら1目見て惚れてしまいそうだ。

「みなさん。おはようございます。」

悠夜会長の優しそうな笑顔と凜とした第1声。なんだ？あの人

話ただけで周りが嘘みたいに静まりかえった。

「この度この刹陸学園にご入学いただき大変うれしく思います。この学園では、文武両道をモットーに日々生活し価値ある学園生活を送っていただきたいと思えます。それ故に落ち着きのある行動と忍耐をもち、この刹陸学園きつての好成績を収めてほしいと思います。そして充実した学園生活を送ってほしいです。」

ありきたりな文面、言い方。なのにどうしてここまで惹きつけられるのだろうか。

挨拶が終わった会長はお辞儀をし、舞台から降りていくのだが、また女子の黄色い声がよりいっそう響く。さっきまでは2、3年の女子だけだったがプラスされて1年の女子まで混ざってそうだ。かくいう僕の隣にいる女子もかなり興奮している。

なんだか嵐、嵐の前の静けさ、嵐で最初から最後まで嵐だったような……。僕は会長だけは敵に回さないようにしよう、と心の底で誓った。

「それでは生徒管理生選抜においては学園側が決めさせていただきます。名前を呼ばれた生徒は舞台の上上がりなさい。」

渋い声のアナウンスに眉をひそめる。気づけばこの声に周りが我に返ったように静かになった。変なところできっちりしてるな。

管理生？生徒を管理する生徒ってことか。

「3年では前年度に引き続き悠夜君にお願いしたいと思います。」

生徒会長か。確かに生徒管理するには模範的な人物がやらなくちゃいけないもんな……。

「2年では錐吾君。そして1年は雅也君。」

……………僕!!!!あまりの真実にびくつとしてしまった。

いやいや!同名の誰かだってことを願うよ。

しかし、そんな期待とは裏腹に男の先生らしき人が不機嫌そうにやってきた。

「おい、雅也!早く行け!」

「……………はい。」

期待だなんて無意味か。

渋々、ステージ近くに移動すると、そこにはさっきまで嵐を吹き起こした悠夜会長と僕より頭一つ大きい黒髪で黒ぶち眼鏡をしている男子生徒、錐吾先輩かな。冷静そうな雰囲気はどこか冷たいオーラを放っている。

「それじゃ3人ともステージへ。」

先生から言われステージに上がる。3年、2年、1年の順のため僕は最後だ。

悠夜会長が校長の目の前に立った。

「悠夜君は1年から管理生をやっていましたね。今年度もよろしく願いますね。」

1年からってことは3年までやり続けるのか?
それより悠夜会長の名前が呼ばれた瞬間の体育館の騒音は素晴らしい物だ。

「錐吾君は初めてですね。がんばってください」

別に1年から引き継いでやるって訳じゃないのか……安心した。にしても錐吾先輩の番になると辺りが一気に静かになるんだな。これが人気の差ってやつなのか!?

「雅也君は期待の星ですからね。みんなをひっぱってください。」

渡されたバッジは3センチぐらいで、キメ細かい装飾が施されている。これが管理生の証か。初めて見る宝飾に魅入っていると、肩を強く

押された。

「早く下りてください。」

う……あ……。

錐吾先輩が冷たい目で僕を見ていた。

「……すみません。」

先輩って恐いものだとか中学時代から覚悟していたことだが錐吾先輩は別格だ。170センチはありそうな身長が見下ろす視線は光る蛇の目だ。舞台から降り、席に戻ろうとしたところで肩を捕まれた。なんだ?

「雅也君。今から生徒会室においで……。」

振り返ると悠夜会長がニッコリ綺麗な顔で笑っていた。

もしかして! 早くも下級生イジメですか!?

第1章 後編 入学式は嵐と化す（後書き）

生徒管理生は学年委員長みたいなものです。
感想等くださると嬉しいです！

第2章 前編 学園の真実

入学式が終わったのもつかの間、生徒会室へと行くため僕はある人と廊下を歩いていた。

「そういえば自己紹介してなかったね。僕は神流月かんなづき 悠夜ゆうや。これからよろしくね。」

優しい声に絶世の笑顔をもつ悠夜会長の隣にいるというこの緊迫感。それに自己紹介だなんてしなくても僕は知ってますよ。さっきの入学式を僕は忘れない。そして会長を意識しているこの学園の女子生徒の視線が痛い。

「僕は久河くが 雅也まろやです。悠夜会長、なんで生徒会室に？」

「雅也君はBクラスだったよね。大丈夫だよ。管理生は授業など出なくても免除してくれるから。」

「……そうですか。」

それってラッキー！って別にそういうことは聞いてないのだが。管理生にあたっての説明会でもするのか？

「ここだよ。雅也君。さあ……入っていいよ。」

「はい。失礼します。」

悠夜会長が扉を開けると、そこには白い家具なる本棚にランプ、机もただの学校机ではない、カントリー系のテーブルにソファアが眼に入った。もはや、ただの生徒会室ではない。

金使ってるな。僕は本当にここにいていいのだろうか……。

僕の驚き顔に悠夜会長は近くのソファアに座るように手で促したた

め、僕はそれに従う。

悠夜会長も目の前のソファーに座り足を組んだ。

「なっなんてかつこいいんだ。僕のあこがれの人物にしてもいい……が今はそれどころじゃない！」

僕はうながすように精一杯の笑顔を見せ聞いてみた。

「それでどうして僕をここに？」

「クスッ……君は面白い顔をしているね。笑顔が引きつってるよ？」

「すみません。笑顔が苦手なんです。」

「じゃあ無理しなくて良いよ。笑いたい時に自然と笑えればそれでいいんだから。」

「はい……。」

優しい微笑みに僕は羨ましくなった。なんでこんなに綺麗に笑えるんだろう。

扉がガチャリと開く。入ってきた人物はさきほど冷たい言葉を投げかけた黒髪に黒縁眼鏡、底光りする鋭い黒の瞳……。

「なんですか。その目は。1年の管理生、雅也君。」

「そうけんか腰にならないの。錐吾君きりあ、どうして君はそう……。」

「悠夜会長の欺瞞な笑顔に言われたくないですよ。」

「ならとつと扉を閉めて、こっちに座ってくれる？」

無表情の錐吾先輩と笑顔の悠夜会長の会話は恐い。冷たい空気が流れている。

一瞬の沈黙が流れ錐吾先輩が折れたのか、扉を閉め鍵をかけた。

えっ？ 鍵を閉めるんですか？

「じゃあ、錐吾君も席に座って。」

不服そうに無言であいたソファ―に座る錐吾先輩を見て悠夜会長はさっきまでの笑顔を崩した。

「それじゃあ、いいかい？ 雅也君。」

「はい。なんでしよう？」

重い空気が流れる。それはこの密室空間だからか。

「驚かずに聞いて欲しい。この学校は裏と表に別れているんだ。表は全国を代表するトップクラスの高等学校。しかし裏では政府公認の裏組織に貢献とする人殺し学園だ。あの3クラスの内の1クラスは殺戮要員として育成されるよ。そう殺戮クラスとしてね……。」

淡々とした口調、冗談とも思える言葉。だけど悠夜会長の有無を言わせぬ鋭い視線に僕は沈黙を守った。

悠夜会長は言葉を続ける。

「このクラスの行動範囲は夜の学校内。朝は真面目な2クラスと変わらないんだよ。その殺戮クラスを統一するのは僕たち……生徒管理生なんだ。管理生は常に殺戮クラスのトップでいなければいけないんだよ。そうでもないといけない自分の命が危ないんだ。たとえば去年のことかな？ 錐吾君。」

ふられた錐吾先輩は悠夜会長を軽く睨みつけ僕へと視線を混ぜ合わせた。

「この学園の生徒達は血の気が盛なんです。夜間授業には試験があります。その試験では管理生は一番邪魔な存在。地位だけではな命まで狙われます。残念なことに去年の管理生はあまりの弱さに

死にはしませんでした。が再起不能なまでの傷を受けました。」

「昼内での殺戮は禁止。しかし夜なら許される。それがこの学園なんだ。人が死のうが生きようがこの学園は金と権力でそんなのつづせるんだよ。」

信じられないな……でもこれが現実なら受け止めるか。そんなの出来るのかー。でもなんだろう……心のどこかではこの展開に興奮が抑えられない。僕が求めていた楽しい学園生活。もしかしてこういうことを望んでいたのかもしれない。

僕はこの空気を潰そうと自傷気味に笑って口を開く。

「そうですか。ご忠告ありがとうございます。」

悠夜会長はかすかに目を大きく開いたがニツコリと笑った。

「やけに引き際が良いね……。驚いたり、黙り込んで否定するのかなと思ったけど。」

「そんなの無意味でしょう。これが現実なら受け止めますよ。それにこんな囲われた世界じゃ逃げ出すことは不可能でしょう？」

「利口だね。雅也君……君には期待しているよ。」

「期待されても何も返せませんけどね。それでは失礼します。」

僕は腰を上げ、悠夜会長へと背を向けた。

はつきり言っただうでもいいんだ。何が起きようと僕の目的さえ果たせれば。

この学園の真実……それは楽しい学校生活とは裏腹の殺戮学園。いや、でも……下級生イジメじゃなくて良かった……。

第2章 前編 学園の真実（後書き）

やっと本題に入れました。

第2章 後編 僕の決意

殺戮、管理、人が殺される……か。

「おーい、雅也！上の空だぞ！何かあった？」

笑顔の海斗。僕は返事を返すのが面倒で適当に息をつく。

「なんだよ！どうかしたの？」

「いや、どうしてもっとまともな親友を作らなかった自分を軽蔑してただけだよ。」

「それって遠回しに俺のこと言ってるでしょ！」

「何を言ってるんだよ。授業が終わるたびにクラスの女子に疑わしい視線を向ける男子の端くれにもおけない奴のことを言ってるだけさ。」

「……………別に女子を見てたわけじゃない！制服を制服を見てただけだ！」

「はいはい。弁解は2時間前の休み時間に言うべきだよ。」

「ちよっ雅也。待ってよ！先に行くなって！」

学校が終われば寮に帰る必要がある。刹湊学園は3クラス、Sクラス、Aクラス、Bクラスに別れている。クラス事に2、3年生と同じ寮で過ごしている。これも殺戮クラスにとっては都合の良いことなのかもな。

「雅也、初日から宿題の山って面倒だよな。」

「海斗にとってはそうかもな。」

「何それ。自分なら楽に出来るとも言いたげだね。皮肉〜！」

そういつて海斗はふざけたように僕からバックを奪った。

「返せよ。その中にはさっき話した宿題の山が入ってる。もしかしてやってくれるつもり？」

「クックック！俺は見た！授業中なにげに宿題を片付けてた雅也の姿を！」

まるで悪の組織の失敗すること前提の作戦をいかにも有効そうに考えている悪役に見えてきた。

「それは幻だよ。幻覚だ。もしかして海斗も老化が進行しているみたいだね。」

「そう言っ！何だよ。雅也は勉強できるからって……。」

「だって簡単だろ？中学の復習しか出てないのに解けない方がおかしい。」

その時、3時を告げる時計塔の鐘がなり響く。確かこの学園が創立した際に造られたんだっけ。

廊下から見た時計塔は真新しさがあって、まるで昨日にでも造られたような感じだった。

……金があるだけに毎年設備してるんだろうな。

「じゃ、急ごうか。門限決まってるし……。」

「じゃ……て何だよ。」

「僕は管理生だからね。一般生徒の見本でいなくちゃいけないんだ。」

「はいはい。雅也がそんなこと言うだなんて大丈夫？」

門へと着きくぐり通ると外は、とても澄み切っている。

「……なにがだよ。僕は常に健康体で有名なんだぞ。」

「うさんくさい雅也はほっところ。」

「……そうだよな。もともと海斗と僕はそういう関係。交わらない双曲線なんだよな。」

「ちょっ！冗談だって。雅也〜！」

その屈託のない笑顔に、こいつはどうなんだ、と考える。
その夜の授業に参加する者なのか？

門限まで後10分。新入生の門限はおそろしいほど早い。
それに比べ2、3年生は門限が早いわけでもないのでゆとりが見える。

走る……までとはいかないが早歩きといったほうが妥当だろう。

「そういえば、雅也はちゃんと先生の話聞いた？」

「……………」

早く寮に着くことを考え無駄口を叩かない。
管理生ということは表向きでも模範生なのだ。5分前行動は大切だとか何とか悠夜先輩に言われたことを思い出す。後5分で着くかどうか。

「夜間授業のことなんだけど。」

聞いてなかったな。面倒だし僕って無気力が命だもん。

「そっか。そっか。じゃあ今日も頑張ろうな。」

「うん。頑張ろう！ってもう学校終わったし！意味不明。ちゃんと話し聞いてよ。」

「さ〜て急がなくちゃな。管理生って大変だ。」

「……棒読みだよ。雅也。って！待ってよ！！」

海斗が声をあげ僕へと追いつこうとする。

さあこれから何が起きる。

第3章 夜の授業

Bクラスの生徒しかない寮の夕食はバイキング形式で豪華な物だった。あたりに見えるのは最高級の肉や魚ばかりで野菜がかすんで見えるぐらい。もうお腹がすいて背中とお腹がくつきそうとはこのこと。さっそく料理を取ろうとした瞬間に先生からの声がしたために、僕と海斗は料理を取り損ねた。

「これから1年の生徒は校庭に集合。各自移動でかまわないが遅れた者は罰則があるから早く来いよ。」

長い茶髪をうなじで結び、両耳に銀ピアスをつける若々しい男性は20歳前後。いかにも穏やかそうな先生に見えるのだが外見で人を判断してはいけなかった。あれでも、2年の殺戮クラスの担任。自称『二面性の道化師』。昼は穏やかな性格なのだが夜になると恐くなる。と錐吾先輩に聞いたことを思い出す。

それにしても先生に急に言われたので、1年の生徒はほとんど食べない状態なため校庭に向かう姿はやる気のなさからバラバラだ。

「雅也、早く行こうよ！夜間授業だよ！！」

「そうだな……。」

目の前の現実を知る僕の足取りが自然と遅くなる。でも考えるのが面倒になってきた。こんなことでネチネチ考えてどうする？やっとな得してきた。とりあえず僕はこの流れに任せてみることにした。今後の人生なんてどうでもいいだろ。死んだら僕の好きなメロンパンでも備えといってくれば文句はない。それに比べ海斗は何を考えているんだ？それより……。

「お腹すいたなあ。」

「ダメだよ！雅也ここで帰ったら罰則だよ！」

「そんなの分かっている。あゝなんか全て面倒くさくなってきた。」

「ちょっ雅也〜！」

そんな会話しつつ僕と海斗はしっかりと校庭に足を向け進んだ。

校庭の中心辺りで人だかりが見える。それがBクラスの生徒達ということに瞬間的に気付いた。道化師の目の前には人1人分くらいの物体が何かシートみたいなのに覆い被されている。

「よし、集まったな。それでは始めにこれを見てもらおうか……。」

変なおいがしている。鉄のにおいに近いような気がする。どこからだ？もしかして……。

僕がそう考えてる内に道化師は足下にあったシートを取る。夜だから形が曖昧あいまいでよく分からない。30人の生徒は訳の分からないことに、それぞれグチを漏らし始める。この場に及んで何をするつもりなのか先生に対し敵意をむき出す。

僕も心配になって海斗へと不安な気付きを見せる。

「なあ海斗。あれ何？」

「いや。俺にもさっぱ……。」

海斗が言いかけた時には、夜に目が慣れてそれが何かじよじよに分かった。それは……。

「死体だ。」

誰かが小声で言ったのかもしれないし、もしかしたら自分で言ったのかもしれない。それくらい僕は混乱してなにがなんだか分からなかった。周りの生徒が動き始める。叫び始めようとする。1瞬の静寂とともに1瞬にして目の前がふらつく感じがした。その死体は心臓にナイフがささっていた。

「きゃ」「さけんだやつは殺す。こっから1歩でも動いた奴も殺す。」

周りが止まる。人が止まる。時間が止まる。

現実に見て僕はとても恐怖していた。だって悠夜会長達が言っていたことはあまり信じていなかったから。どこかで嘘だと思っていた。だから安心しきったいつもの対応で、こんなのないと心のどこかで思ってた。

女子生徒の口元を押さえつけながら首本に小型ナイフを突き出す先生は……道化師は言葉が続ける。

「見ての通りこれは死体だ。」

そんなの知ってるなんてツツコミをいれる気にはならない。

「まだ新鮮の死んで5分もしてない。これからお前ら生徒はこの光景になれる。お前らBクラスは殺戮クラスとして育成する。分かるか……？お前らは駄作なクラスだ。もし逃げだそうとした者や陰口した者は殺す。口ごたえした者は処罰を与える。死なない程度にな。」

女子生徒にむけていたナイフを、道化師はおろすとまた持ち替えた。

それを1直線に遠くに投げ出す。それは空気を突き刺すように飛び
きった。

「ぎゃー!!」

遠くから男子生徒の声が聞こえてきた。後ろを振り返っても暗くて
かたちしか見えないがそのナイフがどうなったかはここににいる生徒
全員が静寂の中で確認した。

そして、また生徒が騒ぎ出そうとしたが冷たい視線が体中を突き
刺す感じがして声がでない。

「死にたくないよな。お前ら。」

これは道化師からの殺気。初めて経験したこの感じは声も出せな
いし動きもとれない。道化師の手にはナイフらしきものが握られて
いる。そのナイフに赤黒い液体がたたった気がするのは勘違い
なのか。それともこれは夢なのか。まさかの夢落ち!ここで話は終
了してまた入学式から始まるんだ。その時には完璧な会長ではなく
僕より格好が悪いヘタレで僕は学園でモテモテ!ハーレム築き有意
義な学園生活を送って……。

「なあ……雅也どう思う?」

海斗が静かな声で僕を現実に戻した。ちっ……僕のハーレムが!

「なにがどう思えば良いんだ?」

「俺からしてみればこの状況がゲームのように感じる。主人公は俺
ら。舞台は学園。内容は殺人養成を目的としていた。B級のゲーム
だね。俺だったら3日でクリアしちゃうな。」

余裕そうな口調に見えて乾いた声。海斗も精神的に追い詰められている。

だからこの異常を日常に戻そうとする。会話をすることで真実を確かめようとしている。

「僕だったら買う気さえ起きないよ。もし海斗が買っても借りようとも思わない。」

「もとから雅也ゲームしないじゃん。こうなるんだったらもっと武道系のゲーム買っとくんだった。」

「ああ。そうすればもつとこの生活が楽になっただろうね。」

「ははっ、こういうときに雅也が親友で良かったよ。3日ではきつと終わらないゲームは3年も時間がかかるんだろうねえ。」

僕も海斗が親友で良かった。普通感覚を持たない親友で良かった。

「まさかの留年で10年かもよ。頑張れ。」

「留年どころじゃないよね！？まあ……抜け出せないんだろうね。」

「そうだね。こんな囲われてた学生の国では抜け道なんて造らないよ。それに携帯も学園内の者にしかつながらなくなってるし。状況は最悪かも知れないな。」

「携帯も！？里帰りも出来ない感じ？」

「そりゃどうだろうね……。それより海斗は堪えられそう？」

「うん……俺こういうのってワクワクする方なんだよ？」

楽しそうに頬を歪めた海斗。僕はきつとぞわつとしただろう。
変わった思考の持ち主だけに海斗は楽しむんだろう。

「お前は変わってるよ。海斗。」

「雅也もだよ。俺らは変わってるんだ。だって恐怖より好奇心の方が強い。ゾクゾクする。きっとここにいる奴ら全員も同じ思考なんだ。」

変わった思考だけに集められた生徒達。この生活に耐えられる者だけを集めた。それがBクラス。普通の常識なんて持っていないのかもしれない。

「……なぜそこに僕も加わるんだ？」

「雅也、気づいてないの？ 雅也の顔がずっとニタニタしていることに。」

僕はそこで自分の頬が痛いほどに引きつったことに気づいた。

「楽しもうね！ 雅也！」

「はぁ……自分が怖いよ。それなりに……ね。」

僕らの夜の授業を覆い尽くすように月が消えた。僕も雲に隠された
い！

第4章 朝礼会議

夜通しの練習にまぶたが重い。なのにそれでもこのことが楽しくて仕方がない。

朝日が差し込み目を細める。誰もいないはずの早朝の学校に僕は生徒管理室へと廊下を歩いていった。

「眠い……。 」

軽くあくびをすると目から涙が出る。生徒管理生3名は朝、日程確認と生活状況、そして夜間授業のことについて話さなければいけない。1週間もたち、慣れてきたところだ。

でもやっぱり夜間授業との掛け持ちだから疲れて眠いんだけどなあ……。

「……………っ!!!」

僕は1瞬の気配に全神経をとぎらせ、内ポケットにある物を取り出し彼に切り付けようとするがっ!

「ふっ……下ろしてくれないかな。雅也君?」

「それを言うなら悠夜会長も手を離してください。すごく痛いんですけど……。」

金髪に切れ目な蒼い瞳。端正で整っているその顔はいつも通りのにこやかな笑顔。

僕は悠夜会長の懐へとナイフを突き出したのに彼は僕の腕をぐっと止めていた。ッ痛い……。

悠夜会長の恐いほどの笑顔はこの状況に似合わない。彼の場合ただでさえ顔が整っているのだから女子生徒がこの笑顔を見ればクラツとくるはずだ。でも今の僕は別の意味でクラツとしそうになった。ああ、すごく痛い。腕の血管がどんどん欠陥になってしまう……だなんてシャレを言ってる場合じゃない!!

悠夜会長はまだ手を腕から離してくれない。

「反射神経良くなったね。初日に比べれば上出来だよ。専門武器はナイフにしたの?」

殺戮クラスの生徒全員には武器を所持することが許されている。夜の授業で『好きな武器を選べ』と様々な武器をB組の生徒に道化師が渡したのだ。

「ええ。小型なので持ち運び自由で良いかと思ったんです。それより一回ぐらい切らせてもらえませんかね!」

皮肉気に言って僕は無理矢理、腕を引き取る。

この状況が毎日続くばかりで悠夜会長は完全に気配を断ち、近づいたところでわざと解いてくる。それが本当に甘く見られてるようでも力ついてくる。

「ナイフか……。それは良いかもね。小回りが効くし制服にだって隠し持てる。便利な選んだね。」

軽く話を変えられた。単にナイフは、みんなが別の武器……弓やら槍やら強そうなのばかり持っていかれ、売れ残り商品だった。

だが、こうやって持っていると良く分かる。使い易い。今のようによく対応出来るのが利点だ。

ヒュンー……。

空気を切るような音。それは学校で聞くのに相応しくない音だと無性に僕は感じる。

「やれやれ。長距離の武器はあれほど校内で使わないでくれって言ったのに……。 」

「悠夜会長？」

しょうがないと言いたげに目を細める悠夜会長は僕より1歩、2歩と前に出た。

何があるかも分かんないのに悠夜会長、大丈夫かな。

他人事だと思ってしまう自分はやっぱり緊張感が足りない。

その瞬間――……音を鳴らしている物体の音が最大になるように速く空気をさく。

何を思ったのか悠夜会長がいきよいよく手を前に出した。

「えっ……。悠夜会長！それ……。 」

そしていつのまにか、その手の中にはいつの間にか矢が握られて……って矢！？

「校内であんま使わないでほしいな。 」

ため息をついて言う悠夜会長。どこからこの矢！？そう思って僕は矢が来た方を見ると澄ました顔は無表情。彼が近づきながら口を開いた。

「おはようございます。悠夜会長。雅也君」

整えられた短い黒髪に黒ブチ眼鏡、無表情に近い冷たい顔。彼の手には弓矢が握られていた。錐吾先輩の専用武器は弓矢。けっこう古典的だな。

「おはようございます。錐吾先輩！」

「おはよう。錐吾君。矢……返すよ。」

そう言った悠夜会長は矢を持ち直しかと思うと逆に錐吾先輩に向かって

ヒュ……。

悠夜会長が手放したと同時に音がしたかと思うと、錐吾先輩が肌へと突き刺さるギリギリのところまで矢を握っていた。その目は驚きを隠せない。人が弓を使わずに矢を投げて、あれほどのスピードがでるとは思えない。眼でさえ追いつけなかった物を錐吾先輩は止めている。

いつのまに！？というかすごすぎですよ。悠夜会長も錐吾先輩も早くて見えなかった……。

「今度からは使わないでくれ。いつ一般生徒が見ているか分からないからないから……。」

口調は柔らかい。しかしその眼には口答えを許さないがごとく研ぎ澄まされているのか僕は恐怖を感じた。

「……すみませんでした。」

「分かればいんだよ。さあ今日も話し合おう。」

管理室に着き、悠夜会長はその扉を開こうと鍵を取り出す。

学校の教室（内装は部屋に近いが……。）だと言うのに鍵は悠夜会長が所有化していて好きなききに入れると聞いている。そのうち悠夜会長が学校を管理する日も近いな。あれ？でももう管理してるんだっけ？

「はつきり言って失望しましたよ。」

錐吾先輩は僕へと冷たい視線を投げかけた。いやいきなりなんですか！？

「はっ？」

「あれはあなたに向かって放った矢。いわいる力試しです。それなのに音だけを認識しても、それに対する危機感を持たない。処理はしない。まっ、悠夜会長が出てきてしまったらしょうがありませんか……。」

「……すみません。」

力試し？それは管理生としてか。分析家としての性分か。確かに僕は安心しきっていた。学園1最強とうたわれてる悠夜会長がいるなら自分に危機が訪れる事がないって。もし悠夜会長がいなかったら自分で遠距離の殺気を見破れないと思う。だめだ。それそうとうに強くならないと。それそうとうに……殺されない程度に、ちよろっと強くならないと。

僕は小型ナイフを軽く握った。

「それでも僕はすごいと思うよ。反射神経も初日にくらべ良くなったし武器だって雅也君に会ってると思うしね。」

いつのまにかこの会話が聞こえていたのか悠夜会長は扉を開けながら言葉をつなげた。

悠夜会長が言うとおりの自分の武器を開花させるのは自分の専門武器と好みがあうかどうかだと道化師が言っていたことを思い出す。

「そうですか。僕はどうでもいいです。」

「錐吾君……じゃあなんで弓をうったの？」

「……………」

錐吾先輩はそっぽを向いて管理室へと足を踏み入れる。

悠夜会長も入り、僕も室へと足を踏み入れた。

いつも通りの豪華すぎる教室。白で統一されている自分たちには似合わない。

悠夜会長は雅也へと優しい微笑みを向けた。

「ところでどう？殺した気分は……………」

いきなり何を聞くのかと思えばそんなこと。

だからこそ僕は正直に答える。

「楽しくて仕方ありません。」

第4章 朝礼会議（後書き）

感想もらえると嬉しいです！

第5章 昨日の記憶（前書き）

きついシーンが入ります。

このページをぬかしてもなんら問題はありませんので見たくない方は第6章に進んでください。

第5章 昨日の記憶

僕はソファアに座り今日の日程について話す悠夜会長と真面目な眼差しを向ける錐吾先輩を眺め昨日の事を思いだしていた。

楽しい、たのしい、タノシイ……。
血に染められたその頬をなめた。

夜に浮かぶ月がこの校庭を明るく照らしていた。

「グハツツ……。」

黒髪の小柄の男は倒れる。その口からは赤い液体が流れていた。

「フツ……。反逆者は消される運命にある。この学園に送られたお前は逃れることが出来ないんだ。」

僕は笑う。だってこの快樂の瞬間を味わうことが出来るのだから。飛び跳ねる赤い液体。水溜まりのように地面にたまった血は僕の顔を映し出す。黒く闇のようにならずにさんでいる僕の目。夜間授業専用のボタンではなくチャックの学ランは赤く染まっている。

なんて悲痛な顔をこの男はするんだろう。悲劇、懺悔、嫌悪。全てこの男にあてはまる。もっと歪め！その醜い顔を！膝をつき僕に許しを求めろ。

僕は小型ナイフを持ちかえる。そのナイフには赤い液体がたれていた。男に対し蹴りを入れる。

「ハ……グハアッ。」

男がお腹をおさえるも僕は鼻で笑う。そして何度も体中に蹴りをいれる。

「やだ……。俺はまだ死にたくない。」

口から最後の言葉が漏れる。ああ可愛そうに。

「さよなら……。弱者の反逆者さん。」

グサッ。

「ギヤアアアアアアアアアア!!」

男はさらに身体をよじらせ恐怖に染まる。醜い。

ああ、制服が赤くなってしまった。まだ一ヶ月もたっていないのにもったいないな。

僕はどうしてもよさそうに顔を上げ前髪を整える。

「後の処分は任せるよ……。道化師。」

「気配を消していたのにもかかわらず見破ったとは。いいだろう……仮にも教師に対しその口調はいけすかんが貴様の事は認めてやる。

」
その言葉に我に返る。自分は生徒なのだから敬語を使わなくてはいいけないんだ。それも1年生だし。

「ありがとうございます。にしてもいいんですか？僕だけこんなことして……。」

後ろから感じる気配と声だけを頼りに死んだ男の顔を見下す。赤い血に染められた顔。醜い形相。

「貴様は管理生だ。何をするにも1番でなければいけない……明日はクズではなく殺人鬼を貴様に殺らせる。楽しみにしてろよ。」

その声とともに消えた気配。やっと今日の授業の終わったか。僕は寮に戻ろうと歩き始める。

殺戮生徒が帰った後の特訓。管理生と言われるだけで殺戮生徒とは違う訓練。初めは一般人から始まり今では裏組織の殺しも出来ないう下級相手。そして明日は殺人鬼。このままいけば何にたどり着くやら。

「おーい。雅也！遅いから迎えに来たよ！！」

夜の暗闇から現れたパジャマ姿の少年が手を振りながら走ってきた。茶髪の髪に無邪気さが残るその顔は海斗。

高校生にもなってパジャマとかウケルよね。

「海斗。どうしたんだ？先に寝てろって言ったじゃないか。」

「寝たよ！！でも起きちゃったんだよ！それに雅也帰ってきてなか

ったから迎えに着たんだよ!!」

そう言って安心そうに笑う海斗。僕の目は明るく光に満る。まるでさっきのことが嘘のような穏やかな顔。同じ殺戮クラスといえど海斗とは練習が違う。管理生は一般生徒……あらため殺戮生徒とは別の特訓が虐げられる。一緒に特訓するときもあるがほぼ個別だ。

「今、特訓はどこまで進んだんだ？」

一緒に特訓したのは5日まえぐらい。その時にやっていたのは反射神経を鍛えるために2、3年からの攻撃を素手で受け止めるかよけること。一歩間違えれば命の危険性も危なくない。ケガをした生徒は半分以上。骨折者もいれば、切り傷一つですんだ奴もいる。もちろん一歩進んだ特訓をやっている僕は傷一つなかった。実力の差がありすぎるため管理生が参加していないことが良かった。雖吾先輩の話によると去年は自分以外は全滅だと聞いた。恐ろしき2、3年生。しかも悠夜会長の直にくる格闘技によって負傷者は完治するのに時間がかかったとか。

武器を使わない悠夜会長。それは武器を使う必要性を感じたことがないからだと本人は言ってたな……。

「うーん……。自分の専用武器鍛えてる!! やっぱ先輩は強いよね」

そう言うのにこやかに笑う海斗。まだ殺しまでは入っていないのか。そのことに安堵しつつ日常的な会話を始める。

第6章 前編 殺戮の試験？

日常的な生活。壊れてしまった感覚。

朝日を見るたびに現実に戻ってしまう。それが悲しいんだ。

僕は軽くあくびをした。

春が過ぎたことを知らせるように桜の花は全て散り美しい光景が青葉へと変化する。

昼の学校生活3時限目は数学。この学園に入学したばかりはほとんどの生徒が眠気のせいで半ボケだったが二ヶ月もすぎればなれ、ちゃんとした学校生活が送れていた。

「ねえ、雅也。あの噂されてること知ってる？」

「知らないけど……何？」

一瞬だけ海斗の方を見るが海斗も同じように口だけ動かしてるようだが口調はとてもウキウキしている。授業に集中しろよ……とは思ったもののちょうど退屈していたところ。

「実力試験のことなんだけど……。」

この時期の実力試験は自分の武器になれた頃に行われる、別名“下克上”試験。参加者は殺戮クラス全員。実力試験は殺戮クラス特有の試験で自分の能力がクラスで何番目かを競うもの。殺し合いまですとはいかないが自分の実力によって立場が変わってくる。たとえば殺戮をするのは上位者だけとか……顧問の先生の、道化師の態度とか変わってくるのだ。その試験でいったい、どうしたというのだろうか。

黒板に書いてある文字を写しつつ僕は興味本意で聞く。

「どうということ？」

「それがさあ、今度実力試験あるじゃん。それで一番になった生徒は管理生になれるって！」

「そこ、うるさい！」

先生からの注意を受ける海斗。すいません、と言って頭をかき苦笑する。先生からは、その態度が悪いのか睨まれてしまうが授業を続けてくれた。

管理生でなくなるだど……？そんな情報僕は聞いてないぞ。悠夜会長も錐吾先輩からもそんなこと聞いてない。その試験があることや内容は聞いていたが管理生でなくなることはまったく聞いていなかった。

とりあえず放課後、悠夜会長に聞いてみるしかないかな……。

そう思いつつ手帳を開き今月の日程、実力試験がいつ行われるか調べる。実力試験は1週間後。その間、専用武器をどう扱いこなせているかがポイントだ。

訓練は管理生のためクラスとは別指導で受けているのがほとんどだし、それに専用武器の特訓が本格的に乗り出して武器毎に2、3年生に習っているため今の殺戮クラスの生徒各自がどのくらいなのかは分からない状況。

「……おもしろいかもしれないな。」

つい笑みがこぼれる。誰がどのくらい強いのか……はかりしれな

い相手との闘い。

僕は授業中だったことを思い出し黒板へと視線を注ぐ。びっしり書かれた文字が僕を待ち構えていた。

楽しみに身を躍らせ狂気に目覚めてしまう。

自分の地位を失わないように血へと身を染めろ。

第6章 中編 ただ今管理室に移動中（前書き）

前章全て書き換えさせて貰いました。

見なくても支障はありませんが主人公がすこし無気力キャラになってるかもしれないです。

第6章 中編 ただ今管理室に移動中

―放課後

人通りのない長い廊下を僕は現在進行系で歩いている。

広い校舎は移動するだけでも時間がかかるから面倒だ。

「……あと5分くらいで着くかな。」

向かってる場所はもちろん生徒管理室。悠夜会長に会うため。試験内容を再度確認するためだ。

「にしても僕も変わっちゃったな。」

僕は軽いため息をついた。

この学園は世間から隔離されていて部外者はよほどの限り入れないらしい。そして国家からの手厚い援助。偏差値では上位に君臨するように集められた学生達。

僕だってこの高校に入ったのは殺戮をするためじゃない、夢を叶えるためだ。

でも夜の授業のせいで成績が落ちる……ってことはない。自然と暗記出来てしまう。僕ってもとは天才！？とか思ってるのは冗談だとする。前までは何度も復習しまくってたのに今ではそれ以上の成績がとれていてビックリ。脳の作りが変わったのかな？

「それに恐すぎる先輩方……。」

あれは普通じゃない。この生活事態が普通じゃないけど……。たった2人の先輩に関わっただけでなんでこうなる？

悠夜会長はスポーツ万能だし天才的な頭脳を持つ。性格も優しいけどどこか裏がある。それに顔も整ってるから隔離された学園内では以上なほどの人気がある。そのせいで悠夜会長は神的な崇拜を受けているらしい。たとえば……。

僕は廊下の角を曲る。そこには女子生徒がいた。

説明するのは後にしよう。誰かに見られて考え事するのは嫌いだ。

女子生徒は2年生かな？リボンが赤だし。

知らない人なのでとりあえず素通りだな。歩調を速める。

「ちょっと貴方!!」

えっ？いや僕じゃないことを祈って歩調をさらにアップ。

通り過ぎようとした所で肩を捕まれた。痛いですって……。僕はバランスをとろうと腰に手をあてる。

「貴方。一年の分際で悠夜会長と話せるだなんて良い気にならないでよねっ!!!!」

またか……。っていうか説明する手間が省けたよ。って誰にだよ！本格的に僕って危ないな。

「だったら悠夜会長と話したらいいじゃないですか？」

「まっなんてこと言うの！あそこまで高貴なお方の目に入るだけで

も貴重だと言うのに。1年の管理生だからって生意気。」

人気が高すぎる先輩といると知らない先輩に絡まれる！嫌だよね
僕に一目惚れしたってなら別だけどさ。

「……クラスはどこですか？」

「そうやって口答えするなん……はっ？」

僕の突然の質問にあっけにとられる顔をする2年女子生徒。耳が悪
いのか？

「だからクラスを聞いてるんです。2年何組ですか？」

「A組よ。……なんで聞いたのよ。」

「いえ、何となくです。」

B組だったら殺戮生徒として尊敬しているのかと思ったけど違うの
か。ただの熱情か。パッションか。だから人通りのない廊下で話し
かけてきたのに武器を使用しないのか。先輩方って通常の一般生徒
に見られてなければ使用している。これをチクると後で怖い目に会
うから言わない。ふっ……僕ってビビり〜♪

「あと一つ質問良いですか？」

「なによ……。」

「悠夜会長に惹かれるのはなぜですか。」

僕の疑問だ。一般生徒が何故惹かれるのか。容姿か？生徒会長と管
理生の座か？性格か？

彼女はさも当然と言う顔をした。

「……あの人は神に近いわ。神の申し子。存在するだけで私は尽く

したくなった。好きになることは禁忌よ。知らない内に惹かれてしまう。あのお方が纏ってる空気に魅了されちゃうのよ。分かった？」

「……はい。貴女が偶像崇拜者だってことが。」

「本当に生意気ね。殺したくなるわ。」

女子生徒が素早く僕の首に手をかける。

えっ？

「フフッ。私は本当はB組なの。騙されちゃうなんてやっぱりあまあまな1年生ね。個別授業を受けてるから2年生の殺戮生徒が分からなくてよかったわ。私はね管理生の実力試そうと思ったのよ。」

首を締めてる割には力を入れてない。殺す気はないってことが分かった。頬を緩ませる一般女子生徒……訂正、殺戮女子生徒。僕はそんなことにいちいち芝居してられない。無表情を貫く。彼女を見つめ。

「皆言うんです。皆……。」

「はっ？この状況で何いうき。」

「皆、悠夜会長を神だと言うんです。なぜあの人を神だと言っ？崇拜される悠夜会長が可哀相です。」

「……………」

「頼られるばかりで、崇拜されて皆近付かないって聞きました。皆が皆を監視してるんですよね？神に触れさせないためと。」

「……知ったような口ね。うざいわ。」

「管理生ですからね。知ってるんですよ。この学園の流れが。」

「……貴方に何が分かるの？私には私達殺戮生徒にはあの方しかないのよ！あの方が望むなら自殺だって大量殺人だってしてやるわよ！だってあの方だけが全てなのよ！貴方も今に分かるわ……。あ

の方以外この学園で信じられる者がいないと！肝に命じておきなさい。」

そう言って彼女は僕の首から手を離すとスタスタと歩いてしまう。

「最後に一つだけいいですか！」

カッコイイ去り方に水を差す僕。

律儀にもちゃんと振り返ってくれた。

「……何よ。」

「なぜ錐吾先輩はあまりモテないんですか？顔は良い方だし性格だって冷静ですがちゃんと支えてくれる人なのに。」

「……悠夜会長に敵対意識を持つ者は好かれないのよ。生徒管理生ってだけで仲良いなんて本当にうざいわ。」

「そうですか。」

ならこの1年間僕は2、3年から嫌われること覚悟か……。友達、海斗以外にも作っとくべきかな。仲間は多いに越したことはない。女子中心に作ればハーレムも夢じゃないな……。嘘です。

「……………」

「……………」

「………どうかしました？もう用はないですけど。」

「質問来ると思ったのよ。あと1つだけなら答えてあげても良いわよ！」

なんだそれ？

「じゃあ……武器を教えてください。」

「素直に名前とか聞かないのね。」

「武器で覚えたほうが楽なんで。」

名前なんて覚えるの面倒だ。だけど武器の種類を知るためにも聞いてみた。

含んだ笑いをする殺戮女子生徒。

「フツ。生意気でうざいわ。武器は鎖鎌よ。」

「鎖鎌の人……。」

「人とか酷いわ。別の言いかたにきなさい。」

「では……おばさん。」

「お姉さん……よね？もしかして殺されたい。」

冗談ですよ。

「鎖鎌のお姉さん……で良いです。」

「よろしい！じゃあね。雅也君。」

あっ僕の名前知ってたのか。

「……さよなら。鎖鎌の先輩。」

小さく呟く。

結局のところ、お姉さんなんて言うほどの趣味は持ち合わせていない。

僕は鎖鎌の先輩とは背を向け逆の方向に歩き出す。

僕にいやと言うほど絡んでくるイカレタ宗教団体の先輩方。名前を覚えるだなんて多過ぎる。

でも良かった。」

手に持つナイフを見えないようベルトへセットする。

あと少しでも首に力入れてたら殺してしまうところだった。

あの人に肩を捕まれた瞬間に腰からナイフを抜きとりかけて、いつでも出せるようにしていた。

「……本当にあまあまな先輩で良かったよ。」

さて生徒管理室に向かわなくては……。

第6章 後編 殺戮試験内容

限られた者しか出入りすることの出来ない部屋
それは血に溺れてしまった者だけが許される

「お聞きしたいことがあるんですが良いですか。」

「なんだい……雅也君。」

生徒管理室―それは管理生だけが足を踏み入れることが許される場所。部屋は教室の半分ぐらいで両脇にロイヤル系の本棚。中央に長机、向かい合うようにして木材のいすが3つずつ並んでいる。そして大きな窓から見れるこの学園の校庭と夕焼け色に満ちた景色が目を引く。

僕の目的の人物―金髪に切れ目な蒼い瞳は細められ本に見入っている。端正で整っているその顔はいつみても眩しすぎる。いすに座り足を組み頬杖をついている悠夜会長はどこか気品があり額縁に納めておきたいほどだ。僕が話しかけても読書は続けている。僕が邪魔なのか……。だけどこっちは詳細が知りたいだけだし、さっさと聞いて帰ろうか。

自己決定を心の中心らへんで考える。よし！善は回らず急げだ。

「実力試験のことなんですが、あれでトップになれば管理生が変わってしまうって本当ですか？」

「うん。そうだよ。だから頑張ってね。管理生は一般の学校で言う学年委員長のような者だから……それで管理生になれなかった場合は今までの特待生扱いなくなるから気を付けてね……。それともそ

の扱いが嫌だったら別に良いけど……。」

本を読みつつ、口だけは動かす。その口調は本を読んでない時と同じに感じる。このまま目をつぶっていれば本を読んでいるなど誰も思わないだろう。それにしても、特待生にだけある扱い……食事、出席日数、内申、そして周りからの態度。この周りの態度はけっこう酷くなり、管理生と言う立場が嫌になりそうなのが予想されるが、孤独強度を上げておくか。

そして、付け足すように悠夜会長は口を開く。

「それとこの学園創立時から実力試験で管理生が変わったことがないから気をつけてね……。」

その気をつけてね……はという意味だろう僕は冷めた目つきでため息をついた。

「分かりました。ありがとうございます。」

そう言って一礼する。相手への敬意を込めて。生徒会長に対しての敬意と殺戮に対しての敬意を。

この世界を作りあげた悠夜会長は優しい微笑みを僕に向けた。

「慣れた？この生活。」

「はい。悠夜会長を信仰するヒステリックな住人達に日々命狙われている罪人の気持ちがわかりました。」

「クスクス。面白いこと言うんだね。」

冗談だとも思ってるんですか。僕は常に迷惑ですけど、この生活で自分が強くなってきたのが分かるからいいですよ。なんと云っても相手は上級生だ。武器使用されたら避けるか太刀打ちするかの選択しかないから。

あつ、そういえば。

「悠夜会長。貴方はこの生活に慣れているんですよね。僕に教えて下さい。」

「何か問題が？」

「クラスの生徒を統括出来る術を。最近、わがままな連中が増えてるんです。この前は自習時間に武器を出して遊んでましたよ。このままでは危ないですよね。」

本当に困っている。それを統一する管理生の立場は辛いものだ。その時は僕が武器片手に悠夜会長をマネしてニッコリ笑顔で注意した。何を感じたのか苦笑いで武器をしまってくれた。

ふっ……技は盗んでなんぼ。悠夜会長に感謝！

僕の困った表情に悠夜会長は、うーんと考えからニッコリ爽やかすぎる笑顔を向けてきた。

ヤベー余りの爽やかさに僕の身体が惚れ込んでるのか寒気がする。

「そうだね……調教してあげるといいよ。」

ちよっ調教？

「僕の時も最初は酷かったんだ。そういう人は身体に教え込まないと……ね。」

「……例えば何を？」

「とりあえず授業に支障がないように利き手ではないほうの手の指を全て折る。そして縛り上げて急所以外の外部を損傷し、血が露出しないように内部出血させまくる。」

笑顔で言う悠夜会長。その光景は想像しただけでも恐ろしい。楽しみに殺って……じゃなくてやってそうだな！

「そして極めつけに夜間授業でその行為をわざと公開することで恐怖を埋めつける。そうすればたいいは落ち着いてくれるよ。」

「……。悠夜会長は出血を見るのが好きなんじゃないですか？」

「どうして？」

「いや殺人で快感を感じるのなら血を見て喜ぶのかと思って……。内部出血とかでは血は見れませんよ？」

僕のふっとした疑問に悠夜会長はクスクス笑って、本を閉じた。そして僕をじつくりと見た。

顔に何か着いてます？

「……クスクス。そんなことを聞いたのは君が初めてだよ。そうだね……人を殺す行為は快楽に直系する。それは人様々なんだけど。殺される側の悲鳴が最高だと感じる生徒もいれば歪んだ顔、原形を留めぬ姿を作り出すのが好きな生徒もいるよ。別に皆が皆、血を見るのが好きな訳ではないよ。」

「へえ……皆、血が好きだと思っていました。」

殺人鬼ってそういうものばかりだと思っていたけど違う。想像と現

実の違いってやつか。

「それは偏見だよ。あつ。錐吾君は弓矢でしょう？彼は物理的攻撃にしては血は見づらい。だから動く標的が一発で視界から消えることで満足する。ゲーム感覚で殺人する子だよ。……けど僕は違う。」
「えっ？」

遠くを見つめるように目を細める悠夜会長。

「僕は殺人することは素晴らしいとは感じない。だから血は見たいとは思わないんだ。」

驚いた。悠夜会長は最も血に染まっている気がする。その行為に満足してそうな気が……それも僕の偏見か。

「誤解しました。」

「んっ？」

「けれどその行為は死ぬより恐怖を感じます。人がすることではないです。」

ぼそぼそと呟いた思いは悠夜会長に届かなくていい。

「雅也君……なんて言ったの？」

「いえ。それでは失礼します。」

「……そう。じゃあね。雅也君。」

最後まで笑顔を向ける彼に背を向け歩きだす。僕は悠夜会長を好きになれないかもしれない。感覚が違いすぎる。

あの人は殺して楽にするよりも痛みつけるだけ痛みつけて死ねない

恐怖を永遠に続けるんだ。

どんなに殺してくれと哀願したところで彼は優しい笑顔で苦しみを与えるに違いない。

階段を駆け降りる。

「……殺さないことが優しさだなんて限らないはずだっ。」

僕は何故悠夜会長が神だと言われてるのが分かった気がした。

第7章 殺戮試験前は辛い

あなたは知っていますか？

―僕は知りすぎて困っています

まだまだ続きそうな特訓。一般の殺戮生徒達は気配がないためもう帰ったんだろうな。

ただいま夜の授業真っ最中の居残り中。闇しかないこの世界で月さえでないとは僕に味方してくれる者は誰もいない。静かな校庭には炎の灯火さえ感じられないよ。

「実力試験は明日だぞ。それで勝てると思っているのか？管理生。一切りでいい。貴様が俺に対して一回でも傷さえ負わせればいいんだ。ただそれだけのことも貴様は出来ないのか？錐吾や悠夜の時はもっと早く出来ていたぞ！」

道化師の視線がよけい鋭くなる。特訓を開始してから3時間。体はボロボロだ。道化師は素手で隙を見ては技を繰り出す。さっきは脇腹に蹴りを避けきらずどうとうと真っ正面の思いを受け取ったところだ。

僕は重たい身体を起こしながら道化師に怒りの思いをぶつける。

「僕はあるの2人のように出来た人間ではないんです。」

「管理生である限り、そのようなことをいいと思っているのか！」

疲れたよ。眠いよ……パトラッ。

道化師が僕の顔めがけて腕を振りおろ……ってやばい！！

僕はとっさに避け膝をついた。

「雑念……何を考えてる？」

「休みませんか？」

「ふざけるな！ まったくどうしてこんな簡単な授業も出来ないんだ。俺を切ればいい！ どこでも一筋の傷さえ付けられればいいんだぞ。そんなことも出来ないのか？」

「分かってますよ。そこまで言うのならそろそろ切られてくれませんかっ。」

ナイフを握り直し道化師へとナイフを振り下ろすがあっさり避けられる。

まだだ……まだ。足りない。それは速さか？ 力か？ 戦略か？

何回も何回も斬り込もうとするがやっぱり避けられてしまう。もう一度振り下ろすが！

「またか……。クッ！」

ガシッ！ 手首をつかまれ体ごと地面へと投げ出される。

クラッ

身体が倒れる。弱い自分。この姿勢が一番ふさわしいかもな。

「なぜこんなにできが悪い。今年の生徒はレベルが低いのか。落胆させる。」

「きつと内申に手違いがあつたんですよ。」

「それにその揚々とした態度も気に入らない。そこまで体が重傷なのに危機感を感じないのか？」

「どうでしょうね？ 僕はもとからこういう性格なんです。」

「……ッフン。黙っていればいいものを。弱い者が減らず口をたたく。」

「悠夜会長に頭が上がらない道化師には言われたくないです。」

「なんだとっ!?!」

あつ怒った。でもここまできたらヤケだ。僕は本当に精神的に正しい行為が出来ないような気がするな……もとからか!というよりここにいる生徒はそういう奴ばっかか!!

僕は真っ正面から道化師と向かい合った。

「悠夜会長に生徒管理を全任一任。そのせいで悠夜会長は部活も出来ないんでしょう。生徒会長もやっているため時間もない。かわいそうです!」

「ふっ何を言い出すかと思えば……。それは当たり前のことだろう。悠夜の器量なら出来ることだ。」

「その当たり前前ってなんなんですか。彼は神だと言われる。それは当たり前なんですか。」

「分からないのか? 天賦の才能。悠夜は一般の者とは違う。あいつはいつか、裏の世界を牛耳る存在だ!」

「裏の世界……。」

「裏の世界では機関の統括で抹消する者、悪人を管理する者、この世界の均衡を崩す者と内通する者など様々な分野で分かれている。それら裏の全てを管理するトップの管理者に悠夜はなるのだ!そして乱れたこの世界を正す存在だ。」

そんな世界があるだなんて、まるでゲーム。そう僕はこのゲームを楽しんでる。想像できない気づかない。思いもしない現実を知らない。いったいどれほどの否定が存在しているのだろうか?

「夢は大きいって大切ですよ。」

「ふっ何を言っている？だからこそ今のうちに媚びている者が多いんだろう。その世界では階級が決まっているからな。そこが表とは違う。中世の貴族階級にどこか似ているな。」

縛られるのか……僕はどのようなのだろう。

「僕も媚びていた方がいいですか？」

「自分の将来が安住でいたいならな。だいたい一緒にいて分かっていると思うが、あいつは反抗する者には痛めつけるタイプだからな。」

そうだった。恐い人、いや神の存在だってことに。
でもまだ見極めていない。悠夜会長にはまだ何かある気がしてならない。

「そうですよね。ではそろそろ道化師。」

「なんだ？やる気になったか？」

「賭です。道化師……。」

「こい！」

道化師が構える。右手に握っていたナイフを道化師に向かい投げる。
それに対し専用武器を投げたことに驚きつつも避ける道化師。

僕の持つてる武器が一本だと知る道化師にとって僕の行為は負けを意味するが。

ザッー！

刃物の音。道化師の頬からは赤い液体が流れている。それを手ですくい赤い液体を確かめる道化師。

「フッフッフ、ハハツハハツハハツツハハアハハ！！！」

笑い続ける道化師に対し、投げたナイフをとり2つのナイフを見て安堵する。道化師……もしかして僕のように精神的に壊れたんじゃない……って思うほどのおおげさな笑い方。怖いです。

僕がしたこと。それは一本のナイフを至近距離で手放すことにより道化師の気を緩めさせ（なにぶん、僕が一本しかナイフを持っていないと思っている）僕がもう一つのナイフで切った……と。

「これで今日の特訓は終わりですよね……。僕は明日の実力試験のため帰りますよ。」

寮に帰るため足を踏み出す。うん。疲れた！膝はガクガクでやっとの事で歩けるぐらいだぞ。

「そのナイフ……どこで手に入れたんだ？ 確か貴様は一つしかないはずだが？」

笑いをこらえつつ僕の肩を持った。もしかして寮に送ってくれるのかな？ 道化師の肩を借りるしかないため体重をよりかからせる。

「それは悠夜会長からです。生徒管理室にあったナイフなんですが必要ないから持って行くように言われたんです。」

「そうか悠夜がか。きつと分かっていたんだろうな。明日のじー。」

その続きを僕は覚えていない。ただまぶたが重く全身から力が抜けた気がした。

明日と言うよりもう今日の夜に行われるだろう実力試験。僕はとりあえず動物的本能に従い現実逃避した。

第8章 前編 試験中は隔っこで

全校庭を使い月が昇る頃
殺戮生徒達は漆黒の瞳へと変わる

「実力試験のルールは無傷で自分の学年で生き残ることだ。傷を負えば試験失格。傷を負った順で最下位が決定し最後に残った1人が管理生になれるというサバイバル形式。分かったな？」

全校生徒の3分の1をしめる殺戮生徒が校庭に集合して道化師の言葉に耳を向ける。恐ろしいことに悠夜会長、錐吾先輩の姿を確認したときには周りの殺気めいた視線に僕の呼吸がしづらくなった。

悠夜会長を見ることがさえ許されないのか。いやそれとも1年に対して圧力をかけているのか。2，3年生は道化師の説明を注意深く聞いているもののこれから行われる試験にピリピリしている空気が伝わってくる。

「試験会場は校庭。1，2，3年生が合同で行われている。1年はこの東校庭。2年が南校庭。3年が森と化してる北校庭。西校庭は3年合同で使って良いことになっているがよほどの自信家の限り行かない方が良い。そこは最強の神が待ち受けている。」

道化師が故意的に悠夜会長を見るとニコリっと笑った悠夜会長が道化師に無言の制圧をかけた。

悠夜会長が陣取っているのか。管理生になりたいがために闘いを強者共が挑むが悠夜会長にかなう者はいないんだろう。僕も1度は闘いたいし専用武器を知りたいとも思ったがそれで自分の地位がなく

なると思うと嫌だ。ルールは全学年共同だ。たとえ別の学年にやられたとしても……。

「闘え！俺と！！」

はい。試験が始まり20分がすぎました。周りに見えるのは東校庭特有の5メートル感覚に設置されている木ばかり。僕の現在地は東校庭の隅っこの自然とふれあおうコーナーらへんだろう。なにぶん砂埃しか立つことのない中央においては標的にされ失格にされることが間違いない。まあさておき、目の前に現れた漆黒の服に身を包んだ男子生徒が僕の面前へと立ちふさがってきた。

誰だろ……最低限の孤独を愛する僕にはこの生徒の名前が分からない。それが孤独強度を高めることに精進する僕の努力が垣間見えている。ふっ……汗と涙の結晶！

という自己陶醉の思考回廊を巡り合わせるほど猶予を与えているのに動きが遅い！

男子生徒が構える前に僕はナイフで彼の頬をかすめる。赤い液体が少量流れ男子生徒はその速さに目が閉じられないのかあきっぱなし。ドライアイにならないことを祈って……。

「闘う価値がないよ。」

そう言ってナイフをしまう。男子生徒は漆黒の大柄の男によって除外される。除外といっても試験失格なので寮へと連れ戻されるわけだが。これで5人目だった。だけど武器を構える前に相手を負かす。それが僕の戦法。

「管理生みつけた。」

明るい声に前を向く。日本刀を持った女子生徒が勢いよく振り下ろした。これまた知らない女子。告白しにきたわけじゃないのがよくわかるほどの情熱的な目は狂気だ。

「みんな教訓でもされたのか特攻隊のごとく真正面から来るんだよな。そんなので管理生相手に勝てるわけがないだろうに。」

「んっ？何言ってるの！聞こえない。」

そりゃそうだ。独り言だからな。

僕は日本刀を避けつつナイフを強く握って隙を伺う。

夜の場合限られた明暗、視野でしか相手をとらえられないため誰と闘ってるかさえ分からなくなる。知ってることは道化師達に常に見張られてることぐらいだろうか……。あちこちの視線に襲ってはこないだろうかとは思ったもののそれでは実力試験の意味がない。

キューン

「何のお……」

「キャッ!!」

そこで振り返るが体の方が早く動き何か服をかすり地面に刺さる。血は……出ていない。しかしそれは女子生徒の腕もかすめていたらしく女子生徒は刀を落としてしまった。血が流れている。失格だな。それも横取りされた。僕の獲物を。

見知らぬ男がその女子生徒を手刀で眠らせ持ち運び気配をたった。地面に突き刺さっている何かをつかみ僕は確認する。

キューンー

何かが放たれる音にとっさに身構え来る場所を確認し避ける。

「矢……?」

手に持って確かめると同時にまた弓矢の音が連続でし矢がこちらへと来る。つが打たれる方角がバラバラでどこから来ているのか分らず、ずっと避けるしかない。

「どこにいるんだ。」

場所さえ分かれば接近しナイフで何とか出来るのに……弓矢は長距離戦向きだ近距離のナイフとは違う。

それに最悪なことに弓矢。僕の苦手とする人物が使っている武器に僕は知らずと冷や汗をかく。錐吾先輩のせいで対抗が出来てしまっただけらしい。

それに動きたいのに動こうと定めた場所にちょうど矢が来て逃げられない。どれほどの名手だよ!この1年管理生に向かってこんな矢を連射する奴は!一度地球温暖化について話しておかないと。

矢はな、木で作られているんだ。こんなにやったらもったいないじゃないか!!!!

にしても、弓矢なんて誰が使って？

「こんなもんなの？ 雅也！」

暗闇から現れた人物に目を見張る。見上げた木に佇むのは僕のもつとも避けておきたい兼親友。

「海斗……。」

僕の漆黒の瞳がゆらいだ。

それは僕にとって1番闘いたくない相手だった。

「雅也く避けてばっかじゃ勝てないよ!!！」

弓矢を巧みに操る海斗は闘いさえもゲームと化すのだろうか。

「海斗。何でお前が？」

「だからいつてるじゃん！俺は管理生を倒して強くなりたい！それがたとえ雅也だとしてもゲームではよくあることだから！ってさつきから何度目だよ！」

この闘いは試験はゲームなのか。海斗にとってはゲームなのか……。

僕と同じ思考を持つ同族一海斗。僕は親友とは闘いたくないよ。

「海斗は管理生になりたいの？」

「そうだよ！ゲームの主人公はトップに上り詰めることに意味があるんだよ！雅也はそういうことも知らないの？」

「いつ海斗がゲームの主人公になったんだよ。」

「最初っから！雅也は脇役に過ぎないよ。」

「ふざけるな。そんなもの妄想だ。現実を見る。今の主人公はこの僕だ！」

「……………」

「……………」

僕と海斗の間に睨み合う形で静寂が生まれる。なんとかして別の策を考える。

退くか？闘うか？それじゃ、結局変わらない。管理生なのだから正々堂々と逃げることなく闘うべきだ。だけど傷つけたくはない。ナイフを握っていた右手が汗で滑る。

「ねー！雅也？勘違いしてない？？どうせ俺らは闘う運命にあるんだよ！管理生になれるのは1人だけだからどうせ闘うんだよ！なのに雅也が闘う気がないんじゃないじゃ俺つまないじゃん！俺たちは友達だよ。だからこそ正々堂々とやりたいんだ！これじゃウサギを狩る獅子の気持ちにもなれやしない……。」

そうだよな。どうせ闘う運命にあるんだ。だったら逃げずに正々堂々とやらないと。

「ウサギ？悪いが俺は狩られる側じゃなくて狩る側の方が良いんだけど？」

「やっとやる気になってくれた!？それじゃ俺を狩れるもんなら狩って見てよ!！」

そう言うなり弓を構える海斗。それに対し僕はナイフを構え直す。

「勝った方が主人公で良い？」

「ああ。もちろん。」

僕らは笑いあい動き出した。

第8章 後編 試験中は隅っこで（前書き）

最初の方に悠夜会長と錐吾先輩の会話が入ります。

区切りが良いところで本編に戻ります。

第8章 後編 試験中は隅っこで

西校庭―悠夜会長が支配下におくこの校庭は木が1本もなく辺りが見回せるほどだ。

僕は冷たい視線で校庭のゴミとなった3年の先輩方を軽蔑し優しげな笑顔で中央に佇む白い制服姿の彼にため息をついた。暗い景色のなかでも目をひく金髪。僕の存在に気づいたかのようにその蒼い瞳は細められた。

「辺りは血の海とその残骸。なのに貴方はその返り血さえ浴びてないとは……神というより化け物じゃないですか？悠夜会長。」

「なんとでも言えればいいよ。2年は錐吾君がやっぱり残ったの？」

「はい。なので2年の方の試験は終了しました。ちなみに僕は見学しに來ただけなので闘うつもりはありません。」

「そう……。退屈していたところだったのに。」

悠夜会長はつまらなそうに視線を落とした。一つ一つの動作が妖美で血の気がひきそうになる。赤い世界に佇む白い彼。違和感を感じるほど似合っていない。

本当に人には見えない。

「だいたいの3年が悠夜会長へと闘いを挑むんですよね。貴方にさえ勝てれば学園1位と呼ばれることはおかしくないのですが悠夜会長もその地位を与えるほど優しくないわけですか。」

「いつもは称賛と敬意の眼差しを向ける彼らだって所詮は殺戮生徒。僕に対して情などない。表面上にすぎないんだ。そんな彼らに優しさなど必要ないだろ。」

「さすが『殺戮の貴公子』^{プリンス}の異名を持ちますね。尊敬してますよ。」

多くの敵を蹴散らしてきたことは分かるが彼は息を切らすこともなくさっきまで闘っていたことが嘘のように血が1滴もついていない。だから違和感を感じる。彼がやったようには見えないから。それに比べ自分は相手の返り血を浴びて所々染みになっていた。

「問題は1年だね。雅也君……残っているかな？」

「分かりません。」

自分の言った言葉に疑いの目を向ける悠夜会長はどこか恐く感じたので補足する。

「1年に結構強い子がいるんです。誰かを傷つけること悪いと思わない非常な子が。そして瞬発力、力量、策力……どれも申し分のないくらいで最初はどうかと思ったんですけど磨けば光るとはこういう事を言うんですね。」

「それほど分かっているとは専用武器は弓矢なんだね？」

「はい。あれだけの期間であそこまで取得できる人間はそうそういませんよ。」

「だったら見物だね。雅也君がどれほど成長したか。そして管理生にふさわしいのがどちらか。」

悠夜会長はそう言うなり東校庭へと歩き始める。

「良いんですか？そんな行動して。もしかしたら道化師に見つかるとかもかもしれませんよ。」

学年別校庭に別学年の者が立ち入ることは許されていない。それも実力試験の時にだ。

「良いですね？道化師。僕らはどうせ試験が終わった身なんですし。」

この場には2人しかいないというのに問いかける悠夜会長の言葉に答えるように足下の近くに道化師のナイフが突き刺さる。そのナイフを抜き取り手に持つ悠夜会長は東校庭へと歩き始めた。

行って良い……と言う意味なのでしょうか……？

僕もついて行くことにした。

「あー！！もう。どこだよ！雅也！！」

海斗が慌てたように大きな声で叫んだ。馬鹿な奴……それじゃ居場所が分かってしまう。

「ここだよ。海斗。」

僕はわざとらしく低い声で海斗を上から呼んだ。

海斗は、ぱっと後ろからの声に振り向くが誰もいないのを確認し驚きの表情を作り出した。

「待てよ！俺がいる場所はそもそも木の上だよ！後ろから声がするわけがない……。だったらどこから？」

僕は海斗が驚いているのを良いことに瞬時に動き出した。

ヒュッー

「えっ上からナイフ！？上に雅也がいるの？」

ぱっと上を向く海斗。だけどこれで僕の勝利は決定した。

僕は地上から矢を海斗へと投げた。海斗の腕に当たり服に血がにじむ。

「なっ！？なんでー！！」

「僕はやはり主人公のようだ。」

勝ち誇ったように僕は鼻をならした。これで僕は管理生だ。悠夜會長を観察できる。

「あゝ！負けた！！どうしてどうやったの雅也？」

「海斗が1瞬だけ矢に集中してるとき殺気がなくなるんだよ。今まで殺気がある場所から矢が来ていたから。そこで、木のとっぺんに登ってナイフを不安定な状態で置いておいたら落ちるだろ。ナイフより先に海斗に近づいて声をかけて下に降りたときに地面に突き刺さっていた矢を海斗に向かって投げたんだ。」

「雅也……速すぎるよ！！あー！せっかく誰にも邪魔されないように雅也以外倒してきたのに！！やっぱりゲームみたくいらない。現実みるしかないのか……。」

本当に主人公気取りでいこうと思ってたのか。別にこんな異常な学園生活の主人公はそれぞれだと思う。それは一般生徒から講師へとなったばかりの先生。一人一人の物語があると思うから。だから海斗も一人の主人公だと思っただけだなあ。

僕はがっかりと言わんばかりのオーラを出し道ばたの草をむしる海斗を見た。

やれやれ、まだ分かんないのか。

パチパチパチー

僕はここにいるのがおかしいと思って眉間にしわを寄せた。拍手の音が聞こえるがそこにいたのはココにいるのがおかしい相手。

海斗は嬉しそうに顔をあげた。

「錐吾先輩！悠夜会長じゃないですか！！！！どうしてこんな所に！」

「海斗……負けたのですか？」

錐吾先輩が地面に突き刺さっている矢の数々を見る。

「すみません！でも面白かったです！！」

「矢の無駄うちは避けて下さい。当たらないと分かったら打たずに相手の隙をうかがうものです。」

そうだよ！ついでに地球温暖化についても考えてくれ。

にしても錐吾先輩に訓練受けてたのか。冷静に考えればそうだよな。

専門武器の使い方を教えてくれるのは手だれている先輩方か。

「雅也君が勝ったんだね。どうだった初めての試験は……？」

悠夜会長はさっき海斗が避けて地面に刺さった僕のナイフを手に取り笑顔で渡してきた。

「楽しかったです。でも僕もまだまだですね。もっと道化師に鍛えてもらわないといけないかもしれません。」

「雅也はもう強くななくていいの！俺が困るだろ！！」

海斗が僕に対しつつこみを入れた。その姿はさっきまでの闘いが嘘のようだ。

「その意欲が大切なんだよ。雅也君、君は今まで強くは望まない子だったけど親友との闘いが君を変わらせたんだね。」

「いえ、とりあえず管理生であればいいんです。それ以外は面倒なので望みません。」

「クスクス。……それが強くなるってことだよ。努力しなくちゃね。」

「僕は悠夜会長、貴方を……。」

「雅也く。まさかの告白とかしないよな！」

僕の詰まった言葉に海斗が怪しく笑った。

「はっ？何を言ってるんだ。僕はそんなつもりで言ったんじゃない。」

「じゃあなんて言おうとしたんだよ？」

「どうでも良いだろ。ああ疲れたな。」

僕の心の内は知らなくて良いと思う。

沈黙していた錐吾先輩があごに手を置き考える動作をし口を開いた。

「そういえば悠夜会長。先日噂で男子陸上部部長に告白されたと聞いたんですが……。」

えっ……？ 今男子からって。

「錐吾君。まさか信じてるの？」

「はい。あながち嘘には見えませんでしたし。陸上部部長の熱い視線はいつも悠夜会長に向けられてましたしねえ。承諾したんですか？」

「……するわけないだろう。」

ゆっ悠夜会長の笑顔がひきつる。錐吾先輩、何故張本人に聞くだなんて大逸れたことを！ 負けず劣らず無表情な錐吾先輩も怖い。

「錐吾君。悪いが僕にはそっちの気はない。それに丁重にお断りしたよ。泣きながら去ってしまつて陸上部だけあるねえ。」

「それは良かったです。神と言われる貴方が道を踏み外したらどれだけおもし……ゴホン。大変だったことか。」

「可哀相なことに翌日には学校に来なかったんだ。噂では階段から落ちたと聞いたんだけど。」

「ベタですね。きっと誰かに突き落とされたんでしょう。」

「彼がBクラスでなくて良かったよ。きっと階段から落ちただけでは済まなかったろうに……。」

「本当です。きっと自ら顔面ノックする精神不安定者になっていたでしょうね。」

「なっなんだ？ この合ってるようで合っていない会話。恐すぎる。しか

も絶世な笑顔と沈黙な無表情では……ビリビリと殺気が。

「なあ雅也。俺怖いわ。」

「……僕もだ。」

話に区切りが付いたのか悠夜会長が僕らに笑った。さっきとは違い爽やかな笑顔。

「とりあえず今日はもう帰ってよく寝ること。明日の授業いつも通りだからね。道化師、中期管理生は彼らです。」

そう言った悠夜会長は後ろを向き道化師のナイフを誰もいないはずの木に投げる。

「やっぱりばれていたのか。悠夜、明日は集会で全生徒の目の前で管理生の主任式があるからな。それだけは覚えておけ。」

道化師の気配が消えた。やっぱり見ていたのか道化師。

「じゃあ寮に帰ろうか？」

悠夜会長が寮へと足を向ける。僕らは彼の後を追い、錐吾先輩はゆっくりと僕らの後を追った。

安堵した日々を思い出す

それは悲しい時ばかりだったけど楽しかった

第9章 前編 次の学校行事は？

日常的な生活に安堵するがここが殺戮クラスなのには変わらない

『中期生徒管理生は前期と同じく3年……。』

道化師の声が体育館に響く。

管理総会は年に3度あるものでその度に管理生を實力試験で決めているのだ。前期管理生は入学式の前日に新2，3年生が實力試験を行って入学式と同時に管理生が発表される。前期の管理生1年の場合實力試験を行っていないので先生方が選抜するらしい。

「そしてたまたま僕が選ばれた。いや僕が一番素質があるからかな……。」

選ばれた身を全く考えない血も涙もない先生方には熱い情熱をプレゼントしたいよな。

『それでは先ほど呼ばれた管理生の代表者挨拶。』

そのアナウンスと同時に台に登壇する一人の男子生徒。金髪に切れ目の蒼い瞳。180センチはありそうな長身は身のこなしがゆるやかで、気品あふれる雰囲気を持つ悠夜会長。

悠夜会長がマイクを持ちにつこりと微笑んだ。あれも0円スマイルだと最近気づいたんだよなあ。

きゃー！悠夜様ー！！！！！！

そして迫りくる女子達の歓喜。彼女達こそ本当の情熱を持っているそうだ。先生方に教えてやってくれ。

騒音に見兼ねた悠夜会長はニコっと悩殺スマイルを繰り出した矢先、口を開いた。

みんなこの笑顔で黙り込むんだよなあ……。

「女子生徒は９９９のダメージを受けた！なんで倒れこむんだよ！あの生徒！」

僕の隣には驚愕な表情で顔をゆがめる茶髪に深緑の瞳を大きくした海斗がいた。

「やあ海斗。君との場所は僕が望む月と海の距離なんだけど。どうしてここに？」

「分かってるって。沈む時にとっても近いんだよな。」

「いや現実的な距離の問題だよ。」

「……………それってすごく遠すぎやしないか！」

「今更か。気づけよ。」

いつの間にか周りの女子達のお陰—もとい女子達がステージに近付

こうと列が乱れた為に海斗も自由に來たらしい。

「にしても人気だな！俺としては悠夜会長みたいな存在になれば恋愛シュミレーションが限りなく出来ると思うんだけど！」

「僕が思うに現実ゲームみたいじゃないと思うな。」

「そこは夢見るの！あの笑顔でいったいどれだけのマイナー女子を落としてきたか……。」

「はっ？」

「ツンデレ、ヤンデレ、ドジッ子、委員長タイプ、それともマセてる女子を。夢がありすぎるよ！会長。」

「いや海斗の思考の方がよりすぎるんじゃない？」

「しかもあの制服を女子の制服を直に触られるだなんて！なんてうらや……。」

一人の世界に入った海斗にはもう話しかけない方が良さそう。しかも考える傾向がすぐ空想になるとは殺戮授業で頭がどんどん侵食され、まともに正常してないのか。それは僕も同じかもしれない。

ふっとステージへ視線を送ると悠夜会長がスラスラとお決まりの文句を述べているところだった。その間も女子達は黙って熱烈な視線をキラキラと送っているのだが先生達はこの光景を見ても何も言わないんだよね。

せめてもの癒しが悠夜会長だから許しているのか？

「……目標に今後の管理生徒会活動で意識していききたいと思います。」

1礼し降壇する悠夜会長は慣れているのか意気揚々としていた。そしてまた女子達の歓声が上がる。

やっぱり名物みたいだな……。

「なあゝ雅也！」

海斗の妄想ワールドが終了したのかさつきとは落ち着いた眼差しを僕に向け下を見る海斗。

「俺って最近大人になった気しない？」

「正常に戻って何を言い出すかと思えばいきなり……。」

「正常って……俺はもとから普通だ！」

「……はいはい。っで？」

「こっち側の世界に入ってからかな！何か冷静に物事見れるようになったんだよ！でもそれは夜だけで朝はどくも無理なんだよね。夜の方が集中してるからかな。」

「そうなのか？僕はよく分からないな。近くにいるぶん感じづらいんだろう。」

「そっかゝ。雅也は朝と夜で違う感じしない？」

違う感じ……？

「しないと思うけど。」

「ふゝん！雅也はもとから冷静だもんね！」

「どこか冷静さが皆無なやつと一緒にいるからだろ。」

「えっ？誰だよ！」

「心に聞くといいよ。」

「……心臓の音しか聞こえない。」

「少しでも期待してた僕が馬鹿だった。」

「ちょっ！どういうこと！？」

「そのままのい……。」

『これにて生徒総会を閉じます。1年から教室に帰りなさい。』

アナウンスが体育館に響き流れた。周りの1年がざわつく。

「じゃあ帰るか。」

「待ってよ！雅也！」

帰る途中、体育館の隅っこでなぜだか女子達がうるさいと思ったら
悠夜会長が苦い顔して中心にいたのは言うまでもなかった。

なんであんなにモテるんだ！？

「なんか、暇だよな〜！！！」

「黙って食べろよ……。空想大好き人間め。」

「ちよっ！何だよ！それ〜。……にしても混んできたね！」

昼食の時間になり寮へと戻ってこうしてもとから並んでいた昼食を
食べている僕と海斗。

「お昼時だからだろ。」

もともとから30人程度が座れるであろう長椅子と長テーブルが3列に並んであり一学年1列がそこを使う。今では満席状態。その中でも管理生は中央の席に座り一般生徒より豪華な食材で作られている。

これだから管理生は止められない！

「雅也のはいいよなく！豪華で。ちようだい！！」

「ダメだ。」

「そう言わずに。」

海斗がフォークでメイン料理の若鶏のソテを取ろうとするが間一髪のところまで皿をずらした。

バギイっ！

「……………」

「……………」

フォークが机へと変な音がして刺さる。その音に振り向く生徒達の視線が冷たいが1瞬の沈黙があったものの何もなかったように会話を始める生徒達はどこか変に感じる。

普通なら騒ぐはずなのに。こんな事別にどうでも良いみたいだ。確かにどうでも良いけど。殺戮クラスだからこそこんなこと日常茶飯事に過ぎないのかもしれない。

「どうしよう！雅也やっぱり怒られるかな。この机案外高そうだし！こんなに穴あっちゃって。」

「もう怒られるだなんて優しいもんじゃないよ。弁償だよ……弁償。」

「そんな～！！！！どうしよう……俺そんなに金持っていないよ！あ～！！！！どうしようどうしよう！！！！」

頭を抱えるとは実にこういう事なんだろうな。まさに海斗の今の姿に当てはまっている。弁償なんて嘘なんだけどまんまと引かかるだなんて……。

「あっ！笑ったな！雅也。親友がこうして困ってるって言うのに！！」

「ごめん。ごめん。大丈夫だって……直してくれるよ。これぐらい無料で」

「本当！？よかった～！！」

嘘を本当に信じるだなんて単純にもありすぎるのだが、いつも通りの会話に変わりはない。昨日のことで何かあったらどうしようかなとも思ったが大丈夫そうだ。昨日傷つけた腕は制服のせいでどうなっているか分からないが……。

「どう？昨日の傷……。」

「そんな深刻そうな顔すんなよ！大丈夫だって！さすが雅也。傷が浅くて絆創膏だけですんでるし！」

海斗が答え終わると同時にチャイムの音が鳴りお昼休みへとなる。それと同時に動き出す生徒達。入室は自由なのにチャイムが鳴るまではここから出てはならない規則があるんだよね。

「僕達も行くか……。」

「そうだね!!」

席を立ち出ようとするが目の前によく知る人物が立っていたので立ち止まる。僕はお決まりの挨拶をするべく笑顔を作り出す。

「こんにちは。悠夜会長、錐吾先輩。」

「こんにちは！先輩方！」

「こんにちは。雅也君、海斗君。」

明るい金髪に蒼い瞳。180センチはある長身にしては無駄な肉がない。10人中10人が彼の笑顔を一目見ただけで惹かれてしまう顔を持つ悠夜会長。今日もその爽やかすぎる笑顔が眩しいです。

「……こんにちは。1年管理生に海斗。」

そして鴉のような黒髪に黒縁眼鏡でその鋭い目を隠し無表情に近い顔をする錐吾先輩。

にしてもこの2人は本当に正反対だな。僕と海斗みたいに何も言わなくてもお互いに罵り合う関係になればいいのに!……いやもとから僕と海斗はそんな関係じゃないけどね。

悠夜会長が現れたことにより意識した生徒達が僕らから遠ざかる。僕に対してはイジメ。悠夜会長に対しては眩しすぎて近寄れないんだろう。孤独強度のレベルが上がるチャンス!?

「これから君たち2人に来てほしいところがあるんだ。専用武器を

持って……。」

専用武器を持って？こんな昼間から何をするんだ？

「僕は持ってますから。海斗は？」

「取ってくるから待ってて下さい！」

海斗は専用武器を取りに自室へと戻る。なんて言っただって弓矢だ。小型ナイフと違い、そう簡単に持ち運べる物ではない。海斗を追うように錐吾先輩が付いていく。

「……………」

「……あの！」

僕と悠夜会長の2人だけになり沈黙しつつも何とか話を切り出そうとする。

なんだろう。昨日まで彼を救おうと考えてたのとは違う感覚に覆われる。夜は近付きたいと思っていたのに朝は避けたい。矛盾している気持ち。海斗が言っていた違う気持ちってやつか。それより今の僕が気にかかること――。

「なんで……専用武器が必要なんですか？白昼堂々と何するつもりですか？」

悠夜会長はニツコリとした表情で穏やかに口を開いた。

「年に一度……この時期に2人だけ選ばれる。その2人は嫌でもやらなければいけないことがあるんだ。」

それは答えではない。ただの前置き。

「それは何ですか。」

「クス……それはお楽しみ。」

ニッコリとあの時のステージ上にいた時、女子達が黙り込んだあの笑顔をした悠夜会長。遠くの方で女子の叫びと倒れた音がしたのは気のせいであってほしい。

「取ってきました！悠夜会長！！」

タイミングが良いところに海斗と錐吾先輩が帰ってきた。

「じゃあ行こうか。あの場所へ。」

その言葉を発したのが悠夜会長でどこか楽しげに見えた。とりあえず僕は悠夜会長について行くしか道はない。

なんでこんな所に……。

僕達に待ち受けていたのは過酷にも武器など無関係に感じた。

体育館において花や色取り取りの装飾品がありまるで何かの行事の準備が行われている。

「つというわけで、君たちには学園祭の実行委員になってほしいんだ。」

「『つというわけで』……って意味分かりませんよ。」

にこやかに言う悠夜会長に対し冷静に僕は聞き返した。相変わらず錐吾先輩は無言で海斗は錐吾先輩の前では落ち着こうとしているし、見ててそわそわしいことこの上ない。

「ほら、この学園みんな勉強で忙しいし実行委員なんて雑用係なんだよね。だから君たち2人が頑張ってくれればいいんだよ。」

「だったら悠夜会長と錐吾先輩がやればいいじゃないですか？」

2人なら……管理生で信頼もされているこの2人なら別に僕達じゃなくても良いはずだ。僕の疑問に錐吾先輩が面識臭そうに溜息をついた。

「僕たちは去年やりましたから……実行委員は一回切りしかできないですよ。去年とだいたいかぶってしまうので、こうしてまだ学園祭を体験したことのない1年生を1名と学園祭の基準を知っている2年生を1名、学園側で選ぶのですが今年はどうやら1年生が2名の名のようですね……。悠夜会長。」

「そうだね。刹陸学園理事会の決定権は絶対だから。どういう志かは分からないけど多少僕たちも手伝うように言われて下準備だけはしといたから……後は学園祭でやるプログラムや必要な人員はまかせたよ。それじゃ健闘を祈るから。」

必要な人員？検討を祈る？まったく意味が分からない。

僕は悠夜会長に諦めたような視線をひそかに……いや睨む形で送った。

「……んっ。これから僕と錐吾は生徒会の集まりあるから後はよろしく頼んだよ。」

優しい笑顔。

僕の思い届かずっ!？

「分かりました……。」

「じゃあまた後でね。」

「……………」

「……………」

軽く手を降る悠夜会長と無表情の錐吾先輩を見送って僕らは無言に陥った。

確か下準備だけしてくれたんだよね……体育館の装飾だけか。

というより

凄くメンドクセー!!!

僕のキャラが崩れるくらいの叫びをあげたい。いやありえないだろ。この学園はどんだけ特定の生徒に重労働させる気だよ。なんだ？過労死をさせたいのか！？僕はどうかやら生徒達だけでなく学園理事会のお偉いさん自体にも嫌われているのか！

「やったね！雅也。楽しそうじゃん！実行委員なんてそうそう出るもんじゃないよ!!」

「海斗……分かってる？海斗も実行委員なんだよ？」

「……………」

「海斗？」

「えー。なんでだよ？やだー!!こんな雑用係!!俺がなんでしなくちゃいけないんだ。」

他人事だと思っていたのか……。悪いな海斗。お前は僕と同じように嫌われてるんだよ。

「なんて僕は自虐的だな……………」

「えっ？なんだよ。まさ……。避けて雅也!!」

さっきまで嘆いてたのに何かに気付いたように突然声をあげた。

「えっ？」

シューー！

その瞬間、黒い物体が目の前からやってきた。

「……………っと。」

それを紙一重で避ける。

手裏剣？なんで昼間のこの時間に……。

僕の目の前にいる女子生徒の両手には手裏剣が握られていた。辺りを見回すとさっきまで装飾をやっていた生徒達がそれぞれ武器を抱えている。

……それじゃ健闘を祈るよ。

さっき悠夜会長が言っていた言葉を思い出した。そう言うことか……。だから専用武器が必要なのか。

海斗も事態だけは納得したのか弓矢を構えられるよう手だけを動かした。

手裏剣を持つ女子生徒が口端を下げやれやれと仰いだ。

「実行委員になられたのが1年生だけとは嘆かわしいことですわ。この学園も落ちたものですね」

目の前にいる女子生徒はどこか上品に思える。どこかのお嬢様だろう。しかし手裏剣を構えてはいる姿は似つかしくない。

可愛いのに勿体ない。

まだ争う気はないのかな。お近づき……いやこの状況を説明しても
らわなくては。

「どういう事ですか？ 実行委員になるには2年生と闘わなくては
いけないのですか？」

「何も聞いていないのですか？」

「はい。なんにも。」

「学園祭の準備は実行委員と2年生が基本的に行います。先ほど
夜会長がおっしゃったように人員があなたたちには必要です。しか
し私達もどこぞのしれぬ者などに従うほど落ちてはいませんわ。だ
からこうしてあなた達を試すのです。私達、殺戮生徒達がちゃんと
納得するまで……これでいいですか？」

人員を確保するために戦う？ 弱肉強食のような感じか。

「分かりました。最後に1つだけ。これは毎年行われることですか
？」

「ええ。毎年です。それではいいですね？」

「いいだろ海斗？」

どうせ、この道も通らなくては行けないのだろう。見たところ錐吾先輩がいないことに安堵する。錐吾先輩って百発百中だもんな……命がいくつ合っても足りない。

えっとー人数は30人くらいかな。2年の殺戮生徒全員ってところか。見たことのない武器も存在するがやってみないとわからない。

なんかワクワクしてきた！

「俺はOKだよ!!」

海斗の瞳が妖しく輝いた。その時、お昼休みが終わり授業の鐘が鳴り響いた。

第9章 後編 ぶっ……文化祭か(前書き)

錐吾視点↓主人公↓錐吾視点の順でいきます。
混乱したらすみません。

第9章 後編 ぶっ……文化祭か

あの時のことを思い出す

自分のことを庇おうとしてケガした友のことを

雲1つない青い空。自然に囲まれた学園内にある寮と学校の間にある噴水がキレイにも水しぶきを上げた。噴水の近くにあるベンチに腰掛ける僕と悠夜会長。僕は心配そうに息をついてしまう。

「大丈夫ですかね？ 雅也君と海斗君。彼等はまだ1年生なんですよ。」

「1年生だから……？ そんなの関係ないよ。学園側が選んだんだ。それだけの実力を彼等は持つてるはずだよ。」

「しかし……。」

目の前に同学年の女子生徒2名が近づいてきたため僕は口をふさいだ。

こんな気の乱れた姿を見せるわけにはいかない。あくまで冷静に……が僕のモットーですから。この場の空気を知らずにか女子生徒達は気軽にも声をかけてくる。

「あのー調理自習で悠夜会長の好きなチョコレートケーキ作ったんですけど食べませんか？」

「そうそう！ できれば錐吾君も一緒にどう？」

実際授業中のはずなのだが見たところエプロン姿だ。調理実習で何か作っていたのだろうか。

本を読んでいた悠夜会長は本を閉じたかと思うと表向きの絶世の笑

顔を振りまいた。また……そんな笑顔を欺瞞に満ちてるその仮面。

「ありがとう。だけど今忙しいから今度また誘ってくれる？」

その笑顔に赤面する女子達。

「あっ、はい！分かりました！じゃっじゃあ錐吾君はどう？」

「僕も嬉しいのですが悠夜会長と話がありますので今度にしてください。」

どうせお茶なんてこの人達の場合、悠夜会長と近づきたいがためなのだろうけど……。

「そう。じゃあまた。」

悲しそうな顔をして彼女達は足早と去っていった。悠夜会長は面識臭そうに息をついてまた本をひろげた。

「もしかしていつもお茶してたりするんですか？」

この人の場合、その腹黒……いや絶世の笑顔で何人落としているか分からない。悠夜会長は横目でこちらを見ると余裕そうに笑顔を浮かべた。

「僕がそんな人間に見える？別に君がそう思ってるなら構わないけど……。」

見えます。

だなんて言えるわけがなくてただ僕も同じように息をついてはぐらかした。

さて彼らは今も息をしているだろうか？

「ねえ雅也。あとどれくらいかな？」

「見れば分かるだろ。5人だ。」

向かってくる手裏剣やら槍やらに避けながら僕と海斗は気怠そうに会話を始める。

「脚の踏み場なくなってきたね。海斗がちゃんと考えて行動しないから。」

「えっ？雅也が後先考えずに切り付けてるせいじゃないの？」

「僕は優しい人間なんだ。切り付けたりしてない気絶さてるだけだ

よ？」

「なんか……誰かに似て来てないか。」

「なんか言った？」

「いや……あと5人か！だったら接近戦は任せたよ！！」

そう言った海斗は弓矢を構えつつ僕より後ろへとこの闘いから辞退した。

えっ？ 辞退……？

どこに行く気だよ海斗！？

心の中で叫びつつ目の前の敵に集中する。

「先輩方は疲れた様子もないし剣やら鎖鎌やらそしてハンマー……小型ナイフではかないそうにない相手ばかり……。僕が主人公じゃなかったら脱走してるな。」

独り言をもらし軽く笑った。

だけど遠距離戦向きの弓矢なら相手がこちらにとらわれている内に攻撃できる。それがこの闘いの戦法だった。

「おい。ちゃんとこっち向けよ！」

男子生徒が剣を構えこちらへと振り下ろす。

この闘いにも慣れてきたことだ。僕はさっと避けるが別の方向から今度は槍が頬をかする。

「槍って投げるもんだっけ！？」

剣使いの男子生徒の手首にナイフを突き立てる。それを見て手を引く男子生徒の足首には海斗の弓矢がかすっていた。

「こんなかするだけじゃ！そこら辺のと同じように倒せないぜ。」

剣使いの男子生徒は余裕そうに笑った。

僕は間合いを取り直しナイフを構え直す。槍によって頬に出来た傷からは赤い液体が流れる。

さすがに疲れてきたな。

相手に最小限の傷を付け負けを認めさせるには急所から外して狙わなければいけない。急所ばかりを重点的に特訓してきた僕自分としては、最初に急所に目がいき攻撃まで時間がかかってしまう。急所を狙うよう特訓した道化師を少し恨んだ。それにしてもそろそろ効いてきてもいい頃……。

「うっ……何をした!？」

剣を構えた男子生徒がよろめく。それもそのはず。後ろで援護射撃をしていた海斗が余裕そうにクスリと音をたてて笑った。

「さっきから見て気付かないの？かするだけでこの鬨の勝利は確定してるんだよ??この矢にすり込ませてるのは睡眠剤!!だからみんなかすっただけで寝ちゃうんだ!」

海斗の言葉をちゃんと聞いて聞かずか剣を持った男子生徒は深い眠りへと落とされる。

「いつのまにそんなことしてたのよ……!?!」

今度は槍使いの女子生徒が一気に間合いを詰めてくる。実際、この槍使いはさっきの剣使いとは違い矢のことも重視している。だったら僕がちゃんと気を引きつけないといけない。

「錐吾先輩が教えてくれたんだ!! 部屋に戻ったときに実験で『試してみてください』って言われたんだ!!」

愉快そうに笑いながら海斗はまた矢を放つ。実に楽しそうに実に面白そうに……。相手が反応するよりも速く相手の動きを見切ってあいつは矢を放つ。2年生とはいえど実力は五分五分だ。それほど強くなってきたと言うことなのか。単に相手が手加減してくれているのか。槍使いの首を狙ってナイフを突き刺す。

「ふっ甘いわよ!」

「矢ばかり集中してる方が……でしょ?」

それを避ける槍使いに右手で溝を殴る。これには吐き気を覚えたのか動きが1瞬止まり、矢の餌食に……。

僕はちゃんと役目を果たしてるぞ!

青空に浮かび雲が太陽の光を妨げ心地よい暖かさになってきた。

「そろそろだね。」

そう言ったかと思うと本を閉じ立ち上がる悠夜会長。

「はい。終わってますかね？」

悠夜会長が歩き始めそれに追いつくようベンチから起き上がる。

「僕たちは、これくらいだろう？」

「覚えてるんですか？」

僕の質問に懐かしむように彼は目を細める。

それは1年前―悠夜会長が2年生。僕が1年生の時。29名の殺戮生徒が僕らに牙をむいた。この時の2年生は手加減も知らない血を求める者が多く管理生を選び抜くのにごく手間がかかったらしい。この時から悠夜会長は学園初の殺戮生徒の中の殺戮鬼。天才と呼ばれていた。そんな彼に刃向かおうとする者はいない。しかし1年ならば勝てると思いこみ僕を集中攻撃する者が多かった。

『錐吾君。援護射撃……任せるよ。』

『はい!』

僕らの息は合っていて僕は勝てることを確認したその時。

「目の前から手刀が飛んできて君の腕に……あれは実際僕が当たるはずだった。なのに君が庇うから。迷惑な話だよね……。」

そう言いつつも後ろを振り向き、申し訳なさそうに悠夜会長は僕の腕を見た。

はぁ、そんな顔しないでください。

「すみません。あの時は体が勝手に動いたんです。今は後悔してますよ……庇ったこと。あなたの本性知りませんでしたからね。」

その言葉を聞いた悠夜会長はそっか、と哀しげに微笑んだ気がした。僕は彼の表情を見ないように体育館の扉を開けた。

始めに目に付くのは無惨に広がる生徒達。と同じ世界を経験したものにしか分からないちよっとした血の臭い。

体育館の中央に2人の自分より未熟な男子生徒が床に座っていた。

「悠夜会長……勝ちましたよ？」

「これで認めてもらった！！家来が増えるー！！！！」

「それ……何か違う……。」

「なんで！！？」

くたくたの雅也君と疲れながらも笑っている海斗君。なんだ心配する必要なんかなかったのか。

それにしてもだらしない。たかが2人倒せもしない同級生どもに冷たい視線を僕は送った。

さて、矢の試作品の成果も分かったことだし、後片付けしなくてはなりませんね。

第10章 前編 生徒会との関わり

これで良いと思ってる？

それは今が悪いって事をいってるつもり？

管理生だけが入ることが許される生徒管理室。朝の集会では悠夜会長を中心に今日の日程から最近の注意を聴かされていた。

「今週は風邪が流行っているようだから体調管理に気をつけるよう連絡をしておいてね。」

「月曜と火曜合わせて20人以上の生徒が休んです。文化祭準備に支障がでなければいいですが。」

「錐吾君。本当にただの風邪だよね？」

うっ……始まった。日に日に増していく悠夜会長と錐吾先輩の言い争い。それは悠夜会長の心配そうな発言からなんだけど……錐吾先輩には嫌みに聞こえるらしい。

「?……というと？」

「誰かが故意的に休ませているんじゃないの？」

「……………風邪ですよ。それか誰かを熱愛するファン達がその熱でバタバタ倒れてるだけじゃないですか？」

「よほど人気者なんだね。その誰か……が。困ってしまうよ。」

「そうですね。なんとかしてほしい物です。」

2人の間に冷たい空気が流れる。怖い。なんだこの温度さ!?

「ところで雅也君。生徒会にいかなくちゃいけないこと分かってる？」

「へっ？ふぁい！じゃなくてはい！ってどういうことですか？」

そこで話が変わるようにかけられた言葉につい変な声を出してしまった。

「だから学園祭実行委員に任命されたのだから生徒会で話し合いたいのだけれど学園祭のこと……。」

先日行った試験後に学園祭実行委員の任命式に海斗と無事任命されたのだが何をすればいいか分からなくてただ毎日過ごしていた。といっても学園祭は2ヶ月後なのでまだまだ余裕はあると思っていたが。

「今日の放課後、生徒会室に来てもらえるかな？生徒会のメンバーとも顔合わせしてほしいと思ってたところだし、海斗君にもちゃんと言っておいてね？」

優しい笑顔は凍てつくほど怖かった。

錐吾先輩とのバトル後の笑顔は無理に作ってるから恐すぎます！

「……と言うことだから海斗、放課後生徒会室行こうな。」

「えってことは2、3年生に会うつて事？それも殺戮生徒で統率さ
れている訳じゃないよね！？」

「そこまでは分からないけど……。」

「えー！？やだやだ！！！」

「ちょっ！叫ぶな！」

今は休み時間のため先生がいないものの教室内の生徒達の視線が痛い。あわてて海斗の口をふさぐ。

「そんなに殺戮生徒が嫌いなのか？」

どうしてそこまで嫌がるのか……別に先輩後輩の関係だけだと思
うのだが。

「雅也は道化師と個別だから良いけどこっちじゃ大変なんだよ！！
！ほら！専用武器強化のために先輩達と一緒にゃん！？だから出さ
れた課題とか達成できないと厳しいし！なんかそれぞれの武器の仲
悪いからその武器使ってるだけで軽蔑の目で見られることが多いん
だよ！！！」

差別？に近いのだろうか……。武器が違うだけで軽蔑な目でみられ
るのか。そんなの知らなかった。

「大丈夫だろ。」

悠夜会長もいるし。そんなことはないと思うけど。」

「雅也は本当に知らないんだな。一般殺戮生徒の苦勞！錐吾先輩の拷問！あれが女の先輩からの命令ならいいけど……男だよ！？」

「確かに錐吾先輩は怖そう……って何？海斗ってマゾ？」

「そんな冷たい目でみるな。違う！ただ錐吾先輩が女ならあの性格も大分イケたよ！ツンデレキャラとして！？」

錐吾先輩がツンデレ？

あの容赦のない人を計算でしか見ない悠夜会長を嫌ってるあの人が……ツンデレ。

僕はおもいきり笑った。

「アハハっ！！海斗……それはいささか間違ってるぞ？」

「いや。ああやって強がってるふりしてるだけで実は心の中で好きだよオーラ出してるんだよ！」

「……………ぶはっ！あはは！ありえない！海斗、妄想もたい……が……………」

「どうしたの？雅也。そんな熊を見るような驚いた顔し……て……」

「こんにちは。一年管理生に海斗。」

僕らの前に現れた黒髪の黒ぶち眼鏡。蛇のようなするどい目。無表情な顔は毎度見えます。

「こっ……こんにちはです。錐吾先輩？」

「先輩！？なんでここに！？ベタな！マジでこういうことってあるんだな！雅也。」

「……………」

「……雅也？」

海斗……僕にはそんなこと言う勇気がないよ。

錐吾先輩は僕へと折りたたまれた紙を差し出した。

なんだろう？脅迫文？

「一年管理生。生徒会室の地図です。分からないと思って届けるよう悠夜会長に言われたんです。」

「ありがとうございます……。」

素直に受け取り、安堵する。錐吾先輩怒ってるのかな。さっきの会話聞いてたよな。

「それと海斗……。」

「なんですか！？先輩！」

「僕は今まで甘かったようです。今夜からみっちりしごくんでそのつもりで。では……。」

錐吾先輩が教室から颯爽と出ていくのを確認して授業のチャイムがなる。

ざわざわと生徒達が席に戻ったり準備する。僕も席に座り、机の中から授業道具をだす。

目の前の席で時間が止まったように動かないやつがいた。

「雅也……俺どうしょ。」

今頃知ったか！変態妄想男が！

第10章 後半 僕の偏見でした

成績優秀な実力主義の完璧主義者が集まる生徒会
そこにおおざっぱな人間が来たらどうなるか

「ここかな……生徒会室。」

錐吾先輩から渡された生徒会室までのメモを片手に放課後こうして
生徒会室にたどり着いた。

たどり着いたまではいいんだけど問題は……。

「はぁ……どうしよう雅也。もし殺戮生徒の先輩方が居たら俺死
んじやうよ！それに錐吾先輩がどんな顔して俺を見ることか。」

「あーたぶん、いつも通りの無表情だと思うけど？」

「そういうことじゃないの！！他人事だと思って……はぁ。」

いつもとは違いテンションが低いというか、元気がないというか……
：そこまで先輩が嫌なのか。このまま生徒会室に入ったら逆に先輩
方に目をつけられると思うのだが。

「大丈夫だって！もしかしたら悠夜会長以外は一般生徒かもしれないな
いだろ！」

「本当に！？なら大丈夫だ！！GO！」

「ああ。多分な……。」

「なんかいった？小さい声で。」

「いやなんでもないさ。僕が扉、開けるか？」

「俺が開けるー！！！」

なんて単純なやつ。扱いやすいというか扱いにくいというか。それ

だから楽で良いのだが。海斗が勢いよく生徒会室の扉を開けようとドアノブに手をかけた。

ガチャッ!!!

教室は管理室とほぼ同じぐらいなのだが違うところがあるとすれば机の数といすの数が多い。それ故に部屋のスペースが狭く感じる。しかし空気が張り詰めているせいか海斗の顔がひきつるのを感じた。うん、やっぱり想像してたとおり生徒会室って静かだね！

「やっと来たね雅也君。海斗君。近くの席に座ってくれるかな？」

1番遠くに座っている悠夜会長が頬杖をつきながら僕らに声を掛けた。

長机は1台で3人座れるものなので4台が囲むようにして並べてあり、ちょうど向かい側の悠夜会長を中心に左右には錐吾先輩と2年の女子生徒が座っていた。副会長だということが何となく伝わってくる。悠夜会長と目があいニッコリと笑い目の前の席に座った僕と海斗が一息ついたところで悠夜会長が口を開いた。

「一応自己紹介しておこうか？僕らは君達を知っているけど君たちは知らない……。」

「はいはい！先陣切りまうす！悠夜会長は黙っててくださいね！」

ええっ！悠夜会長の隣に座っていた女子生徒が勢いよく立ち悠夜会長に向かって黙って……だなんて。

「分かったよ姫野^{ヒメノ}。そのかわり落ち着いてね？」

「はいはい悠夜会長。それじゃあ！私は副会長をやってる2年A組、姫野 優衣^{ヒメノ ユイ}。雅也に海斗だよね！呼び捨てOK？」

副会長……テンション高いな。

でもふんわり長髪で黒い大きな瞳、血色の良さそうな肌。なかなか年上にしては可愛いな。

「いいですよ。副会長さん。」

「OK！OK！よろしくお願いしますね！」

えっ海斗！？さっきまでの落ち込みはどこに行った！？

「おっ！海斗はノリがいいねっ。雅也もこんくらいのテンションでいかなくちゃ！」

「はあ……？」

「そうだぞ！雅也も副会長が言ったとおりこんくらいのテンションでいこうぜ！」

やべー、海斗と同じ人間が2人……。可愛さがうざさに変わっていく。

「ヒメちゃん、もうそれくらいにしておけや。俺は書記の二宮 大智^{ニノミヤ ダイチ}。3年C組だ。よかったら仲良くしてくれよな！」

金髪に紫がかった瞳。短髪でさわやか系のお兄さんに……僕は少し引きつった笑いを浮かべた。

だってその先輩の周りにはー

「だいちー早く帰ろうよ。もう疲れちゃったあ。」

「だいちゃん！今日は私のこと泊めてくれるよね？」

「違うわよ。今日は私の番よ!」

えっとーこれが噂に聞く両手に花……ってかこんなところに女連れ込んでいいのかよ!?

「……よろしくお願いします。」

「よろしくっす。二宮先輩! うらやましいくらいのもててますね!」
「海斗そんなことないよ。ただ俺の周りには女が集まってくるだけ。」

傲慢ですか!?

最後に自己紹介していない男の先輩に少なからず視線を向ける。

「なんだよ……。」

ぎらっとした目つき。所々のピアスに武士を思わせるような長髪を一つ縛りにしている。でも制服はきっちり……。いやだいたいぶ省いてますね。ネクタイなんか揺るいし第2ボタンまで開けてるし。

それに何よりも怖いっ!?

「こつらゝ。湊人! ^{ミナト}海斗と雅也に眼つけないの!」

「あゝあ! うっせえよ。」

「はあ!? 何よ!」

「……………」

「何でシカトすんのよ!」

副会長の姫野先輩が声をかけるもイライラしているのが伝わるぐらいの殺気を!?

「悪いな。あいつは会計の市川イチカワ 湊人ミナト。いつもイライラしてんのか
自己中心的なやつだよ。あれでも2年だからな。大きな心で接して
くれや。」

二宮先輩が先輩らしくも気を遣うような発言をした。これが先輩な
んだよね。今までの先輩達とは違うよ。いや、錐吾先輩達が悪いと
は思っていないけどね！にしてもここまで殺気をだすだなんて。

「あの……二宮先輩。」

「なんだ？雅也。」

「市川先輩のクラス教えてもらってもいいですか？」

「ああ……確かBクラスだったよな？なあ市川？」

「んだよ。文句あんのか。」

でしょうね。Bクラスですよね！こんなわかりやすい殺気をだすな
んて。

「それじゃあ、さっそく本題に入ろうか？」

間を置いて悠夜会長が優しげにほほえんでいた。

その笑顔からは早くしてくれないかな……？という怖い感情が読み
取れた。

刹陸学園学園祭は8月の中旬の3日間の内に行われその期間だけこの学園を一般公開している。地域の住人や父兄にこの学園の素晴らしさを見せつけるためだ。当日には教育委員会のお偉いさん達もが来るらしい。

1日目は開催式、クラス別の模擬店。

2日目には全校生を体育館に呼び出し講演会及び個人発表（団体発表）。

3日目には部活別の模擬店及び閉会式。

模擬店による資金の配分は人数分とその企画の規模による。装飾は学園にある物をつかい足りない物は生徒会側に申請し生徒会の人を買うに行く。

「……ここまでが学園祭の詳細ですが何か質問等はありませんか？」

息もつかないほどに詳細をのべた錐吾先輩は辺りを見回す。すごい肺活量！2、3年生がほぼ生徒会は学園祭は経験者なので特に何もない。この詳細も1年のためだけに言ったようなものなんだろうなあ。

「あのあの！実行委員は何をすれば良いんですか？」

この空気にもなれたのか海斗が手をあげ質問する。
適応能力高っ！？僕はまだ他の2、3年生が怖くてそんなことできないぞ。

「実行委員は生徒会の手伝いと言うことで学園祭に何をやりたいかアンケートを採り累計しプログラムを作ってくれば全然OK!。その他にも模擬店の配置や資金の配分はあんたらにお任せします!」
「分かりました〜!」

副会長の言葉に海斗が元気よく敬礼のポーズをとった。

生徒会の手伝いか。思ってたより楽かもしれないな。悠夜会長が見かねたように席を立った。

「これで生徒会の話し合いを終わらせるよ?各自寮に戻るなり、外に行くなり好きにして良いよ。」

その言葉を聞いた生徒会員は立ちこの教室を出る。

先輩達はほとんど3年生だから緊張したが案外やっていけそうだ。そろそろ戻るか。

「おい、海斗「実行委員」!!お前ら今から茶でも飲みに行かない?」::は?」

声を掛けられ席を立つと生徒会書記の……?

「誰でしたっけ?」

「二宮だよ。確か自分たちから志願したんだろ。しっかり働いてくれよ。そうしないと首が飛ぶかもしれないからな!」

かははっと笑う両手に花持つ二宮先輩。その花たちはこわ〜いと二宮先輩に寄り添うように抱きついている。そんな甘い状況より今は―

「志願……?」

「首が飛ぶ?」

僕と海斗が苦い顔で首をかしげる。

「首が飛ぶのは冗談だよ！1年は冗談も通じないのか？にしてもお前ら志願したって俺は聴いたんだけどね。違うの？」

「はははっ！ですよね。」

「僕らの首が飛ぶなんて……実現したら怖いですよ。」

「えっ？おまえらそんなに本気にしてたのか？」

Bクラスの僕たちにとって冗談にならなさそうで怖いんですよ！それより志願などしてない。するはずもない。ならどうして？これも裏での口あわせかな？

「彼等は率先してこの実行委員を受け持ちたいと声を掛けてくれたものだから、彼等に頼んだんだ。こちらとしてはすぐ役立ってるよ。ありがとう。雅也君。海斗君。」

そこには微笑む悠夜会長の姿があった。しかし目は笑っていない。そのことに冷や汗をかく。

「いえ、僕らも役立ててもらい光栄です。なあ？海斗？」

「そうですよ！！悠夜会長のためなら何だってします！！」

やっぱり裏での口あわせか。危ない危ない。自分の首がマジで飛ぶところだったぜ！

「ありがとう。それくらいの意欲があると助かるよ。ところでこれからこの2人と話したいのだけでも。だめかな？二宮。」

「ん？ようは出てけってことか？別に構わないけど悠夜が土下座して『お願いします！二宮様！！』って言ったらいいよ！」

「冗談のつもりかな？それとも生徒管理及び生徒会長命令で学園内の君の立場をなくしたいのかな？」

「職権乱用。分かりましたよ！生徒会長様！」

そう言って書記の二宮先輩は女子生徒を引き連れて足早にこの生徒会室から出て行った。やっぱり悠夜会長には逆らえないな。彼を敵にしたら命はないと思った僕であった。まあ死にたくはないし。

気づけば生徒会室には僕と海斗、悠夜会長だけだ。

「君たちは自分たちから志願したと言うことになっているからちゃんと話を合わせてくれて助かったよ。」

いえいえ自分の首を守っただけですから。

「それじゃあ、またね？」

話それだけ！？

「はい。それでは悠夜会長。」

「また会いましょう！！」

「……………」

「……………」

「……………」

「早く出てってくれないかな？鍵閉めたいから。」

「！そうですね！すみません。行くぞ海斗！」

「ラジャー！どっちが先に寮に帰れるか勝負だ！」

「そんな面倒なことしたくないよ。」

僕と海斗は廊下へと飛び出した。

生徒会ってまじめな人間ばかりじゃないんだな。

第11章 それは晴れた日のことです

8月某日（木曜日） 晴れ。

地球が両の手を合わせても数えたりないくらい廻って早何億年の今日この日、僕は授業を抜け出して屋上のベンチに身を預けていた。背中をよりかからせ空を仰ぐ。

雲一つない青空！なんてすがすがしい。

「……昨日は海斗と夜遅くまで文化祭について考えてたしな。午前中は寝ないと無理そうだな。」

誰もいない屋上は清々する一人の時間が作れて嬉しい。最近は本格的に文化祭実行委員の活動を行っている。

海斗には悪いがこれも管理生だから許されることだし何より環境が良い屋上。真新しいとしか感じないほど整えられ観葉植物も置かれている。

心落ち着かせて眠れそうだ。

よし！寝るぞ。

「……………」

熟睡

なわけねえよ！眠れない。まぶたが爽快リフレッシュだよ。

うーん。何故だ？

「理由もわからないだなんて痛い……。」

そこまで悲しい人間になりたくないけど自分の性分を考えると別におかしくないのかも知れない。てか悲しい人間Ⅱ僕みたいな図式でもいいかも知れない！上手い方に考えれば孤独強度を上げるチャンスじゃん！

「なんて馬鹿なこと考えてるのも疲れるんだよね……。」

僕、本当はすごく真面目な人間ですから。こんな海斗みたいな空想に入るつもりはない。

「良かったら話、聞こうか？」

「いえ結構です……はい？」

「おっ！よく見たらお前管理生じゃん。えっとーまさき？まさかづ

？まさ……なんとかだった気が。」

僕の視界に勝手に入ってきた普通はここにいるのがおかしい男子生徒。だって今、仮にも授業中ですよ？それなのに管理生でもないのに抜け出すだなんて……この学園から追い出されたいのかな？

紫色の髪はボサボサ、いやこれもファッションか？珍しい黄色の瞳は猫のようにつり目。着崩れした制服。耳、腕、首もとには光り物が目につく。

ちゃらそう……。あまり関わりたくないタイプだな。

「まさあき？まさお？いや根本的にまさから間違ってるのか。」

「雅也ですけど。」

「そうそう雅也！管理生は授業出なくてもいいってか？うらやましいね〜」

「……貴方は？」

「俺はしがない生徒さ。自由を愛するばかり授業にはあまり出ないんだよ。久々にこの制服着ただけど、堅苦しくて息もしづらかったから授業抜け出してきちゃった。錐吾の監視の目を抜けるのも苦労するし……だから学校あまり来たくないんだよな〜。」

「Bクラス生徒なんですね。」

「なんで知って……ああ錐吾とは面識があるんだよな。だったら知ってるか。」

紫色の髪をボリボリ搔いて僕の隣に勝手に座ってきた。2年Bクラス男子生徒。殺戮生徒でありながらどこか緊張感がない。ちゃらい印象がそのまま性格にも出ている感じた。本当に殺戮生徒なのか？

「でっとうしたよ？」

「はい？」

「悩んでるんだろ。先輩として聞いてやるよ。」

「はぁ？別にいいですよ。誰かに頼るほど弱くありません。」

それもお会って5分もしていないのに頼るだなんて出来ない！

「分かってねーなぁ、管理生。お前の周りには強すぎるやつしかないだろ。それに上の学年で殺戮生徒の中でも異端者に含まれる奴には普通の感覚を持ってるやつはいねえ。常識外ればかりさ。そんな中で普通の価値観を持つこの俺が相談に乗ってやろうって言うてんだよ。」

「……なにを。」

言っているんですか？

普通の価値観。確かにもうそんなもの期待できそうにない。僕の周りにいる人たちは普通じゃない。それは知ってる。けど異常の中の異常。少し外れているのではない。全てのパーツが異なっているのだ。そんな中に囲まれた僕に正常な判断を下してくれる相談相手はいない。

まあ……海斗に相談など論外すぎて笑えない。

僕はあまりに自分が滑稽に思えてクスクス笑ってしまう。あれ？今笑えないって言ったばかりなのに、矛盾している。

「あはははっつあはははー！！！」

「おっおい？どうした？お前までもう狂ってたりするのか？まだ毒牙に侵されてないと思ってたのに。」

「……失礼ですね。自分自身の不幸に笑ってるんですよ。」

「それって笑って良いのか？逆にこえーよ。」

「先輩はどうしたんですか？」

「は？何がだよ。今は俺のことより管理生のことだ。一般の殺戮生徒は余るほどいるが管理生は一学年に一人しかないからな。」

「得に話したいことはないですが一つ気掛かりなことがあるんで聞いて良いですか？」

何か知らないが僕は笑ったことで少し気分が良くなったようだ。

単純すぎる僕の心。

「悠夜会長は優れていますよね。ずっと不思議だったんです。何故誰も疑問に思わないのか。彼はただの人です。それなのに扱いが驚異。おかしいですよ。何故あそこまで讃えられるのか。」

「……………お前は会長依存症じゃないんだな。良かったよ。まだ染まってなくて。」

「はい……………」

「いいか。よくきけ。」

僕をしっかりと見据えた先輩はさつきとは違う雰囲気を纏っている。僕は神経をとぎらせ彼の言葉を受け入れた。

「会長は神と讃える……………あれは密室療法だ。自由に外との交流が取

れないこの世界じゃ心がヤンデいる奴の方が多い。考えがおかしくなる。」

「……………」

「会長と言う全校生を支える立場にいる悠夜様はヤンだ心のはけ口になってるんだよ。始めはヤンデる精神を持つ生徒は少ないけど、狂気は伝染するもんだ。だから会長は讃えられて当たり前になる。会長信仰者は純粋に愛するファンタイプとか服従心を持つ者が大多数だが、その中でも悠夜会長を守りたいだの考える騎士きどりな奴もいる。」

守りたい……。それは僕が一度思ったこと。彼を救うことは守ることに直徑するならばー。

「僕も悠夜会長信仰者……?」

「はっ? 管理生どうした?」

「いえ。続けてください。」

「そのタイプは後輩によく現れる。例えば錐吾。」

「錐吾先輩が?」

どこか敵意を持っている印象を受ける。だって彼は常に悠夜会長に冷たい視線を投げかけ、関わりたくないというようなオーラが見えるから。

「不器用な愛情表現だよ。あいつは悠夜会長に害を与えると見なした生徒は片っ端から片付けてるんだよ。この前悠夜会長に告った男子生徒もその一人だな。女子ならともかく男が男に告るのは例外だったんだろ。」

……あれ? 何かひっかかるぞ。

僕は頬がひきつる感じがした。僕の変化に気づくこともなく彼はさ

もふざけたように、はにかんだ。

「そして俺も狙われてるわけよ。いやゝモテる男は辛い。」

「何かしでかしたんですか？」

「言ったら？俺は自由を愛する」「自由を愛するあまりに悠夜会長を殺そうとしているんですよね？見つけましたよ。『毒牙もつ番犬』^{ケロベロス}の異名を持つ水橋君^{みずはし}。授業を抜け出すとは良い度胸です。」

「えっ？」

「そういうお前は『死を誘導する狙撃者』だろ。錐吾……。」

黒髪で黒ぶち眼鏡をしている男子生徒。きっちりとした制服の着こなし、そして眼鏡のそこから光る鋭い眼光。錐吾先輩……いつ屋上に？いやそれより悠夜会長を殺すって。

隣に座るチャライ先輩—水橋先輩を伺えば苦い顔をしている。錐吾先輩は僕らの目の先にいた。フェンスごしから校庭を見下ろしていた。

「屋上で何を狙っているのかと思えば悠夜会長がちょうど走っていますね……。殺ろうとしたんですか？」

「俺はそこまで射程距離遠くないから無理だよ。それに管理生と話したくていただけだし。会長が外にいることさえ知らなかったよ。」

「ああ。気付けば1年管理生の雅也君いたんですか。気付きましたでしたよ。」

僕を見下ろすその目は眼中外ってことですか。僕ってヒュゝ嫌われてるゝ！！

あれ……何か忘れてる気が……あっ！

「ちょっと待ってください。なんで悠夜会長を殺そうとする必要が？自由と何の関係があるって言うんですか。」

「いいか？1年管理生。そんな卒中殺そうとしてねーよ。俺はある重大な場所を任されているんだ。その場を守るためならば命さえ賭けてる。けどどなああの会長が興味持ちまった。あの場所に幾度となく現れるもんだから殺そうとしてるんだよ。」

「そんなところが？」

「お前は興味持つなよ。俺は生憎とまだ殺したくないからな。」

まだ……？

「水橋君、そんなこと言う方が興味持ってしまいますよ？雅也君はイロイロと探るのが好きそうなので。」

意味深発言ですね。僕のキャラに新たなカテゴリ増やさないでもらえます？

「錐吾先輩が実は悠夜会長が好きだなんて驚きましたけどね？やっぱりツンデレだったんだ。」

「……3歩前に出なさい。餌食にしてあげますよ。」

「いえ。僕は今座ることしか出来ないので遠慮します。」

「……そうですか。残念です。」

錐吾先輩はそういうも得に悲しそうな顔をしていない。

「水橋君もそろそろ悠夜会長に鍵を渡したらどうです？」

「絶対しない！分かってんのか！？あれは理事会の奴らが直々に渡してくれたんだぞ。なのに任務を放り込むことはしない！例えそれが全生徒を味方に付けた悠夜会長だとしても。」

錐吾先輩を睨みつける水橋先輩に錐吾先輩も同じように睨み付けていた。

僕は静かにこの会話を聞き漏らすことがないようにする。

「……その場合貴方の命はありませんよ？水橋君。」

「だから命賭けてるって言うてるだろ。理事会のじいちゃん達にばらすことはいつだって出来る。その場合こそ、あんたらが守ってる神の命こそ無くなるぞ。」

「殺せる者がいたとしたら……ですけどね？」

「はっ！大きく出たな。狂ってる殺戮生徒は皆悠夜会長の護衛か。」
「僕からしたら貴方の方が狂ってますよ。あの神を前に何故……折れない？屈するべきですよ。」

「俺はそんな物信じないんだよ。守るべき物が違う。だから折れない。」

「なるほど……少数派の意味を持たない発言はここまでにして置きましょう。」

そう言った錐吾先輩は踵を返し背中を僕らに向けた。

「俺を……殺そうとしないのか？」

「貴方は雅也君を巻き込まずに戦える自信があるんですか？戦意喪失ですよ。異名を持つ僕らからすればこの場は目につく。違いますか？」

「……確かにな。異名を持つ者通し、下手なことは出来ない。というより俺はいつの間に異名がついてたんだろ？たいした能力ないと思うけど。」

「異名を持つ者はそれ相当の実力があるものだけです。だから僕はここでは引きますよ。」

錐吾先輩が去る間際に強い風が吹いた。

巻き込まれなくて良かった！

「そういえば異名ってなんですか？さっきから言っていましたけど。」

「そうだな……自分の本名以外にもつ殺戮名だよ。アナザーネーム別名ってことだ。裏の世界で仕事してきたやつに付けられるんだ。誰が付けたかは知らんがいつのまにかそれが異名になってる。異名で相手の情報を得ることも出来るんだよ。」

僕もいつかつくのかな。そのときはかっこいいのがいいな！

「さあて1年管理生。俺もそろそろ帰らせてもらうよ。もう眠いて。」

「授業にですか？」

「いや……寮にだ。にしてもお前は運が良いぞ。この俺に会えたんだからな！1年が俺に会うことなんてそうそう出来ないんだぞ。俺は通常は寮にいるし、夜になれば夜間授業にも出ないしな。会えるときと言ったら俺が番犬の時だけだ。」

ケロベロス水橋先輩は笑いながら僕の髪をグシャグシャとなでた。僕のヘアースタイルが！？あなたみたいにボサボサじゃないのに。……という心の叫びはもとより、頭を撫でられてるのに照れを感じて手を払った。

「なんで出ないんですか？授業も出ずに何もせずに何をやってるんですか。」

「何もしてないわけじゃねーさ。ただ俺は守ってるだけだよ。この学園をな。だから免除されてるんだよ。そう考えたら管理生よりも

得してるな。」

確かに得してますよ！だったら今日も来なければ良かったのに。

水橋先輩は立ち上がり背伸びをし、空へと腕をのばした。帰る気満々だな。

「それじゃあ管理生。またあったらよろしくな！まっその時はお前のこと殺すことになるかもしれないけど。」

「地味に怖いこと言ってますね。その時もこうして楽しく話せたらいいのに。」

「お前が悠夜会長の狂気に犯されてなかったらな楽しく話せるぞ。」
「……そうですか。」

その後、水橋先輩を送り僕は空を一人仰ぐ。もう授業も終わりの頃だろう。このまま僕の人生も終わってしまえばいいのに………なんてバカバカしい。

にしてもまた男と出会ってしまった。生徒会でも女子1人しかいなかったし。なぜ僕の周りには女子が少ないんだ！？

第12章 前編 ああ……迷い込んでしまった

それはある一言から始まった事件だった。

「ええっ！ 錐吾先輩って兄弟いたんですか!？」

「そうだけど……知らなかったのかい？」

「僕はずっと一人っこだとばかり……。」

「俺もだよ。雅也く。」

放課後の管理室で文化祭の報告書を海斗と一緒に悠夜会長に出そう
と思いここに来たのだが、思わぬ話に変わりつつある。

錐吾先輩に兄弟いたのか。同じように性格きついのかな……。

「兄弟って妹ですか？ 兄ですか？」

「お兄さんだよ。僕と同じBクラスなんだけど会ったことないの？
いや見たことないの？」

「はい……。」

「似てないから分らないかな。」

やれやれといった苦笑いをする悠夜会長。先輩方と授業受けてませ
んから。

「悠夜会長……特徴を言ってもらっていいですか？」

「身長は155？ あるかどうかかな……。とりあえず身長が低いん
だ。そして高校生とは思えないほどの童顔。見た時は小学生に見え
たよ。」

それってー

僕が思うより先に海斗が拳を振り上げ茶髪を揺らした。

「シヨタじゃないですか！？まだこの学園も捨てたもんじゃない！いいね、雅也。今すぐ会いにいきましょうよ！」

「……それ本気で言ってるのか？」

「本気も本気だよ。それに気にならないか？錐吾先輩の兄だぞ！それはツンデレを極めているに違いない！」

「どうやったらそんな発想に繋がるんだ！？」

「ちなみに言っておくと錐吾君とは似てないからね。まだ教室にいるかもしれないから行って見たら？」

「ありがとうございます！悠夜会長。ほらっ行くぞ雅也！」

「マジかよ……。」

海斗に手を引かれるので僕は立ち上がった。悠夜会長が気がかりのような顔をした。

「雅也君。武器はちゃんと持っているかい？」

「はい。持ってますけど。」

ベルトに引っ掛けてあるナイフを手で確認する。

うん。ちゃんとある。

「雅也君。お兄さんはとても特殊な方で気分を損なわせてはいけないよ。彼が本気を出したら僕でさえ腕一本取られてもおかしくないんだ……。」

「えっ？」

「いってらっしゃい。」

優しい笑顔を彼は僕に向け、なんともないように手を振ってくれた。

そんなこれから死ぬ人を送るような動作をしないでください!!

「頼もう!!」

「……どれだけ古い入り方だよ。」

というわけで3年B組の教室に来ちゃいました☆

……ありえねえ。海斗の堂々とした包み隠さぬ扉からの大声と侵入に誰もがア然としている。

悠夜会長……僕死んでもおかしくないです。何故か海斗は錐吾先輩の兄に会える喜び＞先輩方の恐怖……という命知らずな馬鹿図式が完成してます。

「ここに錐吾先輩のお兄さんいますか?」

クラスにいる10数名の生徒達。それも女子ばかり!?

「伯爵く御呼びですよ? 1年管理生です!」

「ウサギさん! 早く起きないと懐中時計を盗んじゃいますよ。」

「可愛い! そういう顔しないでください!」

ある机を境に女子が大勢集まっている。10数名の女子生徒を占領してるのはお兄さんかな？羨ましいぞ。いやでも伯爵？ウサギ？僕が呼んでるのは違う人で。

「あのっ。僕らは錐吾先輩のお兄さんに用があるんですけど？」

「うん！僕に用件があるんだね！どうしたの？」

僕の前にいきなり現れた少年。身長は低く高い声は小学生みたいだ。錐吾先輩と同じ黒髪は前髪を青いヘアピンで止めている。でも紅い大きな目は僕の大好きな物を思い出させる。そこまでは理解出来る。そこまでは。

僕と海斗は緊急会議に入る。いわゆる教室の隅っこでヒソヒソ話。

「海斗君だったら理解できるかな。あの服装ってどう見ても制服じゃないよね？」

再度チラッと振り返り確認する。灰色のブレザーはどこにいった！？長袖のワイシャツに黒いベスト。赤チェックのショートパンツ。ネクタイも赤チェックだ。長い靴下を履いて……うん。コスプレ？

「可愛い……。」

海斗が漏らした一言に女子生徒の視線が突き刺さる。

「うん。褒めてくれてありがとね！」

邪心のない清らかな笑顔。悠夜会長とは違う裏のない笑顔はとても癒される！とかそんな場合じゅない！

「海斗。どうなんだ？」

「ゲームとかではああいふ服装は可愛い子に着せるんだけどね！全然OK！時代は中世かな？日本人の想像する可愛い貴族とか着てそうだね。うーん！なんて素晴らしいんだ！」

そういうこと聞いてるんじゃないんだよ……。でも許されてるからああいふ服装が出来るんだ。だったら別にいいじゃないか……。別に。そういうじゃないか！特に気にする必要なし。

「でっ！錐吾先輩のお兄さん。なんでそんな服装を？」

平気な顔で核心部分着いたな！海斗！

「ウサギさんだよ？僕は今、不思議の国からやってきたウサギさんなのです！だからウサギさんか伯爵って呼んでね！」

「可愛いです！伯爵！」

「私を不思議の国に連れてって！」

「ウサギさん！ウサ耳取れてますよ？」

ウサ耳だとお？

「あっ本当だ！ありがとう！」

カチューシャのようなウサギの耳。色は黒。ウサギさんの髪色に合わせたのかな？ウサ耳を装着したウサギさんは可愛いげにポーズをとる。

「可愛いです！ウサギさん！」

「えへへっ。照れちゃうな。」

その姿に喜ぶ女子生徒達。

なんで……あの人の周りには花と蝶々が飛んでるんだ？

「その歳で……まったく意味が分からないな……。」

僕の独り言に女子生徒が反応した。

「分かんないの？伯爵はね小さい頃からある一冊の本を読んでいたの。その本の未知なる世界に心奪われてしまったのよ。そして今、不思議の国を愛するばかり白ウサギに成り切ろうとしているのよ！」

「……………」

「……………」

「ぶっ……アハハ！！何それ！ありえない！」

「海斗？お前……。」

「そんなキャラ設定は始めだよ！高校3年でショタ。正に夢のようだよ！女々しいところが得にいいな。錐吾先輩の面影は髪だけだし。」

何に受けているんだ海斗！しかも3年生の目の前でっ！？

というより錐吾先輩のあの性格はこのホンワカナ兄を持つ故じゃないのか。

夢を追い続けるショタな兄と現実主義の弟。良い図式じゃないか。

「ねえ……それって僕のこと馬鹿にしてる？」

「はい？」

俯いている彼ーウサギさん？がボソツと呟いた。下を向いているた

め表情が読み取れない。周りの女子はなぜかざわめいている。いきなりウサギさんが顔を上げると口端を吊り上げさっきとは違う笑顔を……悠夜会長に近い笑顔を向けた。

「アリス2名ご案内しちゃっおうかな！」

アリス……？

「「イエス・マイロード御意」」

えっ……？

ウサギさんを愛する親衛隊（↑僕が名付けた）の手には縄が握られている。それはあつと言う間でした。

「はあ……。」

「雅也、これって一種のプレイかな？」

「この状況で……一度死んでこい。」

僕と海斗は縄に縛られてしまった。さすが3年生、慣れているのか手際が良すぎる。逃げる暇さえくれないなんて……下級生イジメかつ！？

「さあアリス。お仕置きの時間だよ。」

花が咲くようなその笑顔で黒髪の黒ウサギさんはとんでもないことを言いました。

ちっ……それでも可愛いから仕方がない。

第12章 後編 ウサギさん

アリスとは白ウサギを追いかけて不思議の国に迷い込んだ少女をさすことで……名前がアリスでもなければ少女でもない男子に対して言うものではないと思う。

「僕らをどうするつもりですか？ウサギさん。」

「不思議の国に連れてってあげるんだよ！でもねっ、一度行ったら帰れなくなる人もいるみたいなんだ。君らは帰ってきてね！」

「不思議の国？」

「そうっ。僕だけが作ることが出来るんだよ。」

高い声に低い身長。幼い顔だち。高校生3年生には血迷っても見えない。貴方自体が不思議ですよ。

にしても何をするんだ？お仕置き……とも言っていたし、不思議の国って。発想がファンシーすぎて通常語に解読出来ない。

「なあ……雅也。俺、ウサギさんがBクラス生徒だってこと忘れてたわ。あの笑顔にクラッときて現実離れしてたよ。」

「僕もだ。海斗。そうだよな。Bクラスだよ？普通の常識は持っていないとは言ってもここまでくると……な。」

「3年後の俺達の姿だよ？何かワクワクするよなっ。」

「未来より今を考えようか……。にしてもウサギさん怖いな。」

優しい笑顔だと思ったら裏がありそうだし……いきなり縛られるし。そういえば悠夜会長……ウサギさんのこと気分屋って言ってたな。

「俺はウサギさんが実はSであることに矢一本賭けるよ？」

「地味に要らないもの賭けるな！なんだよ……矢ってっうわ。」

ウサギさんが回していた懐中時計が勢いよく僕目掛けてきたのを避ける。

時計って振り回すもんだっけ!?

「君達、緊急感が足りないよ。こんな時は黙り込んで素性を探らせないようにしないとイケないんだぞっ!」

ビシッと人差し指を立てるウサギさん。黒い耳……いやウサ耳の方だよ。も直立している。

あの耳フワフワしてそうなんだよなあ……。

「なあ……雅也。」

「黙れ海斗。」

僕は今あの耳がとても気になっているんだ!

「……………」

パシッと手に懐中時計を取ったウサギさんは大きい目をさらに大きく開いた。紅いその目を。

「君の専用武器は小型ナイフでしょ。その切れ味見せてよっ。」

「えっ……。」

すんなりと僕のベルトからナイフを抜き出す。

よく隠し場所分かったな。後で縄切ろうと思っていたのに……。

「へー。なかなか鋭そうだねっ!」

ナイフをケースから出し、刃をいじり弄ぶウサギさんに少し嫌悪する。

だって……手に馴染むような仕草で僕の愛刀を扱うから。早く返してくれないかな。

下を向き溜息をはく。

「危ない雅也っ!？」

「なっ!!……えっ?」

海斗が僕に対しアタックしてきた。二人とも縄で縛られているため倒れこんでしまう。

何だよ……と言って起き上がり海斗を見ると首元の下辺りから制服が赤に染み付いていた。起き上がらない海斗。

「かい……と……?」

「何く雅也。」

「生きてる。」

「そりゃ露骨辺りを薄く一直線に切られたただだからね!生きてるよ。」

海斗が気怠そうに起きあがる。見れば本当に露骨辺りの制服が一直線に裂け、そこから赤黒く染まっていた。海斗が僕を庇ったから? えっ……ウサギさんが僕を切りつけようとして海斗がそれに気づいた。でも僕は気づかなかったから。こんな大切なときによそ見していたから……。

「ダメだよっ?出てきちゃったら。でもくそういう顔するならやつて損はないねっ。」

ウサギさんは先程と変わらない口調で声の高さで笑顔でナイフに染

み付いた血を払うように一降りさせた。
そういう顔？

「その不安と恐怖に染まった顔っ。そしてお菓子のような甘い血の色と臭い！僕は大好きなんだっ。」

とびっきりの笑顔が僕の思考を遮断する。

「伯爵く。顔に血が着いてますよ？とってあげます。」

「血に濡れる伯爵って素敵！」

「さすが『アリスのブラック・ラビット真赤な国への案内人』の異名を持つ伯爵です！」

なんでこれを普通だと感じているんだ？正しいのはウサギさんの方？

「雖吾先輩よりタチが悪い……。」

「雅也？」

悠夜会長に負けず劣らず痛め付けるのが好きそうだ。そして周りの女子も悠夜会長愛好者とさして変わらないじゃないか。この学園の病んでるはけ口になっているのは悠夜会長だけじゃない……。

「瀬羽君せはっ。不思議の国が一瞬見えたでしょ？」

不思議の国……。

何をいうんだと眉間にシワをよせる海斗。

「……………は？」

「今度はちゃんと連れてってあげるねっ？」

そういうと黒ウサギは、かしずき目線がちょうど海斗と同じ高さに

なる。そしてクスリつと口端を上げた。

「真赤な不思議の国へご案内っ。」

「「It's a Show Time!」」

周りの女子も口をそろえて笑顔を作り出した。

不思議の国。一瞬だけ見えた? ……切られた海斗。僕が気がかりな不思議の国ってもしかしてー

「避けろっ! 海斗!」

ウサギさんが大きくナイフを振り上げた瞬間、弓なりの音が聞こえた。

「えっ……。う。うっ。」

振り返ったウサギさんの腕をかすり、ナイフがカランッと落ちる。ウサギさんの白ブラウスの腕が赤く染まりウサギさんは苛立ったように眉を寄せた。

「誰? 僕不思議の国を作る時間を潰す人はっ。女王様以外そういうのは許されないんだぞっ。」

かすった物は矢。この矢を扱うのは僕の知る限り海斗と彼しかない。

「不思議の国を作る時間……。笑わせないでください。貴方がしているのは殺戮の時間でしょう? 赤く染めることで欲を満たす貴方は僕が関わりたくない人物ですよ。」

黒髪に黒ぶち眼鏡。これが正しい制服の着方代表を勝ち取る錐吾先輩が教室へと足を踏み入れていた。手には弓を持っている。

天からの救いだ！

「錐吾先輩、俺切られましたよお。」

「いつからそこに……。」

「貴方達が縛られた辺りですね。2人とも捕まるとはやはり実力がないんですね。また明日からきっちりしごくのでそのつもりで……。」

錐吾先輩もタチ悪いっ！最初から助けてくれよ。鋭い目がギランと睨みつけるからさらに怖い。

「なんだ。錐吾じゃないか？僕を傷つけるだなんて意味分かってるのかな？！それって僕に殺されたいってことでしょう？？弟を殺すのは惜しいな。」

「僕は貴方と同じ血が流れているだけでも嫌なんですよ。兄として自覚がない行動も嫌っています。制服を着て来ないのもウサギの耳付けているのも放課後、用もないのに残っていることもその歳で可愛いところも悠夜会長に一目置かれているところも嫌っています。そして何より後輩に手を出されて黙っていられないだけです。」

最後らへんに私情挟んでないか？まあ嬉しいんだけどさ。

「よって貴方を兄と思ったことはありません。殺されたい？良いですよ。僕だって手加減しません。今までの恨みを返して差し上げますよ。」

「ふーん。1年前とは違い自信ありげだね。守るものが出来たの

っ?」

守るもの? 錐吾先輩の顔を伺えぶくだらない、といったげなやつかい
いそんな顔をした。

「そんなもの必要ないですよ。」

「嘘っぱいなあ。でもねっでもねっ、今回は退いてあげるよ? だって……帽子屋さんが来たからねっ!」

ウサギさんは目を細め、錐吾先輩を見据えた先より後ろを見た。
帽子屋さん? 誰のことだろう。

教室へと無駄のない歩きで入ってきたのは太陽のような金髪に蒼い瞳には笑顔を宿した悠夜会長の姿があった。

「えっ………?」

周りにいた女子生徒達が悠夜会長の姿を確認したのと同時にバタバタと彼女達は倒れだしたではないかっ!
なっ……何をしたんですか!? 悠夜会長!

「今度は帽子屋さんか……。いつになったら僕をちゃんとした名前で呼んでくれるのかな……。」

「帽子屋さん! 僕のアリス達に何したのっ?」

「眠らせただけだよ。心配しなくても魔法がとければ起きるから。」

「僕はウサギなんだよっ。追いかけてくれないアリスには興味ないんだっ。」

「そうやってまた捨てるんだね……。」

「僕のをいつも奪ってるくせにっ! よくそんなこと言えるな。」

二人とも笑顔でありながら漂う空気は冷たい。まるで錐吾先輩と悠夜会長の探り合いにレベルアップしたような感じた。

その間にも錐吾先輩が落ちたナイフを拾い、僕らの縄を切ってくれた。

「ありがとうございます。」

「先輩。すみません。」

「しっ。静かにしてください。」

久々の解放感。30分にも満たないはずなのに長い間縛られていた気がした。

「海斗……貴方は生徒会室へ来なさい。その姿を人目に触れさせるわけにはいきません。1年管理生、貴方は悠夜会長の補佐に周まわってくれますか？このまま何もないといいんですが……兄は血を見ると興奮してしまうので悠夜会長に手を加えてしまうかもしれないので。」

「分かりました。錐吾先輩。海斗をお願いします。」

錐吾先輩からナイフを渡され手に馴染む感覚にホッとする。

海斗は苦い顔で立ち上がると錐吾先輩に支えられる形でこの教室から退出した。

「あつれ。錐吾と瀬羽君行っちゃったの？」

「賢明な判断をしたまだよ。ウサギさん、僕は管理生徒として君を罰する。昼間の武器使用。1年生の拉致。そして生徒にたいし殺戮行為に陥ったこと。そこまで君は落ちたのかい？周りにいるアリス達じゃあもう不満？」

「血に染まることを許してくれるアリス達でも死にたくはないみたいでさっ。いっつもオワズケなんだよっ。僕耐えられないよ。」

「そう……。本当に残忍なんだねウサギさん。犠牲者アリスをこれ以上増やすのは生徒を守る管理生としては許せないよ？自分たちから犠牲アリスとなる女子生徒ならともかく雅也君達は望んでアリスになろうとしていないようだし……。なによりも僕は怒っているんだよ？僕が力を入れて育てている芽を摘むようなことしないでくれる？」

僕を一度見てウサギさんへと視線を戻す悠夜会長。笑顔ながら目は笑ってなどいなかった。
怖い……。さらに凍えそうだ。

「少しは謹んでもらえるかな？ウサギさん。これは友達として言っているんだよ？」

「帽子屋さん……。友達になってくれるのっ？」

冷たい空気が一瞬にして、暖かくなった気がした。友達の言葉に重要素が含まれている気がしてならない。

何が起きた！さっきまでの不思議の国を作り出そうとした腹黒ウサギはどこにいった！？

「うん。だから今後いっさい関係のない生徒には手を出さないでね？」

「分かった！帽子屋さんって認めて……。認めてくれるんだねっ。」

「えっ……。まあそういうことかな。」

「ありがとう！帽子屋さんっ！」

太陽よりも輝かしい笑顔でウサギさんは悠夜会長に抱きつきそうな勢いで駆け寄った。

さっきまでナイフ片手に怖いこと言っていた黒ウサギには見えない……。悠夜会長、あなたって女子だけに限らず小さい男の子にも手出しているんですか？

「雅也君。僕がそんな人間に見える？」

えっ！？僕の心の小言に返事返しちゃったよ！？この人！

「いえ……見えませんよ。」

「そうだよね。」

「あのっ帽子屋さん。それじゃ……それじゃあ、これもらってくれる？」

後ろ手から何かゴソゴソと出そうとしているウサギさん。

もしかして武器を出すんじゃないっ！危ない悠夜会長っ！

「帽子屋さんの帽子っ！」

チャラララッタラッン！！っていこう効果音が似合いそうなほんわかなテンポで一つの帽子を出したウサギさん。これには悠夜会長も瞬きが出来ないようだし、僕もずっこけてしまった。待てっ僕の見せ所がなくなっただぞ！

「これねっこれねっ！オーダーメイドなんだよっ？帽子屋さんに似合う物と思って特注したのっ。作ったは良かったんだけど……帽子屋さんは僕のこと友達とは思ってなくてなかったみたいだし封印してたんだけど。良かった！嬉しいよっ。」

「そっか……僕も嬉しいよ。ありがとう。」

白いシルクハットに黒いリボンと花がアクセントになっている。あれこそ伯爵が身につけてそうな物だぞっ。

とりあえず笑顔で受け取る悠夜会長はすぐさま被るというようなことはしなかった。

「……………」

「……………」

「……被ってこないのっ？」

背中に哀愁漂うオーラをだし、今にも泣きそうな顔をしているウサギさん。なんだっなんて可愛いんだ!?

悠夜会長に僕は無言で被った方がいいんじゃないですか?というよ
うな視線を密かに送る。きっと似合うんだろう。かっこいい人には
何を着ても似合わないことがない。

「……僕より雅也君の方が似合うよ?」

またこの人。僕の小言を!なんですか?超能力っ。それならさっき
女子生徒が倒れ込んだのも話がつくよっ。なんで僕今まで気づけな
かったんだ!?

「本当だっ。うゝん。じゃあ今日から君が帽子屋さんね。」

「ほらっ銀髪には白い帽子がよく似合うんだね。素敵だよ。」

「帽子屋さんっ!さっそく僕とお茶会で紅茶でも飲もうか。」

えええっ!?僕はいつのまにか悠夜会長に被せられたシルクハット
に啞然とする。

ウサギさんに可愛い笑顔で手を引かれ、僕はお茶会に招待されるこ
ととなってしまった。

「えっ……ちよっと?」

「ほらほらっ早く。」

「安心していいよ。雅也君。彼は今、白ウサギだから。約束もある
し……。」

「そうだよっ。友達を傷つけない！」

いやいや……分かりませんよ。てか僕殺されますって。

「じゃあね。雅也君？」

またそんな笑顔でこれから死に行くような人を送り出すような手の振り方をしないでください！！

第12章 後編 ウサギさん（後書き）

きつとこの後に雅也は白うさぎの気分を損なわせて悠夜会長に助けを求めに行くんだろうな……。

第13章 前編 夜間ミッション

明るい月はさして何もしてくれない。校庭を照らすには明かりが足りなすぎる。

校庭の一角で僕は道化師と向かい合っていた。それはいつもの夜間授業前の指導なんだけれども……。

「今日は1、2年生数名には南校庭の竹やぶ地帯に行ってもらおう。雅也、お前が連れて行く者を選ぶが良い。錐吾にはもう報告はしておいた。貴様は錐吾を補佐しろ。いいな？」

「分かりました。授業内容はどのようなものですか？」

「簡単なことだ。実験動物を黙らせに行つてほしい。」

「実験動物……？」

「錐吾にでも聞いておけ。早く校庭に向かうが良い。」

「分かりました。」

夜の授業の一貫で課外が出されることがある。それは選ばれた物しか行くことが出来ないわけで、僕は生徒管理生という権力を盾に選ばれる。

さて誰を連れて行こうか。

「雅也ー……俺もう疲れたよう。」

「海斗……そうだよ。君には無謀だったよね。どうせ体力もないやつは今後連れ行かな……。」

「嘘っ嘘だよ！あゝ今日もがんばるぞ！」

「始めっからそうしてれば良かったのに……。」

やれやれと言った表情で僕はため息をついた。海斗の言ったとおり遠いからだ。

いつも僕らが練習しているのは北校庭。北校庭にはBクラス寮が近い。南校庭は僕らの練習場から逆の位置なので向かうだけでも一苦労だ。この学園、本当に特定の人間に対して重労働させ過ぎだと僕は考える。

まったく……特別扱いはいいいことだけにしてほしい。だけど海斗がそこまで愚痴を言わないのは僕と海斗の先頭を歩く2人の先輩方のおかげだ。

「まったく……これくらいで疲れたと言っては外での任務も遂行できませんよ。」

「錐吾ってめえ！なんで俺を選んだ！勝手に行けばいいだろ。」

「いつも夜の授業で暇してる市川君のためですよ。課外に行きたいと願う輩はたくさんいるのにこうして貴方を選んであげたんですよ。感謝される覚えはあっても怒られる覚えはありません。」

「ふざけんなっ。しょうがねえさっさとやって帰るぞ！」

黒髪に黒ブチ眼鏡で鋭い視線が得意な錐吾先輩と、長髪を武士のように一つ縛りにしぎらつとした睨み付けが得意な市川先輩。いやゝこうして見ると蛇が2匹もいる感覚になるなあ！いや片方はマングース？とりあえずここにいる僕と海斗を合わせて4人は今日の授業ミッションの犠牲者だったりする。

……そういえば市川先輩ってあの文化祭実行委員の選出の試験に居なかった気がするんだけどなあ。そう思うと僕は知りたくなっ

まう。実際、溜めるとかいやなんだよな。

「市川先輩、試験の時にいました？」

「ああっ！？何の試験だよ。」

びびるな……僕！眉間にしわ寄せる先輩に立ち向かってこそ管理生だ！

びびった顔をしないよう最大限の表情筋を使い、はにかんだ。

「体育館で行われていた試験です。」

「出てないな。めんどいんだよ……。ああいうのはやる気のある下っ端にやらせときゃいいだろ。」

「ちゃんと参加してください、と言ったでしょう。」

錐吾先輩が眉間にしわを寄せた。おおっ、怒ってる？

「いいだろうが。おれだけじゃねーし。どうせ来てない奴いただろ。そいつら先に怒れよ。」

「はあ、ただでさえ人数が少ないというのに……。まったく役立たずですね。」

「なんか言ったか！嫌に耳に入ってきたんだけどよお！」

「何も言ってません。空耳でしょう？老人化ですね。良かったら良い病院教えますよ？」

「俺がそんなことあるかっ！」

錐吾先輩のケンカ口調はいつものことなんだろうなあ。激しくなってるよ。もはや乾いた笑いをするしかない。

それにしてもで、出てないんだ。でもそう言われてみればあからさまに錐吾先輩を抜かした29名の2年殺戮生徒。29名も居なかったような……。

隣で並ぶように歩いていた海斗はそういえば、と言葉を漏らした。

「あの時、あからさまに少なくなかった!？」

「海斗も思った? そうだね。もしかして強い先輩方は出ないのかもね。」

「錐吾先輩も出てなかったしな。その可能性、ありえる!」

「ケロベロス番犬もいなかったしね……。」

「ケロベロス?」

「いや、こっちのことだよ。」

何にもなかったように僕は空を、というより夜空を眺めた。

そうだった。海斗は知らないんだ。屋上で出会ったえっ……と水橋先輩、改め『ケロベロス番犬』。やっぱり殺戮名の方が覚えやすい。印象的な紫色の髪をしている彼は参加していなかった。また話が出来たらいいなとちよろっと思ってたりする僕がいるから是非会いたかったのに……。

何かに気づいたように海斗があっ!と声をあげた。

「どうしたの?」

「そういえば雅也! 中間テストで2番だったんだって。」

「なっなんでそれを!？」

「俺は雅也の親友なんだぞ! いや、管理生がそんなのでいいのかな?」

親友とか関係ないけど今日、校門前に張り出されてたんだよね。まあボケてみた僕に対してのツッコミはなかったと言うことで。

実は一週間前にテストが行われていたのです! そして今日がテスト結果日だったのだが海斗こいつが言ったとおり僕は1位にはなれなかった。

そうだよ！2位だったよ！本当は1位取りたかったのに……。
ニコニコしながら僕の反応を楽しむ海斗に僕はうっとおしそうに
らんだ。

「そんな顔すんなって！1位はA組の女の子だよな！確か……やな、
やなぎ？」

「青柳^{やなぎ} ユウ、だよ。A組の子に負けるだなんて不覚だ。」

「そんなこと言うなって！俺なんて90番だよ？すごくね！？」

「……ある意味すごいよ。」

「褒めんなよ！にしても雅也が褒めるとか久々じゃない！？俺頑張
ったわ。」

「ああ……よく頑張ったよ。」

誰かこいつを再構成してくれ！止めてくれ。息の根を！90番って
最下位から何番目だっけ！？一番目だよ！

だめだ。落ち着け僕！一人で脳内ボケとツツコミをやる奴ほど痛い
人間は居ないぞ！まあ……それより気がかりなことを錐吾先輩に聞
いてしまおう。道化師が言っていた南校庭の『実験動物』とは何な
のだろう？まさか実験した動物を放置してます……とかそんなノリ
じゃないよね。それに南校庭に竹やぶ地帯なんてあったのか！？な
んか一般ではあり得なような物まであるんだよね、この学園。広
すぎて周り切れていないのが現状。川とかもありそうな気がする。

「錐吾先輩……この学園に川ってありますか？」

「……………はい？」

その反応だとなさそうだな。さすがに川あったら海につないじゃう
もんね！心で気軽に考えつつ、僕は冷然と話題を変えようと試みる。

「いえ、間違えました。実験動物ってなんなんですか？」

「実験動物に詳しいの彼の方ですよ。科学班担当の市川君？」

「めんどいんだよ！お前が説明しとけばいいだろ。」

今にも始まりそうなケンカだったが錐吾先輩がため息をつくことに
より休戦となった。さすが先輩！いやいつもケンカを売っているの
は……。

「……実験動物とは、この学園が秘密裏に行っていることの一つで
す。この学園の裏での名目は『優れた殺人鬼』を作ること。それは
生徒だけではないのです。」

「動物も、ってことですか？」

「雅也君は話が早くて助かります。その通り、動物も対象にされて
います。今そこで作られた実験動物は時々、施設から解放され近く
の森林に住み着くようになる。困ったことに、住み着くのはいいん
ですが暴れる危険性があると判定された動物は施設に戻らされるの
です。」

淡々とした口調で説明する錐吾先輩。そうだったのか。この学園つ
て他にもそんなことしてたのか。確か僕らが向かっている竹やぶ地
帯って森の一部に過ぎないもんなあ。その広さって……どんだけす
ごいんだ……この学園！

「そして今回のターゲットは実験NO.^{エス}367。Sが付いている
のはどんな動物でしたっけ？市川君。」

「……確か殺人鬼としてはもっとも高い能力を持ってるな。Sとい
えば最終段階だしよお。噂によれば会長と一度手合わせして妥当に
渡り合った動物じゃねえのか？」

「そういえばそうですね……。覚悟しときましょう。」

平然と世間話をするように頷きあう市川先輩と錐吾先輩。

最終段階……悠夜会長と渡り合うだ！？それって死に行くようなものだ！というよりやばいだろ！学園で2番目に強いといってもおかしくないんじゃない……。ただの実験動物じゃない。この学園ちゃんと生徒の安全を考慮してんのかよっ！？もうだめだっ。死ぬよっ死ぬよね！？悠夜会長の恐ろしさは身に染みてる。闘う瞬間とかは見たくないけど、なんて言うかオーラで分かるって言うのかな。とりあえずやばいって！今まで僕らが手こずってきた2，3年生のトップに立ってるんだよ。終わった……それに妥当する実験動物の黙らせるって……。

あれ、黙らせるって？

「錐吾先輩、その実験動物を黙らせるのはどうやるんですか？」

「……闘うんですよ。」

知ってますから。そんな当たり前の答えも分からないんですか……という見下げた目で見ないでください。

「黙らせるの意味を聞いてるんですけど。」

「そう言う意味ですか。気絶させましょう。悪くて5体満足にはいかない姿にさせることでしょうか。」

決死の覚悟が必要そうだな。僕はそうですか、と視線をそらした。

そう、目の前には暗い闇、そこに彩られてるのは深緑の大自然！すがすがしい夜の空気に竹やぶが目映る。

そして今にも襲いかかってきそうな赤い目が僕らを見つめていた。

えっ！？赤い目！？

第13章 前編 夜間ミッション (後書き)

感想等書いてくださると嬉しいです！
気軽に書いてください！

第13章 後編 パンダのユキちゃん

えっと……真っ暗闇の、一面闇の、見渡す限りが暗闇の世界でたった一つの光が見えるだろうか。懐中電灯で照らしたわけでもなく、それは僕が知る限りの中でたった一つ当てはまるとしたら鋭い目つきに見えた。ほら、ゲームとかでボスキャラが出る瞬間に流れる映像とかあるだろ。そんな感じのやつ。

「ケッ、早速かよ。」

「市川君はどこから狙います？」

「俺は最低限なんもしねえ。1年に任せる。」

「そうですか。それもいいかもしれませんねえ。」

後ろで放任主義を全うする会話が聞こえたような気がしたんですけど。

僕はおそろおそろ2人に対し振り向いた。

「そんな恐れた顔しないでください。僕たちは別の場所から狙います。2人は正面から狙ってください。」

錐吾先輩の冷静な声音から拒否することはゆるされない威圧感のしかかる。そうなります！？もしかして逃げる気じゃないですか！

「わっ分かりました。」

「やったな！雅也！これで勢いよく殺せる！」

「そうだね……。」

殺せるって……捕らえることが目的なんだけど！

「それでは1年管理生、海斗。ご武運を祈ります。」
「せいぜい死なねーようにな。」

錐吾先輩と市川先輩は僕が振り返るよりも先に消えてしまった。
えっ瞬間移動！？……って木の上を移動してる。

「身体能力がはんばないよね……。」

「俺らも月日が過ぎればああいう風になるって！」

「あっ、そう。」

「冷たいなく。っでどうする？雅也。」

海斗がウキウキしているのか楽しそうに笑った。

さあて、とりあえずどうやって捕らえようか。僕はナイフを取り出し戦闘態勢を整える。でも姿も確認できてないしここでいきなり攻めるのも気が引けるな。

「海斗……試しに打ってみてよ？」

「えっ？ここは普通、雅也が囧で行くんじゃないの？」

「矢であっちの動物を確認したいんだ。さあ打て。」

「めっ命令形ですか！？でもどこにいるか分かんないし。」

「あの赤い目が見えないの？軽く狙えばいいだろ。」

「いや矢の無駄うちは避けたいんだけど……。」

海斗の腕ならきつと外すことがないという信頼があるから言ってるのに。殺戮試験での海斗の腕前は恐ろしいほどだった。相手の先を読む状況判断力、観察力。どれをとっても不足はない。

僕の無言の拒絶にたいし、しょうがないなーと海斗は弓を構え竹やぶへと矢を引いた。赤い目へと放たれただろう矢は一直線に素早く進んだが、当たったような音がしなかった。

「あれ海斗。反応ないんだけど……。」

「だから無駄うちだって！あーもう行ってきてよ！雅也。」

「きつと避けたんだね。実験動物の身体能力は偉大だね。」

「そうやって行かないそぶり見せないで！大丈夫。俺が後ろで狙ってるから。」

弓に矢をセットし海斗は僕へ行くようにと目を細めた。そんなに行つてほしいのか！？

「分かったよ。間違っても僕は狙うなよ。」

「分かってるって！いつてらっしゃーい！ちゃんと俺の射程距離に来させるんだよ！」

無駄に明るいテンションに見送られながら僕は竹やぶ地帯へと足を踏み入れた。けっきょく団体で動いていても個人で捕らえることになるのか。

目の前の竹がガサガサ揺れる音がして僕はナイフを構え直した。そして赤い目が伺えた瞬間、僕の緊張は最高潮へと達する。大丈夫……後ろには海斗がいる。僕が何とかして誘いだそう。

「僕の望む色へと染まってくれ。実験動物！」

先手必勝。僕は相手に一気に近づいてナイフを突き出した。だけど鋭い爪が僕のナイフを器用に受け止めていた。

なんて素早い動きだ。僕は目を見開いた。

「ぱっ……パンダ！？」

僕のナイフを受け止めていた逆の腕で僕へと爪を突き出すその姿は愛玩動物とは思えないほどの凶暴性を兼ねそろえている。

「ぐっ！げほげほっ。」

吹き飛ばされ腰を打った。なんとか爪からの攻撃は避けられたようだ。僕は腕や膝のホコリを払い、立ちながらパンダをまじまじと見た。パンダって立てるんだ。2本の太い足が大きな身体を支えている。赤く鋭い目、もさもさの毛は黒と白に別れている。口からは凶暴な鋭い歯。噛まれたら生命の危険を感じられる。そして爪は軽く30センチはあるんじゃないかと思えるぐらい鋭かった。まるで僕の小型ナイフをそのまま両手に5本ずつ持っているようだ。

「実験動物……本来の可愛さはどこに行った。」

殺戮専門のために作られたらそんなの関係ないか。パンダは鋭い爪を僕へと振り下ろした。

さっきまで間合いをとっていたはずなのにー！？僕は腰を低くして避けとっさにナイフを突きつける。だがパンダはジャンプして回し蹴りをした。これは避けきれない。

「ぐはっ！あー痛いっ。」

パンダが動く前に僕は何とか態勢を整える。もうせっかく支給された戦闘服がぼろぼろだ。黒の学ランがすり減っている。この学ランはボタンじゃなくてチャック式だから動きやすく、着やすくて良い物なんだけど……どっちかっていうと、昼間のブレザーの方が僕は好きだ。

「ってそんなのどうでもいいことか。」

僕はパンダの動きを観察し避けることに専念する。時にはナイフで

受け止めるも、すぐに跳ね返す。そうしないと別の手で僕を襲うから。

キューンー

聞き覚えのある弓なりの音に僕はパンダから離れた。グサツとパンダの背に当たったのが見える。

さすが海斗……。ちゃんとやることやってるんだね。

パンダの静寂に僕はナイフをその右腕へと突きつける。避けることに遅れたパンダに深い傷が付いた。これで右腕が使えなくなった。けどそこからが恐怖の始まり。

ギュー！！

怒ったのか大きな声を出しさらに暴れ出した。なぎ倒される竹たち。僕も避けようと逃げるがやはり標的は僕のように追ってきた。しかも竹を持ちながら。

「竹って武器になるんだねー。」

知らなかったよ。さてこの暴れる動物にたいし僕はどうするべきか。そういえばこの先はー

「俺の矢に撃ち殺されな。実験動物のパンダちゃん！」

茶色の髪を風になびかせ細めた藍色の目はいつもとは違う雰囲気がかもし出している。スイッチが入った海斗は僕が思うに馬鹿じゃない。

キューンーグサツ

パンダへ矢が打ち込まれ、後ろでドサツと音がした。僕は足を止め息をほっと吐いた。終わった。

「おつかれー！雅也。」

「海斗……良いところどりだな。」

もう疲れて足を支えることが出来ない。海斗はニカッと笑い僕に手を差し出した。

「雅也が動いてくれたからじゃん！それにこれはいつものこと、だろー！！」

「僕が引きつけて、海斗がとどめをさす。そうだね……いつものことだ。」

でもそれはいつも僕に命の危険性があるわけで、僕はこの状況に満足している。海斗に危険性がなければいいんだ。

「あっそういえばさっき錐吾先輩が『終わったら呼びに来てください』だって！」

「ってことは帰ったんだね。やっぱりあの2人のことだからね。」

「いいじゃん！俺らだけで倒したんだよ！？気分いいじゃん！」

実はあの2人が僕らの成長のために退いてくれたのかも……とか思ったのはなかったことにする。だってあの2人は面倒くさがりだから。

「さあて帰るか。海斗。」

「そうだね！今日は矢の無駄うち避けたぞー！」

僕と海斗はどこか安心しきったように空を見た。夜の月は僕らを照らすことなく雲に隠されていた。

道化師が言っていた。今日のミッションがユキちゃんの処分だと。僕が夜間授業に参加できないからってふざけないでほしい。彼女は僕には従順な良い子だ。学園側の行動について僕は身構えなくてはいけね。

「ユキちゃん。生きてる？」

竹やぶの入り口前にはパンダが弱ったようにうつぶせに倒れていた。ああ、こんなにも芝居がうまくなって。

「あの子達は強かったかい？少しは成長してくれると良いんだけど。」

彼女に話しかければムクツと起き上がり肌をすり寄せてきた。ふかふかで気持ちが良い。僕はぽんぽんと頭を撫でてあげた。一度闘ったことがキツカケでこんなにもなつくとは思わなかった。彼女に刺さっている矢を抜き取るとみるみるうちに傷が消えていく。実験動

物の治癒能力は尋常じゃない。だけど……。

「……気絶してくれないかな。」

彼女の首に手刀をくりだし眠らせる。そして彼女の爪を1本へし折った。これが欲しかったんだよね。

「クロコ……ユキちゃんを研究所へ連れて行って。錐吾君たちが後で来ると思うけど適当に追い払っというてね。」

学園内裏組織の『クロコ』―それは死体処理から殺戮生徒の管理、一般生徒が夜間授業を気づかれぬように欺き動く者達。黒い服装に身を包み、この学園の裏を守り通す大人達の集まりだ。これを扱えるのは道化師、そしてこの学園を支配する僕だけ。さっと現れた一人のクロコは膝をつき、頭をたれた。

「悠夜様のお望みとあれば。」

僕はその返事を聞くより早く、この場から姿を消した。

第13章 後編 パンダのユキちゃん（後書き）

評価・感想とうございます！

第14章 前編 日中の活動

学園祭まで後数日ー。

教室の端っこで僕はある人物と向かい席に座っていた。

ある人物とはー茶髪に藍色の瞳、今はもう夏のためブレザーなしのワイシャツに灰色のズボン、いわゆるこの高校の夏の制服。裾を何回かまくり引き締まった腕を出しているのはその腕で弓を引く海斗だ。

僕はプリントを手を取った。

「このプリントとそっちのプリント、後その紙を持って行けば……。」

「やっと終わる!?!」

「ああ……。」

放課後の教室。部活動のかけ声や演奏が廊下をつたって聞こえてくる。実行委員として休み時間だけじゃ間に合わず放課後もこうして残ることにした。3日後の文化祭に向け最後の実行委員がやることは、しおり作成だけとなった。後はコレを悠夜会長に届けるだけ。

「後3日か!! あっという間だったね!!」

「何もしてないくせによく言うね……。」

「ひでー!ちゃんと手伝ったじゃん!」

「たえば?」

「えっ!?!……。」

「ないよね。」

「ほら!一緒に居てあげたじゃん!! 雅也を1人孤独にしない俺の優しさ!!」

僕はウサギか！なんか根本的に違う気がするけど。まっいつか。これで実行委員のやることはもうない。晴れて自由の身だ。海斗の言葉が無視し教室から見える部活動に目をやると体操着姿の男子が走り込みをしていた。

「あれ！？陸上部だ！陸上部って何やんのかな。」

海斗が外をのぞき込むように窓に食いつく。陸上部か。陸上部って……。

「確か……そばの出前をやるとか聞いたけど。」

「なっなんでそば屋！？」

「出前Ⅱ足の速さが一番な部活らしいよ。」

「たっ単純で明快な理由だね！俺も陸上部入りたかったな。」

実は海斗は中学時代に陸上部に所属していた。僕は外の散歩を愛する帰宅部だが海斗の部活動人生はさぞ有意義だったのだろう。

「入ればいいよ。夜間授業と両立できる自信があるならね。」

「っ冗談だよ。さあ行こう行こう！！悠夜会長のところだよな！ってことは生徒会室。」

話をそらすように海斗がハイテンションで廊下へ飛び出す。僕も追いかけてようと廊下へ出ようとしたが何かが気にかかった。

「って海斗、このプリントなしでどこに行くつもりなのかなあ。」

机の上にプリントが残っていることに気がついた僕はこのプリントを持ち、海斗に追いつこうと走り出した。

さて生徒会室前にたどり着いた。だけど僕と海斗は生徒会室の扉の前で一步足を進めることが出来ないでいた。

「なあ海斗。誰が最初に扉を開けるかジャンケンしようか。」

「えっちよっと！ここは生徒管理生として雅也が行くんじゃないの！？」

「じゃあ管理生ほくの権利で命令するよ。海斗が行け。」

「ええ！？職権乱用で命令形ですか！俺だって行きたくないのに……。」

生徒会室からは女性の奇声やガチャンと何かが壊れる音がしているのだ。生徒会室ってそういうことありえるのかな。とりあえず僕も海斗も危険を察知しているらしい。

「分かったよ！行けばいいんでしょ。今度俺が生徒管理生になったら見てろよ！！」

海斗の負け犬の遠吠えを聞いてる余裕は僕にない。海斗が扉をそろーりと開けているところを横目に僕は生徒管理室前から見える校庭をのぞいた。

生徒管理室では何が起きてるんだろう。副会長のハイテンションの意気が超越して壊れてしまったのかなあ。それとも女好きの二宮先輩がついに逆恨みされる時代が来たのかもしれない。いや市川先輩

が武器片手に暴れてる……つてのもあるな。

「あれ……海斗？」

誰もいない廊下。しかもさっきまでいた海斗が消えている。考えてるうちに海斗は消えてしまったようだ。もしかして逃げた？でも逃げたなら気配で分かるんだけどな。

僕は疑わしい目で扉を見つめた。もしかして一人で入った！？いやいやそこまで海斗に勇気があんなのかな。

ぎゃー！！

そしてまた新たな奇声が聞こえた。しかもその奇声は海斗の叫び声に似ている。

「いやいや、幻聴だね。それにプリントは海斗が……そうだ、僕が持ってたんだ。」

うーん。どうしようかな……。絶対に入っちゃだめだ！と身体が拒絶反応起こしているんだよな。悪い……海斗。お前の勇気ある行動は忘れない！

「あれ？雅也じゃん。どうしたんだ？生徒会室になんか用があるのか？」

僕の前に現れたのは短い金髪に紫がかった瞳。さわやか系の笑顔を引き連れる3年の先輩―二宮先輩が不思議そうにキョトンとしてい

た。僕は悠夜会長と唯一渡り合える人物ということで二宮先輩のことを重要視している。それにしてもいつもと違って女の先輩方がいない。

「僕は資料を届けに来たんですけど……。二宮先輩は何故ここに？」

そして何故いつもの彼女達が居ないのか。

僕の疑問を表情から読み取ったのか、二宮先輩はああ、と笑い僕の持つプリントを手にとった。

「あいつらは今、俺の寮室にいるよ。俺は姫ちゃんに至急、生徒会室くるように呼ばれたから来たんだけど……。」

「あのテンションが高い副会長ですか。」

「もしかして姫ちゃんが苦手か？雅也。」

「……別にそういうわけじゃないですけど海斗が2人いる感じがして。」

「なるほどね。だけどああいうのがいるからこそお前らは救われているんじゃないのか？」

「えっ？」

そしてまた海斗の声に似ている奇声が聞こえた。しかも雅也くという情けない叫びとセットで。先輩を伺えば、ピクツと頬を緩め苦笑いになった。

うーん。今プリントは二宮先輩が持ってるし、このチャンスは逃さない。

「二宮先輩、それを悠夜会長にお願いします！」

僕は決死の覚悟で逃げようとしたが、二宮先輩がガシッと僕の右腕を掴んだ。

「ちょい待てい。雅也……海斗は親友だろ。親友をおいていくのか？」

「すみませんが……親友という名はアイスのように溶けきって見えなくなりました！」

「親友のあり方は確かに目には見えないものだけどさつ。悠夜会長に渡すんだろ？」

「そうですけどっ何か？」

僕と二宮先輩の間ではギリギリと廊下の地鳴りが聞こえるほどの争いが起きている。両者一步も退かない。

二宮先輩の持つアメジストの瞳がキリッと僕を見据えた。

「俺が思うに悠夜はここにいない。」

「えっ？僕はだまされません。一人で入ってください。」

「悠夜がいるならこんな事態にはならない。いたとしたら悠夜がこの事態の主犯だぞ？」

「……………っ！」

そうだ。確かに悠夜会長がいたらこんな風に僕は生徒会室前で立ち往生などしない。もし悠夜会長が主犯ならBクラス生徒を集めて下級生イジメだよ！？笑顔で無理難題を押しつける悠夜会長を想像してしまい僕はあまりの恐ろしさに身をふるわせた。

「……分かりました。僕は逃げません。プリントを返してください。」

「おっ、分かったよ。ほら。」

「ありがとうございます。ではっ！」

離してくれていた手でまた腕を掴まれた。

「おいっ逃げるなよ!？」

「だから腕を放してください。逃げるんじゃないんです。生徒管理室に行くんですっ!ここには悠夜会長がいらないんでしょう?ならここに理由がありませんから。」

「ここまで来たら一緒に行くしかないだろ。それにここで帰ったら悠夜に言いつけるぞ。先輩の話も聞けない反抗的な後輩だってな?」

「きよっ恐喝ですか!?!酷いですよ……。二宮先輩。」

「そんな目で俺を見るな。ほら行くぞ。」

最終的に僕は腕を捕まれたまま生徒会へと入ることになってしまった。

二宮先輩、実はビビりかもしれないと思った瞬間だった。

第14章 後編 生徒会室は恐ろしや

二宮先輩が地獄の扉を開け放った時、僕には真っ赤な世界が見えました。いや別に比喩だから。本当に赤い液体があつたわけじゃないからね。そこ要注意！

「おいっ！？これって……。」

「二宮先輩？」

目を見開いた表情を確認したときドサツと二宮先輩が崩れ落ちるように膝をつき倒れた。

えっ？まさか……。

「……………っ!？」

二宮先輩の状態を確認するより早く腕を掴まれ中へと引っ張られた。

そこには金髪に切れ目な蒼い瞳、いつもの優しい笑顔の悠夜会長と黒縁眼鏡に黒髪の錐吾先輩が僕のことを出迎えてくれた。そして僕の腕を掴んでいるのはあいまいな表情で顔を曇らせた海斗だ。全く持ってこの状況、嬉しくない。

「雅也君。待ちわびてたよ。さあ僕に資料をくれるかな？」

最初に口を開いたのは、堂々と奥にある生徒会長の椅子に座る悠夜会長だ。

だけど僕は目の前にいる女性が気になった。

「えっ……待ってください。これどうしたんですか。」

「これ……とは？」

「分かりませんか。僕の目の前に寝転がっている副会長のことでよ。」

錐吾先輩の前に倒れているのは僕が苦手な副会長。どっちの副会長も僕は苦手だけど。そんなこと今は関係ない。

「錐吾君は寝ていないけど？」

「ボケないでください。姫野先輩のことですよ。もしや貴方たち……ごうkっ！」

今……何か飛んだよ！？じわりと首元に熱を感じた。

「何だって？雅也君。」

「っなんでもないですよ！？僕はつねに豪華だなんて思っただけです。この部屋！」

僕の首もとにかすったのは鉛筆。なぜそれが分かったのかというと後ろにある扉にガンツと刺さっている棒が鉛筆だったから。悠夜会長……そんな物を凶器として扱えるのは貴方だけですよ。

にしても僕のテンションが以上に上がってしまった。ちっ僕のキャラ設定にビビリが加わってしまうじゃないか。海斗が視線をそらすようにうつむき、僕の隣にきた。どうしたんだ？

「俺が来たときにはこうなってた。そしてこれは誰にも言ってはいけないって恐喝されたんだよ！」

いきなりテンション高くなった！？顔をあげ僕の腕を掴む海斗は本当に恐喝されたんだと物語っている。

「そっか。僕も恐喝されたよ。二宮先輩にさ。」

「その恐喝の方が良かったよ！俺なんて死ぬかと思ったんだよ？！」

「はぁ、悠夜会長は殺さないって。」

「そんなこと思ってるのは雅也だけだよ！」

はいはい、と海斗を軽く流して僕は悠夜会長にひとまず文化祭のしおりなる資料を渡した。

もう何も関わらずに僕は生きるぞ！これも見なかったことにしておこう。今日の記憶をすべて抹消。てか僕のこの高校生活もすべて抹消しないかな……。もう怖くて仕方がない。こうやって平然とした態度で接しているが内心もう冷や汗ものだ。今は亡き二宮先輩、貴方の予想は外れです。主犯は彼でしたよ。

悠夜会長は手をさしのべ資料を受け取ると思ったらガツと僕の腕をつかんだ。

「雅也君、ご苦勞様。ちなみにこの状況は。」

「つつ……誰にも言いません。見ていません。それでいいですか？」

「分かってるんだね。立派だよ。」

これ以上ないくらいの笑顔を悠夜会長はして、錐吾先輩は小さくため息をついた気がした。海斗は僕の行動に頬をひくつかせ、困惑の表情を浮かべていた。

次の日に先生から軽い連絡が入った。

副会長が一部の記憶障害で入院したことが15秒で簡潔に耳に入った。

僕の苦手な副会長。さてどっちの副会長かな。決まってるか……。

「姫野先輩……。」

第15章 ゆらめく世界

さてついに文化祭前日になりました。僕はそれなのに人生の障害物競走にくじけました。

「37，5℃かぁ。まだ風邪治らないのかな。」

僕は病室を見回し、目を細めた。部屋のサイズは2人部屋の寮室よりもせまい。潔癖を象徴する白い壁に白い床。あるのはベッドとタンスにテーブルと椅子だけだ。無駄な物がないとはこういうことかな……。

「にしてもこの学園に病院があるのかぁ。はかりしれないこの学園の財力！」

僕は起き上がりテーブルに置かれた腕時計を確認し手に持っていた体温度計を置いておく。4時35分。小さい窓から見える青空からして午後だということは確かだ。

この学園には病院さえもあるらしい。保健室など設備の整っていない施設はもはや存在意義がない。さすが金と権力はある学園だ。

コンコンッ

扉をたたく音がして僕は自然と視線を向ける。扉が横にガララと静かに移動してこの何もない世界に明かりが差す。

「お加減はいかがですか？ 玖珂 雅也様。」

入ってきた女性は白いワンピース型の制服を身につけていた。頭に

はちょこんと白い帽子が乗っている。長い黒髪を一つにしばり大人な女性を醸し出す。病院でナースを勤める斉藤さんだ。下の名前、年齢共に職業柄教えてくれない。別に興味はないからね！？こういうのはきつと海斗が喜ぶんだろうが僕はそういうコスプレ的要素と年上というカテゴリーを楽しめない。

斉藤さんは手にボードを持っていて、僕のベッド前で体調を確かめるように僕の顔色を確認した。

「熱はどうでしたか？」

「テーブルに置いてあるとおりです。」

「えっと……まだ下がってませんね。解熱剤をまた飲んでください。」

「分かりました。」

「にしても大変ですね。授業中に倒れ出すなんて……。」

「まったくです。」

僕が風邪を引いたことを確証したのは姫野先輩が入院したという報告をしてもらった日の午後。真面目に授業を受けていた僕にある異常現象が起きた。先生がドッペルゲンガー化したのだ。そしてグニヤリとゆがんだ教室と生徒たち。色が混ざり合い、黒板の緑と机の茶色、同級生の髪の色とか制服がグチャグチャと真っ暗になり僕の意識は途絶えたようだ。そして気づけばこの狭い部屋にいた。学園内の一端にある小規模な病院。

そしてナース姿の斉藤さんがその日から僕の担当看護師になった。

「斉藤さんには迷惑をかけてばかりですみません。」

「いーえ。それが私たちの仕事です。それにここってなかなか生徒や先生方が来てくれないから嬉しいですよ。仕事が出来て……。」

「夜にけが人とかは来ないんですか？」

「？なんでですか？」

「いえ、急患とかいるのかなって。」

「それは企業秘密です。」

ふふっと笑う斉藤さんに僕は裏を感じる。この病院もつながっているのかもしれない。そうだよねえそうでもないの間違って殺しかけちゃったときとか大変だもんね。

トントント

また扉をたたく音がして僕と斉藤さんがとっさに振り向いた。

「雅也君大丈夫？」

明るい金髪に夜空に日がさす直前の蒼い瞳が細められる。整った顔立ちがまぶしくて、スラッとした長身は、この強者ばかりが集まる学園で一番の殺戮を行う人には見えない。その細い体のどこにそんな力があるのか……。その容姿から『殺戮の貴公子^{プリンス}』と殺戮名で呼ばれるー悠夜会長。手にはラッピングされた果物が入っているバスケットを握っている。

もしかしてお見舞い？なんか会長だけということに嬉しいというか、怖いというか……。

「大丈夫じゃな……えっ？」

カラントカラカラー

ペンが落ちる音が隣でして僕は悠夜会長に言葉を返すより斉藤さんを見た。

顔を真っ赤に染め悠夜会長を凝視する斉藤さん。悠夜会長はあまりに斉藤さんに見られていることを気にしたのかニッコリと微笑んだ。

「どうかしました？看護婦さん。」

「えっいえっ！？なっなんでもありません！すみません。失礼します！」

駆け出すように部屋から出て行く斉藤さんに僕は啞然と目を見開く。うわっ！なんてういういしいんだ。ちょっとここ高評価だよ！？そりゃこの学園に隔離されているんだ。恋人とか作れないかもしれない。

そしてこの惨劇の主犯の悠夜会長。さっと看護師を見ることがなく落ちたペンを拾いテーブルに置いた。

「慌ただしい子だね。仕事が忙しいのかな。」

「恋の病という病気で医師に駆け込んでいるのかもしれませんが……。」

「何か言ったかい？雅也君。」

「いえ、別に……。」

悠夜会長の瞳にちょっと殺意がこもったので僕は視線をそらした。だってそうとしか考えられないでしょう！貴方は天然でそう言うこと言ってるんですか！？完璧あれは恋ですって！

「ああ雅也君。これは生徒会のみんなからだよ。」

悠夜会長から渡されたバスケットを手に取り僕は近くのテーブルに置いた。

バナナやミカンなど手だけを使って食べられる物もあるがリンゴやパイナップル……後で小型ナイフを駆使して皮をむこう。

「ありがとうございます。」

「本当はみんなを連れてきたかったんだ。だけど明日は文化祭だから連れてこれなかった。ごめんね。」

「いえ、本来なら僕も準備を手伝うはずだったのにすみません。」

「謝ることではないよ。ケガを避けることは出来ても、病気とかは仕方ないね。」

ケガって夜間授業のことですか……。確かにケガしたことないけど、不可抗力の風邪は仕方がない。

悠夜会長は近くにあった椅子に座り足をくんだ。

「悠夜会長……。」

「なんだい？」

僕は息をついて目を細めた。

聞きたいことが……。あった。何があったのか。

「姫野先輩はこの病院にいるんですね。退院しましたか？」

「ああ。退院しているよ。記憶障害といってもたいしたことないよ。大げさに言いすぎてる。」

「それは……どういことですか？」

「どうって？」

「じらさないでください。あの時の生徒会室で何が起きたんですか。」

静かに僕は問いただした。悠夜会長から笑顔が消え悲しそうに下を向いたのが僕の興味を引いた。

「姫野は知ってはいけないことを知ってしまった。それは君でも分かるだろう？」

「裏のことですか……。」

「うっかりしていたよ。平和ボケしてた。生徒会にいる時間は一般生徒でいられるってことだからね。僕は気がゆるんでいたようだ。」

殺戮生徒であろうが、一般生徒と溶け込んでしまえば感覚は戻ってしまう。悠夜会長は殺戮生徒たちからの扱いがああいうのだから一般生徒と接してる方が楽なのかもしれない。裏を知った者は何であれ普通に過ごせるわけがない。

「悠夜会長らしくありませんね。その処置が記憶をなくすことだったんですね。」

「そうだよ。僕は姫野を眠らせた。これ以上知られることは論外。この学園で裏を知る一般生徒は殺すのが一番だった。死人に口なし……誰に何を言うか分からない。」

「姫野先輩を殺す気だったんですか!？」

クラツと目眩がした。そうだ……まだ熱が下がっていないんだ。僕の症状に悠夜会長が体を寝かせるように指示したから僕は従い体を寝かせた。

呼吸が楽になったかも……。

「でもそれは過去のこと。今は医療技術が発達していてね……記憶を無くすことが出来る。その時の記憶だけをね。」

だから、か。悠夜会長は最善の選択をとったに過ぎない。

「……………悠夜会長。姫野先輩は生徒会として帰ってきてますよね?」

「もちろん。だけど姫野が入院したと全クラスに報告されると思っただけだよ。」

「えっ?でも当然の処置じゃないですか。一般生徒が記憶喪失にな

ったなら。」

「裏関係になると話は変わるんだよ。何でだろうね。」

何で記憶喪失になったのか、と同級生に聞かれれば姫野先輩はなんて答えるのだろうか。無理に思い出そうとすると悪いことになりかねない。そしたら裏を知る道へとつながってしまう。

「考えてても仕方ないね。雅也君、熱は明日までには下がりそう？」

話を変えるように微笑んだ悠夜会長。それはこの話を掘り返すことを拒否しているようだ。

僕はあまりの唐突の質問に無理です、と正直に答えた。

「ずいぶんはつきり言うんだね。」

「解熱剤を飲んでも37℃以上ですよ。きっと2、3日は無理です。」

「そうなんだ。それは大変だね。」

他人事のように言葉を返す悠夜会長。
心配してくれたんじゃないんですか!?

「そういえばこれは道化師からの連絡なんだけど。夜間授業前に見回りをすることになったから。」

「見回り……ですか？」

「一般生徒が出歩いてないか注意を払うんだよ。今回の一件で道化師は神経質になったみたいだ。いつもは『クロコ』が担当するはずだったんだけどね。やっぱり管理生が毎日やらないと意味がない。」

「えっ？」

「なんでもないよ。」

なんか僕の脳内単語帳に聞き慣れてるけど意味が違うような単語が出てきたような……。それにしても面倒くさそうだなあ……。毎日やることは目に見えている。暗黙の未来か……。夜だけにそんな感じだ。

「さて僕はそろそろ帰ろうかな。病人に迷惑かけるのはいけないからね。」

「悠夜会長。僕の風邪がうつってたらすみません。」

「僕は大丈夫だよ。人間とはちょっと違う造りをしてるからね。」

えっ！？それって貴方は人間じゃないってことですか！？思い当たる節々……。悠夜会長が登場した瞬間、倒れ出す生徒とか僕の思っていることを読めるとか！？学園で最強を誇るところとか！！その美貌と長身とか！！

「それはただの妬みになってるよ？雅也君。」

また読んでるしー！？

悠夜会長は澄ました顔で椅子から立ち上がった。

「それじゃあお大事にね。」

「ありがとうございます。あの……。悠夜会長！」

扉の取っ手に手を置いた悠夜会長を僕はとっさに呼び止めた。

「思ったんですけど……。早く悠夜会長はこの部屋から出ることが出来た。しかし貴方は何も話さないうちから椅子に座った。僕が聞きたいこと分かってたんですか？」

それはちょっとした疑問。あの日から会っていない悠夜会長は今日久々に会っていつも通りの反応だった。一人でこうして来たのも、

うつる前に帰ればいいのに病人の目の前でこうやって居続けたのも、僕にこのことを話すためじゃないかと……話が上手く行き過ぎていると思った。

僕へと振り向き彼はふっと笑った。それは妖美でありながら楽しそう。推理の種明かしをするような挑発的な目を笑顔で隠しているようだった。

「雅也君は知りたがりだからね。聞かれると思ってたんだ。それにいつかはこの学園を仕切る者になるんだよ。」

「予想内だったんですね。」

「この学園を仕切るってことは秩序を守るってこと。知らないことがあってはいけないんだよ。」

それじゃあ、と言って悠夜会長は病室から出て行った。廊下からは女性の淡い悲鳴が聞こえた気がしたがなかったことにする。

悠夜会長は年上さえも苦しめるのか。改めて実感。

それにしても結構な精神を使った。悠夜会長との一対一。あの人のオーラは存在するだけで僕を傷つける。

「なんか……………疲れたかも。」

僕はあまりのまぶたの重たさに抵抗せず、暗い闇の中へと旅だった。

人生で何となく楽しみだった文化祭が楽しめず終わった。

第16章 打ち上げは盛り上がらない

僕がいまだ年齢と悠夜会長に対する思いに疑問持つ看護士さんの斉藤さんと別れ、数日。

今日は文化祭も終わったことで生徒会室で打ち上げが行われていた。

「姫ちゃんふっかつ！みんなと文化祭出られて楽しかったよ！」

現在 生徒会室の中央ではしゃぐ女子生徒1名。壁側の机に向かい黙々と書類整理をする僕の要注意人物の先輩方2名。それとは別に2、3人の女子生徒に囲まれ満足げにお菓子を食べさせられている陽気な先輩1名。そして……。

「雅也！何だよそんなさえない顔して？今日は打ち上げ会だよ！楽しくやろうよ？」

「僕は文化祭さえに参加した覚えはないんだけど。」

楽しそうに笑う幼なじみ1名。ため息をつく僕1名。そう僕こと玖珂 雅也。

文化祭が終わって一日。僕はついに退院した。運が良いのか悪いのか……終わった後の打ち上げだけに参加するってどうなんだ？僕的には準備を死ぬ気で頑張ったのに当日出られない運命を風邪の悪魔もろとも呪ってやりたい気分だ。重要な部分だけ取り残されたのは哀しい。

「そんなのいいじゃん！雅也がいけない間の文化祭は悲しかったよ！」

「そう言う割には、クラスの友達と楽しんだって聞いたけど……。」

文化祭の個人発表ではステージ上でギター弾いてたんだって？」

「なっなんでそれを！？」

「僕の友達も海斗だけじゃないってことさ。」

クラスの男子がわざわざ見舞いに来てくれたときには驚いた。もしかして下剋上か！？僕は殺されるのか！と思ったが凶器を出すこともなく楽しそうに文化祭を語ってくれた。そんなに話したこともなかったのに……心配されるとは歯がゆい。

「親友は俺だけだろ！……にしてもなんで市川先輩、参加しないんだろう？生徒会のメンバーなら参加すべきだよ！」

海斗が真面目に拳を振るったので僕は、はいはいと聞き流した。市川先輩は確かに来ていない。二宮先輩は女子生徒と楽しそうにしているのに……。

「面倒くさいんだろうね……。それに市川先輩はいるだけでも空気が変わるといふか、もはやテンション高くして祝えなくなると思うよ。」

「……市川先輩は居るだけで凶器だからな！その気持ち分かるよ。雅也。」

うんうん、と頷きながら僕の肩に手をおく海斗。
あれ？僕って同情されてるの？

そんなこと考えてる内にもあの先輩は一人でマイクを取り出した。僕が出られなかった文化祭には復帰し、楽しいどこどりした姫野先輩のテンションは誰にも止められない。

「さあ！今日は乾杯しなくちゃ。雅也！会長と錐吾に紙コップ持っててあげて。」

「……はい。」

なっなんで僕が。視線を向けたのが行けなかったのか。うつとおしくもテーブルに並べられたジュース入り紙コップを2つ手に取り壁側の机に向かい黙々と書類整理をする僕の要注意人物の先輩方2名に差し出した。

「悠夜会長、錐吾先輩。これオレンジジュースです。どうぞ。」

「ありがとう。雅也君。」

「1年管理生、僕は別にいりません。ただでさえ書類整理が忙しいというのに……なんで姫野さんが生徒会室に来ているのか……。」

愚痴をこぼすように、はあとため息をついた錐吾先輩に僕は同感です、と節目にうなずいた。

脳天気な副会長の姫野先輩は文化祭が終わったことで書類をかかなくとはいけないのに、そんなことどうでもいいそぶりだ。まさに私と文化祭後の書類整理どっちが大切？もちろん私でしょ！的なノリかな。なんか違うけど……まあいいや。

その状況を見ていた悠夜会長が優雅な手つきで紙コップに口をつけ、につこり笑った。あれ陰りが見えるようない……。

「そんなこと言っではいけないよ。姫野は嬉しいんだよ。こうして文化祭を終わらせたことが……。公開文化祭とはこれで終わりだから。」

「ですが悠夜会長。今日中に終わらせなければならぬ書類整理が残っています。こうしている暇は、もうないはずです。」

「錐吾君。だから雅也君たちに姫野の世話をさせているんだろう。そこまでのほど仕事はないから一番書類整理が早い僕と錐吾君がこうして頑張っているんだ。文句はないはずだろう。」

意味…錐吾君が頑張ってくれば早く終わるんだよ。文句言うより手、動かしたら？

まるでそんなこと言っているように笑顔に見えた。目を細めた悠夜会長は少し怒っているようだ。それもそうだね。書類整理という雑用係なことを悠夜会長はやっているんだ。僕が変わってやりたいけど効率性を考えれば一目瞭然。悠夜会長や錐吾先輩の方が早い。何も出来ないって悲しい……。

「雅也君ゴメンね。君は病み上がりだと言うのに無理に参加させてしまつて。でも僕としては準備を頑張ってくれた感謝の気持ちとして参加してもらいたいんだ。」

困つたように笑う悠夜会長。大丈夫……この笑顔に陰はない！僕は手を振りながらそんなことありませんっとはにかむ。

「準備しか出来なかったのは悲しいことですがこうした生徒会の姿を見て良かったです。それとお見舞いの果物ありがとうございます。」

「ああ。他のみんなにもお礼を言うんだよ？それと雅也君……。」

彼の目が細くなり空気が変わる。えっ何？

「今日から夜の見回り頑張つてね。」

それは一般生徒が聞いても何とも思わないただの予定であり応援の言葉なのに悠夜会長が言うど何でこんなにも重々しい……。

僕は感謝の言葉を述べながらも、何か起こる気がしてならなかった。今日から夜の授業に参加かあ。頑張ろう。

第17章 一般生徒は影に生きる（前書き）

最初ぐろいシーン入ります。

苦手な方は浅く読んでください。

第17章 一般生徒は影に生きる

沸き上がるのは液体で手で触れてみればグチャツとなまめかしい音がした。暗闇の中でその音を聞いた瞬間、脳裏に思いつくのは僕が時に恐怖を覚え、時に快楽を感じ取ることが出来る物。それは表裏一体の感情を与え赤く黒く僕の世界を真っ白に染めてくれる。夜間授業前に1年の寮室の警備を担当するようになって初めての夜、Aクラス用寮の裏口の近くで僕は驚愕した。

「うっ……………」

少し顔をあげ、持っていたライトで照らし、その存在の発信源を視界に捕らえた時にはあまりの気持ち悪さに吐き気を覚えた。歪な物体、はみ出た細長い管、艶のある手に握れるサイズの円の形をした物。散らばっているそれらはきっと元を正せば何になるのだろうか。そして僕は目をそらすように辺りを見回して確認したのだ。涙を流しながら震える彼女を――

「ひっく……………ひっく……………」

「殺っちゃったんだね。」

「ふうえっ? えっ……………えっ!」

顔をあげた彼女は怯えたように表情を強ばらせた。この現場を見られたことに驚くように、まるで自分が罪深き犯罪を犯したことを自覚したように。

「見て……………たの?」

「見てはいないよ。でも殺ったなら早く処分しないと一般生徒に見つかっちゃうよ?」

「なっ……………そっそうだよね!どっとうすれば……………いいのかな?」
「道化師にでも頼めばいいだろ。きつと5分で片付くんじゃないかな。」

「どっ道化師って?ピエロのこと。あはっ……………そんなわけないかな?」

僕は彼女をじっくりと見つめた。小麦色の長い髪は毛先がクルツと
していて黄色のカチューシャを付けている。僕より身長が低く、そ
れは猫を見たときの可愛さに似ている。長いまつげにパツチリとし
たヒマワリ色の目は僕を見てはいない。動揺を隠せない彼女はどう
してこんなにも慌てているのだろう。初めてだったのかな?いや待
て……………この子!。

「ねえ夜間授業って知ってる?」

「えっ?いきなり何かな?」

「いいから答えて。」

「知らないけど!何ナノそれっ。」

「じゃあクラスと名前は?」

「えっと、1年A組、青柳 やなぎ ユウだけど。」

「……………」

「なっなんでそんな怖い顔するのっ!?」

僕は眉間のしわを寄せ、信じられないと言いたげな顔をしているに
違いない。それを怖い顔だと判断するだなんて失礼なっ!

まさかなことが起きていた。別のクラスに、とんでもない生徒がい
た。それも学年1位。僕が勝手にライバル視している女性だ。この
子はこうして殺人を犯している。おかしいだろ。もともと殺戮生徒
に何故いない。才能があるから殺戮生徒入りになるのだろうか。なぜ
Bクラスじゃないんだ?そして彼女が殺したのは誰なんだ?あれ…
…?人を殺すことを悪いと思わない僕は少し心が停滞しているよう

だ。でも普通の人が生徒が見たらこの学園の存続に関わる。この学園の裏がばれる。そしたら僕たちはどうなるのだろう。……消されるかもしれない。この学園の権力と金なら可能だ。

そんなの絶対にさせない。さて、どうする？この状況……どうすればいい。

「しょうがない……。」

「えっ？どっとうしたの？」

「まずこの死体を処理する。この時間帯ならクロコがいるはずだな。」

「くろこ？」

「黙ってて。」

僕はボソッと「道化師。」と呟きライトのスイッチをカチャツとつけた。3分もしないうちにガサガサと近くの木が揺れ黒い服装に身を包んだ人が現れた。

「なっ誰！？黙っててって言ったでしょ。」

彼女の口を強制的にふさいで相手の言葉を待つ。

「赤石先生は現在、南校庭に移動中です。用件なら私が聞きます。」

学園内裏組織の『クロコ』―それは死体処理から殺戮生徒の管理、一般生徒が夜間授業を気づかれぬように欺き動く者達。黒い服装に身を包み、この学園の裏を守り通す大人達の集まり。普段は悠夜会長と道化師にしか尽くさないが僕は特別に使わせてもらっている。

「道化師に伝えてくれ。今日の夜間授業は辞退するとのこと。そしてこの場を片付けてほしいんだけど。」

「御意。……………一つお聞きしたいことが。」

「何…………？」

「その方は殺戮生徒なのですか？そしてこれは管理生、貴方がやったものですか？」

疑うように声が冷徹。クロコは疑い深い輩が多い。忠実に従うだけの使いではない。

「僕がやったんだ。彼女は殺戮生徒だ。他に何か聞きたいことは？」
「いえ。後はお任せください。管理生。」

嘘も万弁。僕はとんでもない嘘をついてしまった。

クロコを尻目に僕は彼女を確認する。彼女の顔が驚きの色に染まっている気がした。それはどの現実に驚いてるのか。おそらく、僕の平然とした態度と夜間授業にたいしてかな？あと僕の男前の性格も付いて来て、と彼女に冷静な心が戻るように囁けばうん、とおとなしい返事が返ってきた。

とりあえず僕は彼女にー青柳 ユウさんの猫のような可愛さに守りたい精神が働きかけてるのだ。さてどうしようかなあ。かっこよく決めてたつもりだけど…………とりあえずあの人の元に行こうと足を早め彼女の手を引いた。

歩いて数分ー。

彼女は立ち止まった。どうしたんだろう。

「ねえっこれからどうするの！私は私は人を殺してっえ、違う。あれは私じゃない。私じゃない！そうよ。君がやったんだよね？そう

だよ。だってそう言ってたよね！？目の前は真っ白、違うよ真っ赤だよ。何でこんなことに……。分かんない。分かんない。さっき私に何が起きたのっ。」

今、彼女は自分との葛藤に戦っているらしいのか両手で頭を抱えている。今更、さっきまでの落ち着きはどうしたんだ。でもせっかく手握ってたのになっ。ショックだよ。彼女を見る限り分かるのは狂ったように自問自答する困惑した言葉を浮かべるだけだ。僕の10分前の思考に前言撤回ー彼女はおかしくなどない。正常者だ。

「えっと……大丈夫？」

「何が？そっちこそ大丈夫？私は何もしてない。したのは君！そう貴方だけ。おかしいよ君。なんで殺したの？黙っててあげるから私を逃がしてよー！」

でも壊れた正常者なんて目障りなだけだ。逃がしてよって僕、彼女に何もしてませんよ？僕は彼女の手をさっと掴んだ。交わり会う僕と彼女の視線。黄色い瞳は涙で緩んでいる。

「えっ……何よー。そんな怖い目で見ないでよー。」

「ちゃんと現実を見ろ！」

震える彼女は怯えた目で僕を見つめている。そんな表情、するな。僕の壊れた心が反応するだろ。

「青柳 ユウ！君が殺したんだ！何で逃げようとするっ。まず僕の質問に答えろ。」

「なにっ何なのー。」

「誰を殺した？生徒？先生？それとも知らない人？」

「だから私は誰もころし……。ころしっここころしてなんてっ。」

「落ち着け！ちゃんと見て。今をこの瞬間を。」

最小限の優しさを言葉にし、僕は彼女を抱きしーこれ以上は出来ないな。せめて手掴む程度でキープ！

僕の内心も知らず、彼女は胸辺りの服をぎゅっと掴んだ。苦しがつてる姿ー。ああ、そそるなあ。

「はぁ……はぁ……そう。そっか。そうだね。私が殺したの。親友、なの。あの子とは友達で軽い言い争いがーあの子はあの人が大好きで！私も好きで好きでっ。」

そして彼女は涙を浮かべた。ぐさっ！精神面に500のダメージ。

「好きだったのに友達があっあんなこと言うから！」

「……あんなこと？」

「あの人が実は人を殺してる、って。」

その子は知っていたのか！？だとしたら危険だ。この学園が。

「その子はどうやってその状況を？」

「夜、寮の裏口から抜け出したみたいなのっ。その子だけが知る道があつて、私だけに教えてくれるって言うてくれたの。」

だとしたら大丈夫なのか。いや後でその子だけが知る道をふさぐ必要が。にしてもクロコ達は何をしていた。道化師の『使い』として夜、一般生徒が夜間授業を目撃しないように見張っていたんじゃないのか！？

「そうか。ねえ青柳さん。」

「えっと……ユウでいいよ？」

「ユウ。僕の話聞いてくれ。僕はこれから君を悠夜会長の所まで連れて行こうと思うんだ。」

「なったんで？ いやっ嫌だよー！ 会長ってあの有名な会長でしょ？ なんで私なんかをあの人の元につ。」

「君を救える方法なんだ。これはー。」

僕はそろそろ腹をくくるしかない。そうだ。これからどうするか、が大切なんだ。

「もう嫌っ！ なんなの！？ もう私を警察でもなんでも連れて行きなさいよ！ 会長に会うぐらいなら死んでやるんだから！」

「……それ本気で言ってる？」

「……………えっ？」

彼女の瞳がまた大きく開かれる。それは恐怖を写している。僕が持つ物に驚いているんだ。

ナイフをベルトから抜き出し彼女の首元に当てた僕は、早くこの状況から抜け出したかったのかもしれない。

「選ぶと良いよ。悠夜会長の元に行き、生きるか。それとも今ここで死ぬか。ちなみに殺してもここでは罪にならないんだよ？」

「どつどういうこと？ なんでそんなもの。」

「君はよくやったよ青柳 ユウ。裏を知った者は殺される運命さだめにある。ユウ、君もその一人かもしれない。」

「私……殺されるのっ。嫌よ！ なんで私がっ！ 死にたくないよお。」

僕の胸元を掴んで泣き叫ぶ青柳 ユウ。今度は死にたくない、か。精神不安定者……を目の当たりしてこれが普通なんだと思った。そうだ、殺したら困惑するんだ。自分が悪くないと思うんだ。でも今の僕にはそんなことさえ考えるのをしなくなってしまった。壊死し

た心に慣れてしまった。そうだ。悪いことなんだよ。人を殺すって言うのは。

僕は彼女を強く見つめた。

「僕も出来れば殺したくないんだよ。だけどこれは僕一人で解決できる物じゃないから勝手に君を殺すことは許されていないんだ。だから連れて行くんだよ。悠夜会長の元に。」

彼なら彼女を生かす方法を知っているかもしれない。

殺すことはいけないことだって僕に分からせた彼女。悲しみに、背徳心に、常識を無視するのはいけないんだ。彼女はそれを思い出させてくれる。その感情を思い出させてくれた。彼女は新鮮で僕は彼女を手元に置きたいと思ってしまった。

さあ、どうなる……。

もしかしたらそれを見つけた僕自身が彼女を殺すよう言われるかもしれない。

でもそれでも悠夜会長に頼るしか方法はなくて、道化師に言わなかったのは彼だったら冷徹に殺せ、と言いそうだったから。

第17章 中編 一般生徒は陰に生きる

静かな夜に誰も近寄ることが許さない生徒管理室。この学校は生徒が優秀すぎる故に放任主義となってしまったが生徒管理室に立ち入ることが許されている者達のお陰により荒れた学年にならず以前よりも規律が正されたことから生徒管理生が誕生した。優秀な者だけが足を踏み入れられる夜の生徒管理室は明かりなど全く付いていなかったが気配は感じる。そこに僕が求めている人がいる。

「こんな時間に……なんのようだい？ 雅也君……と君の友達？」

綺麗な金髪は闇夜でも存在を主張している。だが彼の神経が研ぎ澄まされている蒼眼はこの闇夜ではなんとも冷たく黒くこの世界以上に深い闇を抱えているように見えた。

僕と青柳 ユウはついに生徒管理室にようやく足を忍ばせることに成功した。この部屋に入ってから青柳 ユウはどこか震えており僕の後ろに隠れてはぼそぼそと言っている。どうやら精神がまいっているらしい。僕は一步 足を踏み出し彼と視線を交じらせた。昼間とは違う悠夜先輩の裏の顔。

会長に事態を説明しなくては……。

「悠夜会長、彼女はA組の青柳 ユウです。」

「夜の学校に一般生徒が足を忍ばせようとさせるなんて君は彼女をこの学園から抹消させたいの？」

「いえ、むしろ彼女はこの学園には惜しい存在だと思うんです。」

「惜しい存在？ この学園にも優秀な生徒ばかり。OBもあわせてごまんといるよ。」

「殺戮生徒としてってことです。」

「ああ……もしかしてさっきこの学園の生徒を殺したのは君じゃなくてその子なんだね？」

「なんで……分かったんだ？僕はまだ何も説明していない。なのに！？」

僕は驚いたように眼を見開いたが彼はゆったりとした動作でソファーに座り足を組んだ。暗闇からでも相手の顔を認識できる。うっすらとした優しい笑顔。彼の得意な笑顔。

「電気を付けてもらっても良いかな？錐吾君。」

「え……？」

錐吾先輩？そんな先輩 見かけた覚えも気配も感じないのに……。

「この部屋……いる。先輩が……。」

背中から聞こえた声に弱々しい声とは裏腹にぱちっという照明音がして部屋に明るさがともった。いきなりの光につい目を細める。ロイヤル系の調度品、ソファーにローテーブル。書棚に碧いバラが豪勢にさされた花瓶までも僕の視界には写った。それと黒髪に漆黒色の眼を持つ無表情な先輩の顔を。

「僕がいることに驚いているんですか？一年管理生 貴方はまだまだ甘いんですよ。」

「まあまあ、錐吾君。彼もまだ完璧じゃないんだから気配を消されたら分からないんだよ？君も座ったらどう？ほら雅也君とそこの可愛らしい彼女も。」

「黙ってください。僕は今一年管理生と話をしてるんですよ。」

「そう？その前に会話は成立してないみたいだけど？」

「……………はあ。」

「座ってくれるよね？」

「……………」

相変わらず二人の氷点下の言い争いは凄まじいが今回は錐吾先輩が折れた。悠夜会長の隣のソファ―にため息混じりに座った。僕も青柳 ユウの手を引いて二人掛けのソファ―に腰をおろした。

なんか……やっぱりこの二人の先輩を見るとこれが日常に覚えてくる。

「さて雅也君。話を聞かせてよ。僕が聞いた情報は君を殺した事だけ。だけど君がこんな何ともないような日に殺人を犯すのは可笑しい。だって君は自我を持つ殺人兵器。ただ血肉をもとめる殺人鬼とは違う存在でしょ？」

もう全て分かっているのなら正直に話すしかない。

僕は順を追って話した。見回り中に出会ったこと。寮には抜け道があり夜間授業を知っていたものがいたこと。そして彼女にはそういう才能があるかもしれないことを。

一通り話したことで彼女を落ち着きを取り戻していったみたいで身体はふるえてはいなかったもののとても複雑そうな顔をしていた。それは錐吾先輩も同じで眉間に皺をよせ考えてるみたいだ。ただ一人、悠夜会長は相変わらずの笑顔だった。

「なるほどね。彼女が殺したと……それも原型をとどめないぐらい。面白いね。どう思う？ 錐吾君。」

「道化師に見つからなかったことが幸いです。もし見つかってたら彼女も殺されてたことでしょう。」

「だろうね。でも僕らは多くの死を望んじやいない。最低限の死は避けるべきだ……。」

「……何か考えがあるんですか？」

「まあね。雅也君 僕に彼女の命を預けてくれないかい？」

何かを含んだ笑顔で悠夜会長は僕へと話を持ちかけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0961i/>

刹滄(殺戮)学園

2011年4月19日12時56分発行